

第17回 全国バス学習研究集会

実践発表要項

期 日 昭和57年8月27日(金) 28日(土)

会 場 三重大学教育学部

主 催 全国バス学習研究会
三重教授・学習過程研究会

後 援 三重大学教育学部教育心理学教室
三重県教育委員会
津市教育委員会

目 次

日 程

会 場 案 内 図

実践発表研究会

1. なかまづくり
2. 効果的な話しあい学習
3. 思考を深める相互作用
4. 非行を生みださない指導
5. 学力と人間関係の同時達成
6. ゆたかな人間形成をめざして

研 修 講 座

1. 小学校低学年講座
2. 小学校高学年講座
3. 中学校、高等学校講座

1 日 程

日	10:00		11:30	12:30	14:30	14:45	16:00	16:40	18:30	
8月27日 (金)	受付	実践発表 研究会	昼食	実践発表 研究会	会場 移動	全体会	全国バス学習 研究会総会	会場移動	懇 親 会	
日	9:00		10:45	11:00	12:00	12:30				
8月28日 (土)	受付	研修講座	会場 移動	講演	閉会 行事	教 育 視 察				

2 実践発表研究会（別紙参照） 27日（金） 10：00～11：30
12：30～14：30

3 全 体 会

挨拶	三重大学教育学部	市川千秋
	全国バス学習研究会会長	永井辰夫
祝辞	三重大学教育学部	栗原弘
	三重県教育長	佐々木昇
	津市教育長	田岡草生

実践発表研究会報告

4 全国バス学習研究会総会

5 研修講座（別紙参照） 28日（土） 9：00～10：45

6 講演 28日（土） 11：00～12：00

演題	バス学習研究のねらい	
講師	全国バス学習研究会名誉会長 名古屋大学名誉教授	塩田芳久

7 閉会行事

挨拶	三重大学教育学部	市川千秋
連絡事項	全国バス学習研究会事務局	牛尾照夫

11. 実践発表研究会 27日 10:00 ~ 11:30 ・ 12:30 ~ 14:30

校種	番号	主 題	内 容	発 表 者
小 学 校	1	なかまづくり (低学年)	なかよし学級づくり 教えあいから話しあいへ	柳内 翠 兵 庫 姫路市城北小 三里 英子 兵 庫 竜野市小宅小 吉田ハル子 徳 島 徳島市福島小 広島県豊高校区教育推進協議会
	2	効 果 的 な 話 し あ い 学 習 (中学年)	学習過程の工夫改善 支えあう学習集団づくり	是次 紀勇 三 重 安芸郡豊津小長 市場 郁也 兵 庫 姫路市八木小 野瀬 隆 滋 賀 神崎郡五個荘小 後藤 健二 岐 阜 瑞浪市瑞浪小 辻 善造 愛 知 春日井市小野小 小林 俊広 兵 庫 加西市北条小 北村 艶子 徳 島 徳島市八万南小
	3	思 考 を 深 め る 相 互 作 用 (高学年)	個人思考と集団思考 人間関係の高まり	吉井 秀人 三 重 一志郡波瀬小長 友本志津雄 滋 賀 神崎郡五個荘小 大関 敏 新 潟 五泉市五泉南小 斉木 秀弘 愛 知 春日井市西山小 津野 敬子 兵 庫 姫路市城南小 吉田 広 兵 庫 加西市北条小 吉村 一雅 岐 阜 土岐市泉西小 小倉貴美子 徳 島 徳島市助任小
中 学 校 ・ 高 等 学 校	4	非 行 を 生 み だ さ な い 指 導	学級集団の育成 落ちこぼさない授業 自主活動の推進	市川 雄二 三 重 鈴鹿市神戸中 松田 福義 兵 庫 姫路市安室中 林 康男 愛 知 春日井市藤山台中 広島県豊高校区教育推進協議会 山田 利彦 岐 阜 土岐市泉中 名賀 一三 兵 庫 姫路市城乾中 福本 友三 兵 庫 揖保郡太子西中
	5	学 力 と 人 間 関 係 の 同 時 達 成	学習集団の育成 集団思考と教育学による 学習のシステム化 目標と評価	伊藤 三洋 三 重 四日市市朝明高校 伊藤 文雄 愛 知 春日井市東部中 遠畑 勝人 盛 岡 盛岡市河南中
	6	ゆ た か な 人 間 形 成 を め ざ し て	ゆとりと充実をめざす (学校裁量時)教育 道徳(同和)的実践力を 高める指導	岸本 博好 兵 庫 姫路市白鷺中 笹尾 秀登 兵 庫 姫路市花田中 広島県豊高校区教育推進協議会

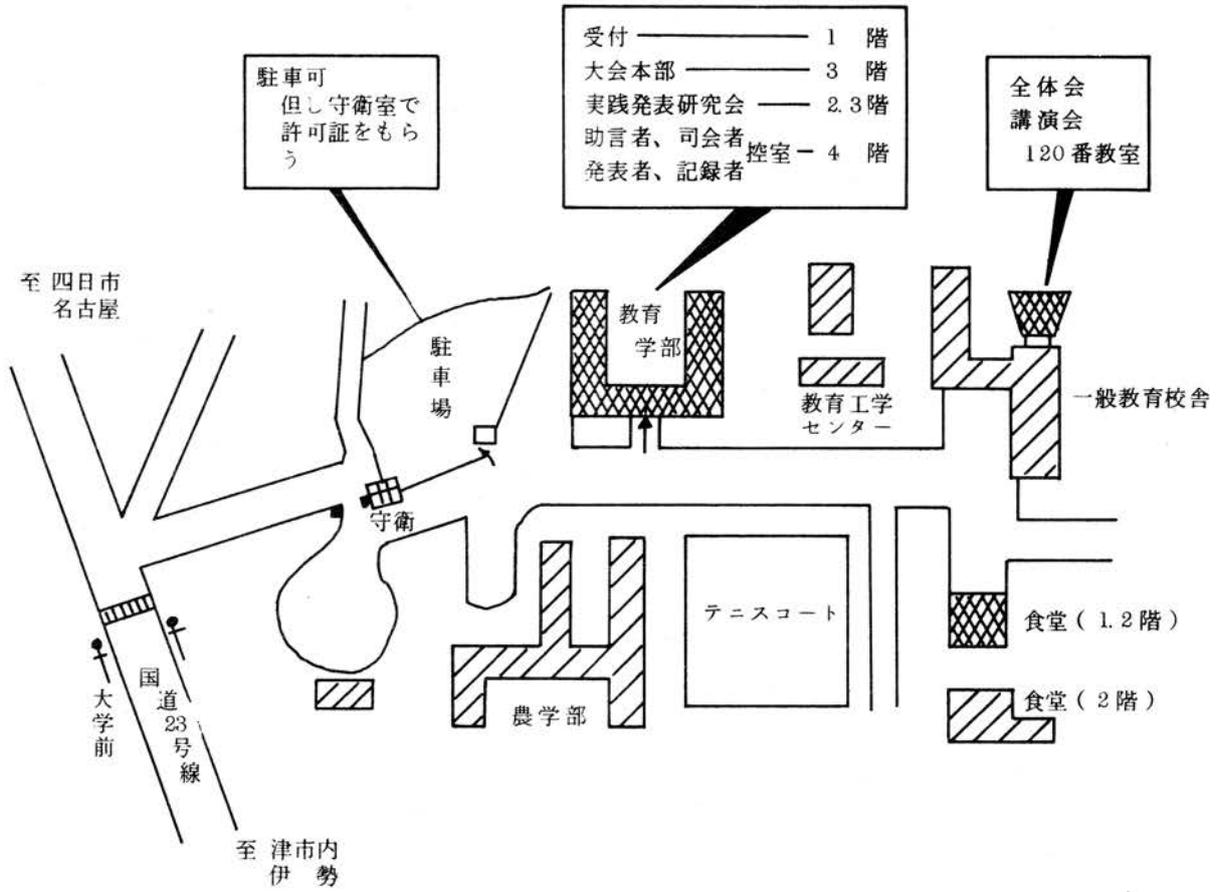
12. 研 修 講 座 —バズ学習による授業改善— 28日 9:00 ~ 10:45

講 座	司 会 者	講
小学校低学年講座	中川 豊 兵 庫 姫路市曾左小学校長	四宮 恒夫 徳 島 元福島小学校長 杉江 修治 中京大学 小石
小学校高学年講座	加藤 孝史 愛 知 春日井市西部中学校	白井 仁 愛 知 豊川市教育委員会 鹿内 信善 北海道教育大学 梶石
中学校・高等学校講座	乾 和夫 大 阪 寝屋川市第三中学校長	越智 昭孝 広 島 豊高等学校 永井 辰夫 稲沢女子短期大学 市中

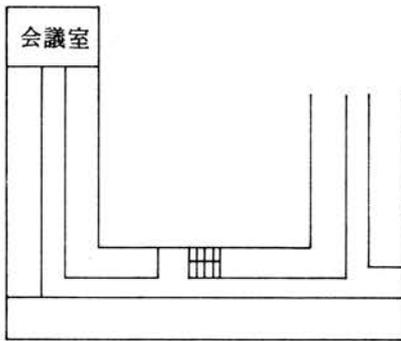
司 会 者	指 導 助 言 者	記 録 者
丸山 正克 愛知 豊川市平尾小 水野 明 愛知 春日井市北城小頭	駒田智寿子 津市教委 中野 靖彦 愛知教育大学 石田勢津子 名古屋大学 尾上 茂夫 兵庫 姫路市城乾小長 金治 晴治 元兵庫 竜野市小宅小長 石河竹二郎 滋賀 彦根市旭森小頭	野口 俊史 三重 上野市依那古小長 広島県豊高校区 教育推進協議会
高村 博 滋賀 神崎郡五個荘小 森本 俊和 兵庫 姫路市城南小 池上 誉雄 徳島 鳴門市鳴門東小長	西川 和夫 三重大学 石田 裕久 名古屋大学 小石 寛文 神戸大学 石部 清和 滋賀 愛知郡愛知川小 石原 貢 兵庫 姫路市船津小長 四宮 恒夫 元徳島 徳島市福島小長	浜野 秀夫 三重 鈴鹿市庄内小長 大久保正治 兵庫 姫路市城南小
吉田 忠夫 三重 鈴鹿市井田川小長 岩田 鎮人 愛知 春日井市篠原小 内田 徹 兵庫 加西市北条小	梶田 正己 名古屋大学 西村 博 神崎郡五個荘小長 溝端 昇 兵庫 姫路市城南小長 土屋 邦雄 新潟市曾野木小長 森 寅三 元滋賀 神崎郡五個荘小長	有門 秀記 三重 四日市市三重北小 荻原 愛子 愛知 春日井市勝川小
加藤 倅一 兵庫 姫路市安室中頭 望月和三郎 東京 小平市小平三中頭	千葉 時男 津市教委 鹿内 信善 北海道教育大 鈴木 武士 元兵庫 竜野市教育長 大西 忠雄 兵庫 姫路市白鷺中長 梶田 稲司 元愛知 春日井市東部中長 加藤 秀太郎 岐阜 土岐市泉中長	石垣 浩昭 三重 桑名市光風中 山本雅楽子 兵庫 姫路市安室中
高磯 忠実 兵庫 姫路市白鷺中 古川 敏 徳島 那賀郡桜谷小長	栗原 弘 三重大学 杉江 修治 中京大学 成瀬 信一 元岐阜 土岐市泉中長 塚本 利郎 兵庫 姫路市琴陵中長 新田 正彦 広島 豊田郡豊高校長	西井 慶子 三重 鈴鹿市神戸中 大藤 巧 兵庫 姫路市白鷺中
福島 達郎 兵庫 姫路市城乾中頭 広島県豊高校区教育推進協議会	紀太 功 三重県教委 戸田 晋 三重大学 塩田 芳久 名古屋大学名誉教授 石本 敏三 兵庫 姫路市高丘中長 越智 昭孝 広島 豊田郡豊高校	広島県豊高校区 教育推進協議会

師	
石 寛文	神戸大学
田勢津子	名古屋大学
田 正己	名古屋大学
田 裕久	名古屋大学
川 千秋	三重大学
野 靖彦	愛知教育大学

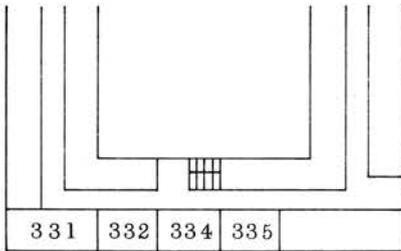
会場案内図



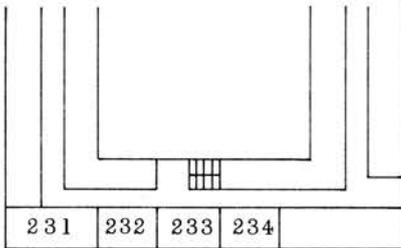
教育学部校舎 会場配置図



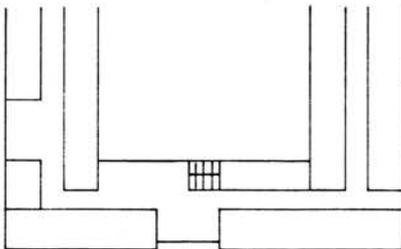
4階 会議室 司会者
 助言者 控室
 発表者 打合せ室
 記録者



3階 331 第3分科会
 研修講座、3
 332 本部
 334 参加者控室
 335 第6分科会



2階 231 第1分科会
 研修講座、1
 232 第2分科会
 研修講座、2
 233 第4分科会
 234 第5分科会



1階 ロビー 受付

受付

第17回バズ学習研究集会 (分科会番号 1)

みんなを生かす 学級づくり

姫路市立城北小学校

柳内 翠

要旨

ひとりより みんなであそぼう たのしいよ。

1年生 S子のつぶやきが、兵庫県同和教育標語 第1位に入選。8月11日、神戸市文化ホールで 兵庫県知事賞を受ける、。。。。。

子どもたちの友だち意識を育てる仕事が、学級担任にとって最も大事なことだと思う。教室の子ども ひとりひとりが異った条件のもとに生まれてきて、いろいろなタイプの子が机を並べて生活をしていく。

そんな集団の中で、反発したり、協力したり、けんかをしたり、笑いあったりして 教育活動が続けられていく。

その「学級づくり」が、すべての指導の出発点であるといえる。

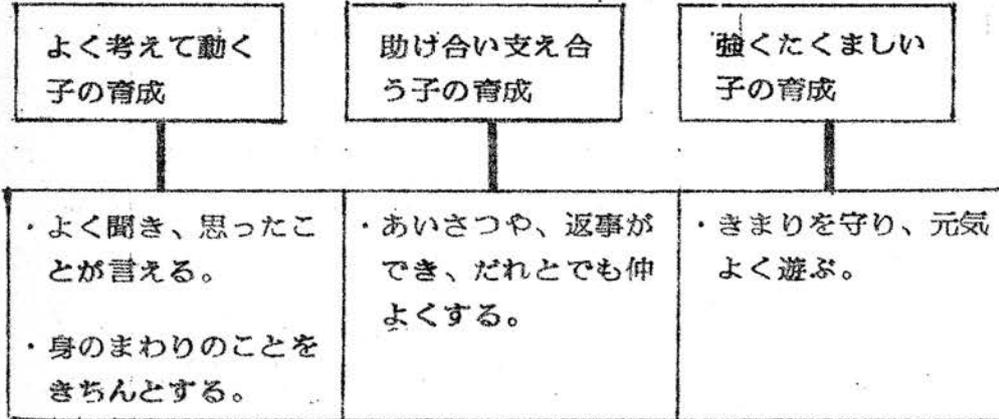
それは、互いに相手を知り、理解し、認めあっていかねば集団としての高まりも、個人としての高まりも望めないからである。入学したばかりの子どもたちは、ひとりの子と教師のかかわりであったり、ひとりの子とひとりの子のかかわりにすぎず、集団としての学級は、まだ形成されていないので徐々に しくみづくり (集団の組織、役割、コミュニケーションの訓練) や よりどころづくり (許容、所属性、連帯感、仲間意識の育成) を実践していかねばならない。

この期に「学校は楽しいところ」と思えるような 教室の人間関係を正しく育て、好ましいふん囲気で、メンバーひとりひとりの学習効果を高めたい。

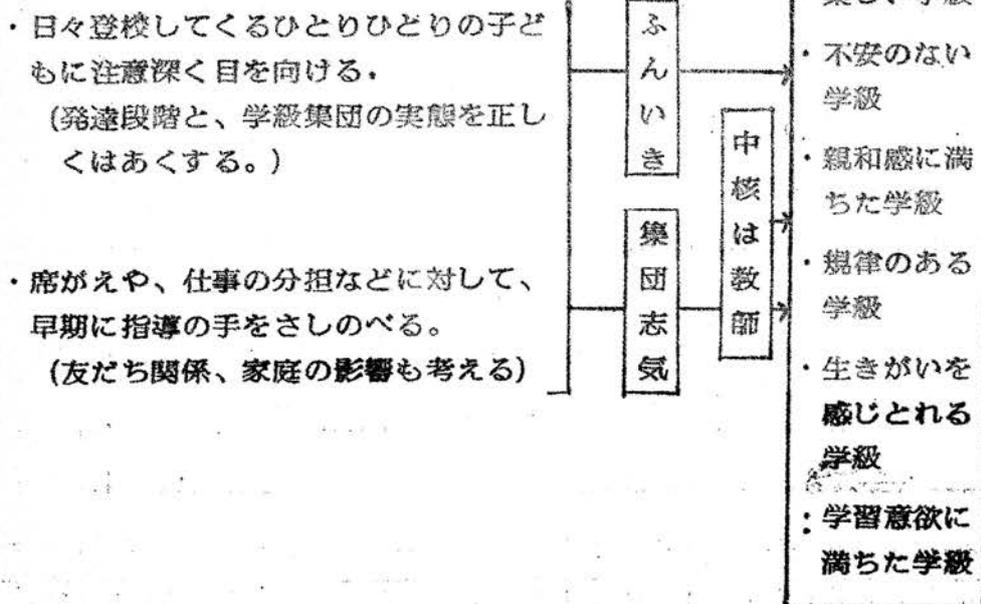
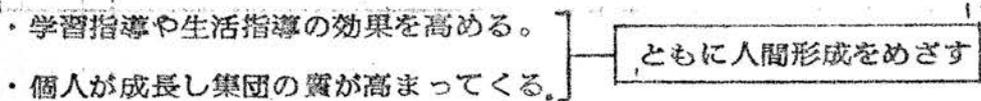
研究内容

1 人間形成のための環境づくり

(1) 城北小学校の努力目標と学年具体目標 (1学年)



(2) 望ましい心的環境をつくる。



2 指導の重点

(1) 学習指導

- ・生活との関連を重視して、多角的な学習を行い、楽しんで学ぶことが出来るようにする。
- ・学習態度の育成に留意し、聞く態度、発表する力を指導する。
- ・書く力、読む力、合理的処理能力を中心にした基礎学力の充実を身につけさせる。

(2) 生活指導

- ・自分から進んで活動ができ、自由にものが言える児童に育てる。
- ・学級集団の生活を楽しみ、明るい毎日が送れるようにする。
- ・仲よしグループの育成をはかり、仲よしづくりを強力に進める。

(3) 教科外指導

- ・健康安全に留意し、保健衛生の習慣を身につけさせる。
- ・一人一役の仕事を持たせ、給食当番 掃除当番など積極的に役割を果たさせる。

(4) 学級活動

- ・学校生活に対する親しみが増すように教室環境の設営は子どもと共にする。
- ・誕生会、七夕会、おたのしみ会などを再々行い、友人相互の理解を堅め集団生活の楽しさを味わせる。

(5) 家庭との連絡

- ・毎週一回の家庭通信を行ない、学級・(学年) と家庭の結びつきを深めるように努力する。
- ・連絡ノートを活用して、問題児の指導、事故の防止につとめる。
- ・学習のこと、生活のことなどよいことをした時も知らせる。

3 全員参加をめざす集団づくり

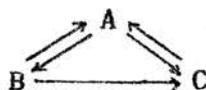
(1) しくみづくり

- ・机友だちと体を通して親和感をはかる。
あいさつ、握手、指すもう、腕すもう、物の貸し借り、教えあい。
- ・一人一役の組織をつくる。(課題により異った編成をする)
ペア、4人、6人、等質、異質。
- ・コミュニケーションの訓練 (個人、小集団、全体の場合での訓練)
聞く、話す、読む、書くの基本的形式を教える。
さらに新しい形式を引き出し、みんなで作くりだしていく。
- ・友だち関係をつかむ。(グループ編成の基になる)
「一緒に遊びたい人はだれですか、先生に知らせてちょうだい」
と呼びかけ、アンケート、ゲス・フー・テスト、ソシオメトリック
テスト、日記、作文、などをかかせる。

(2) よりどころづくり

- ・支持的風土(許容と支援の態度)や連帯意識を育てる。

二人の協力から出発し、
学級内に A 子を多く育てる、



- ・自分の分担に責任をもち、相手にだけ負担をかけない子を育てる。

おわりに

話し合いのルールや学習態度の訓練を 入学期にしっかりとしつけること、
仲間のために献身する子を育て、みんなを生かす人間関係をつくり上げる
ことをねらって歩んできた。

子どもの言葉に耳を傾け、子どものつまずきやまちがいを笑わず、自ら足
りないところを補ってきた。

しかし、子どもの生活をみつめ、目に見えない人間関係をとらえていく
ことはなかなか容易ではないことを知った。

研究主題

なかよし学級づくり

教えあいから話し合いへ

兵庫県竜野市立小宅小学校 三里 栄子

1. はじめに

子どもの積極的な学習参加によって学力の向上をめざすとともに、人間関係を高めるため、ひいてはそれが社会的人間育成につながるものと考え、バス学習を実践している。

私の担任している一年生でも、なんでも言える望ましい学級集団、そして全員参加の学習によって学力を向上させようと出発した。

しかし、一年生の発達段階からみてバス学習をとり入れても授業の中での広まりや深まりはあまり多く期待できない。

入門期には、レディネスを養うという意味で豊富な経験を与えることに重点をおきたい。

2. 実践

◎学校全体でのとりくみ

(1) 話し合いの約束

	話し方	聞き方	バス長の役目
一	1 みんなの方を見て話す。	1 話している人の目を見て聞く。	1 仲間の世話ができる
	2 みんなに聞こえる声で話す。	同じ考えのときはうなづく	・作業がみんなできているか注意をする
二	3 最後まではっきり話す。		・話し合うことや、考えるところなどをメンバーに伝える
年	……です。……ます。 ……ました。 ……と思います。		
	4 わからないことはたずねる。 ……わかりません。		

(2) 声のものさし

- | | | |
|------|----|--------------|
| 0 の声 | —— | 口をとじる |
| 1 の声 | —— | となりの人と話す声 |
| 2 の声 | —— | グループの人と話す声 |
| 3 の声 | —— | 教室の中で話す声 |
| 4 の声 | —— | 教室の中で号令をかける声 |
| 5 の声 | —— | 運動場で号令をかける声 |

(3) グループ編成

低学年 —— 2人～4人

中学年 —— 4人

高学年 —— 4人～6人

(偶数が基本)

(4) 課題と発問に重点

各学年毎にグループ研究を行い それをそれぞれの学級で授業し、結果を持ちよって話し合う。

(5) 目標を明確にする

- ・認知的目標……具体的な目標 (その時間に気づかせたり、理解させたいこと)
- ・態度的目標……学級経営的な目標 (例 / の声で話し合う相手の人を見て聞く。)

教科における目標 (例 文字がはやくノートに書ける。)

◎ 学級でのとりくみ

4月～5月 —— 生活の中で

(1) 入学当初は1日も早く学校に慣れさせるために、できるだけ楽しいふんいきをつくり、話す機会も多くする。

- ・自己紹介 (氏名、地区名、すきなもの)
- ・となりの友達の名前を言う。
- ・きのうのことを話す。

(2) みんなにわかるために努力したこと

- 1 「はい」「いいえ」の辺事をはっきりする。
- 2 「○○です。」と語尾を最後まではっきりと話す。
- 3 先生や友だちに聞こえる声で話す。

(3) 行動はいつもグループで (ペアグループ)

- ・当番 ・そうじ ・係活動 ・遊びなど

6月～7月 —— 学級の中で

(1) 学習のきまりをきめて バズ学習を始める。

- ・ペアバズ --- 2人で1・2と発表の順を決める。

(できるだけ発表の少ない児童が1になるよう配慮)

- ・国語の授業で --- 確認バズ

題 材 あそんだときのこと

認知的目標 昨日遊んだことを思い出して5Wをおとさずに作文を書く。

態度的目標 となりの子に書くことを小さい声で話す。

学習課題 きのうあそんだことをよくわかるようにかいて、せんせいやおともだちにお知らせしましょう。

展 開

A 学 級	B 学 級
1. きのう学校や家で遊んだときのことをよくわかるように話しましょう。	
2. ○○さんの話と先生の話とどちらがよくわかるでしょう。	
○○さん ぼくは、きのう、ゆうちゃんと かわでやごとりをしてあそびました。	
先生 やごとりをしました。	
※2文を比較させるとこどもたちは5Wを入れて話さなければ話がわかりにくいことに気づいた。そこで次のステップに入った。	
・だれが いつ どこで だれと どうした をおさえる。	
3. 自分が書くことをカードを使いながらとなりの子に話しましょう。 (グループバズ) ・5Wをひとつひとつ確認させる	3. みんなに話したことをだれが、いつ、どこで、だれと、どうした。をぬかさないうにかいてみましょう。(一斎)

4. 話したことをかきましょう。

この展開のようにA学級では、バズをしてから書く作業を始めると、5Wがきちんと書けなかったのは37名中5名で、所要時間も短時間であった。

B学級では、バズをしないで一斉に指導して書いたので37名中11名という結果である。したがってひとりひとり確かなものにするためにバズの必要性を感じた。

・理科の授業で――見つけバズ

単元 あめのひ はれのひ

認知的目標 雨の日の晴れの日地面と空の様子の違いを見つける。

態度的目標 ビデオを見て違いを考える。

学習課題 あめのひとはれのひじめんのちがいをみつけましょう。

展開 (雨の日に授業を行う)

1. 雨の日の運動場の様子はどのようになっているでしょう。

2. あめのひと はれのひのひじめんとちがいをみつけましょう。

・ビデオを見てくらべましょう。

・となりの子とみつけたことを話しましょう。(グループバズ)

※話し合いが終わったら必ず2人手をつないで立つ。

3. 外に出て水たまりで遊びましょう。

見つけバズでは、発表の少ない児童が手をつないでいる児童と一緒に発表するので自信をもって発表ができていた。

3. おわりに

・歩みのあと 仲間づくり

話し合いの約束の高まり

・今後の課題 全体バズの広まり

第17回全国バス学習研究集会 (分科会番号1)

研究主題

なかまづくり

—— 教えあいから 話しあいへ ——

徳島市福島小学校

吉田 ハル子

要旨

現在担任している2年生は持ち上がり学級である。数名の児童は活発な学習態度であるが、その他の児童は後身的であって自分で考え、自分から話すということができない。中には、他の子どもの意見をききながら自分の考えをまとめている子もあろうし、発言をしても拒否したり攻撃されたりするため閉鎖的になっている子どももいる。

よい学級づくりはよい人間関係を育てることである。お互に励まし合いみがき合いひとりひとりの子どもが自分の考えを気楽に話すことができ喜んで学習をすることが望ましい学習態度をつけ、教育効果もあがり学力が向上していくと考える。以下入学からの実践についてのべてみたい。

研究内容

1 実態調査

(1) 児童に対する調査

ア 基礎学力調査

イ 交友関係調査

ウ 就学レディネステスト

エ 児童生活調査

オ 聞くことの調査

カ 話すことの調査

(2) 保護者の子どもに対する調査

(3) 結果の考察

ア 児童に対する調査

(ア) 話す相手の方を見て聞ける子どもは25% 話す途中で何かいう子どもが46%ということは、聞く力の基本が十分でないということが分かる。

(イ) 聞く態度はよいが内容がつかめないのが50%もある。聞きとる必要感と

積極的態度が無いと思う。

- (7) 話さない子が半数いるし、話す子どもの10%の子どもは何でも平気で話せるのはテレビの影響であろうか。保育所や幼稚園での集団生活のためかと思う。

イ 保護者の子どもに対する調査

- (7) 短所として「落ちつきがない」ことが断然多いことは、聞くための集中力ができていないとも考える。
- (4) 「自分の考えを言える子」をどの親が望んでいるということは「聞く」「話す」ことに重点を置く必要があると考える。成績面のことかでないのは、親の本心ではなく遠慮からではなからうかと思われる。

2 学習の基礎としてのしつけの重視

入門期こそ学習の基礎をつけたい。それは基礎をしっかりとさせることにより子どもは言語に対して目を開き耳を傾けるようになるからである。

- (1) ことはは目で聞く。

目を働かせて、相手の口もとを見詰めることにより話し手の心が分かる。

- (2) 話はからたで聞く。

学校での学習活動は内容を正しく聞くそして実践することである。よく話せたり、自分の意見と同じときは手をたたいたり、わからなかったら不審な顔をして首をかき上げて話に反応しながら聞くようにする。

- (3) はっきりと話す。

発音が不明瞭であったり、中途までで文末まで話さなかったり、声が小さくボンボン話すことは見すごしにできない。

ア 口を開く練習

イ 日直を輪番にさせ、朝のつどい、帰りの話し合いの司会

ウ 休憩時間に子どものそばで、いろいろ聞いてやる。

エ 考えたこと、思ったことが言えたらほめる。

(4) 話す聞くの訓練 (話型を教える)

ア 1年生では読むということは、聞くことであるとも考えられる。目で聞いて理解するからである。聞く力、話す力を高めていくことは、国語科の内容を読み取る能力を高めていくことである。

イ 低学年の教室には、話し方の基本型をかき掲示している。

3 「光ることは」に するために

「光ることは」とは、書きことは書いて、話しことは話してこそよいこととなる。即ち相手に感動、共鳴、納得させることといえる。

(1) 気持ちのよいあいさつをさせる。

簡単な日常のあいさつは「おはよう」から始まる。「こんにちは」それだけでなく「すみません」「いらっしゃい。」など 時と場に応じたあいさつができるように、その場その時に応じて教師の方で教える。あいさつこそ人の心を開き人間関係をつくるものはない。

(2) ことは遊んで語彙の拡充を図る。

ことばの数を増すために絵はなしづくり、しりとり遊び、手ですることば集め、ことばのたばこ などにより ことばに対する興味を増し語意指導もできた。

(3) ことばのしつけ

ア 自分のことは「わたし」「ぼく」といわせる。

入学当初は自分のことを「あちゃん」という子どもが、たくさんいた。

イ 〇〇です。とはきりいわせる。

話しことばの語尾をはきりいう。また教科書を読むときに「〇〇です。」と句点をまると読ませ、文末にはまる(。)があることを意識させる。

ウ 共通語で話し合える習慣をつける。

例えば「あんな」を「あのね」に

エ 話しやすい雰囲気にする。

ことはは感情を表わすので表情にでる。

オ 返事は「はい」とはきりいえるようにする。

カ 話しをするとき、文を読むときは情景を想像させる。

(ア) 話しをするときはどのような擬態語を使って話しをすればよいか考えて話させる。

(イ) 文を読むときには、行と行との間に読み手の解説、感想をいれる。

文章を読んだとき、表現されたままうけとることよりも、もっと読み手としての主体的反応をさせる方が意欲的学習となり、ひとりひとりの考え方を表現する力もついてくると考える。

キ 自由帳に思ったこと、感動したことをかく。

ク 教師の話術と、聞き上手こそ話しことはみかくことにつながる。

(4) 読書を通して語彙を広げた。

ア 読書の導き方

(ア) 本の読み聞かせ

(イ) 対話をする

(ウ) 学校の進める本20冊の選定

(エ) 集団読書

・ 読書指導の実際

(オ) 読書ノートが必要

・ 読書カード

・ 絵から文へ

イ 自由読書……読書のチャンピオン

4 入門期……小集団(バス)学習

バス学習では、学習の目的を達成しながら、表現力、理解力を高めることができる。また自主的積極的で協力によって問題を解決していこうとする態度を養うことができる。

(1) バス学習のグループ編成

ア 話し合い学習が同時に始り、できるだけ同時に終わるようにするのがよい。

- イ グループの編成はグループ内異質、グループ間等質にする。
- ウ グループ内の人間関係を尊重するよう配慮する。
- エ バス長はできるだけ交替する。

(2) 発言の基本型

ア メンバー発言の基本型

- ・ 〇〇です。そのわけは 〇〇だからです。
- ・ 〇〇と思います。そのわけは 〇〇〇と思いますがどうですか。
- ・ 〇〇さんの考えとよく似ていて 〇〇〇と思います。
- ・ 〇〇さんの意見にすしつけたします。

イ バス長発言の基本型

- ・ そうですね。(肯定)
- ・ 〇〇さんの意見は 〇〇〇ですがそれでよろしいか(確認)
- ・ ニつの意見に分かれましたね。それでは次を考えてください。(対立)
- ・ ちがった意見はありませんか。(補足)
- ・ いまの答えでよろしいか。(疑問)
- ・ 何かおかしいところはありますか。(矛盾)

(3) なかまづくり

なかまづくりは、メンバー相互の心のふれあいがなければならぬ。そのためにメンバーを固定したり、人数は何人と決めてしまわないで教科により、その場の状態により弾力性をもたすようにすることが大切であると思う。

ア ペア (なかよし、ならんでいるどうし)

対話形式で発言の基本型をしっかりと身につけさせるのをねらいとする。

イ. 1年後半から2年生はグループで (給食のなかまから)

1年前半の習慣化された態度を基礎としてグループづくりを考えていく。4人グループとして話し合いができるようにする。バス長は話し合いの結果をまとめたり、採決するのはむずかしいのでみんなが話す。話せるという場を作ることをねらいとする。

バス長は順番にあてたり、「そうですね」と替成をする程度でよい。

(4) バス学習 (単純バス……徳島方式)

1時間の指導の流れの中で、いくつかの節を選び、子どもに話し合わせるための発問を精選しなげかけるものである。指導計画の中にちゃんと位置づけ、どんな話し合いかなされるか予想をたておくことが必要である。

単純バスでは、精選された発問であるので二着択一的な発問では話し合いにならない。子どもが当惑し、抵抗を感じ、こう考えられるのではないかと話し合わずにはいられないという立場にたたせる発問であることが大事である。思考が練りあい、結合しようという解決過程を伴うのが普通である。それぞれの子どもが持っている学習問題が昇華されたものが学習課題となる。

単純バスは3~5分という短時間で進む話し合いであるから、やはり教師の意図することが話し合っているかどうかが大変である。教師は机間巡視をしながらどんな内容の話し合いができてきているかということを敏速、的確に把握しなければならない。特に問題を持つグループについては適当な指導助言が必要となる。

5 まとめ

国語科学習指導で(「スイミー」光村2上)バス長が「ひとりぼっちで泳いだスイミーの気持ちはどうだったでしょう。」という課題に対して、A児は「みんなたべられて悲しかったと思います」と一般的な悲しみとして発言したが、グループ内で他の子どもの意見をきいたのちバス長が「もうほかにありませんか」というと、A児は「どうしようかなと思ったり、ほかの赤い魚をどんなにしたらよいかかなと思ったと思います。」と答えた。どうしようかというのはスイミー自身のことと、赤い魚を助けてあげたい、どうしたら助けることができるかという仲間のことを考えての発言ができた。

このA児の変容からみても、「集団の中において個が育つ。同時に個が育つことにより、質の高い集団が形成される。」といわれているが、子どもの徐々の変容を喜びとして、さらに実践をつづけ、よいなまづくりをめざし、自己表現のできる子どもの育成に漸進の努力をしたい。

第17回全国バス学習研究集会 (分科会番号1)

研究主題

なかまづくり

—— 教えあいから 話しあいへ ——

徳島市福島小学校

吉田 ハル子

要旨

現在担任している2年生は持ち上がり学級である。数名の児童は活発な学習態度であるが、その他の児童は後身的であって自分で考え、自分から話すということができない。中には、他の子どもの意見をききながら自分の考えをまとめている子もあろうし、発言をしつづけて拒否したり攻撃されたりするため閉鎖的になっている子どももいる。

よい学級づくりはよい人間関係を育てることである。お互に励まし合いみがき合いひびひりの子どもが自分の考えを気楽に話すことができ喜んで学習をすることが望ましい学習態度をつけ、教育効果もあがり学力が向上していくと考える。以下入学からの実践についてのべてみたい。

研究内容

1 実態調査

(1) 児童に対する調査

ア 基礎学力調査

イ 交友関係調査

ウ 就学レディネステスト

エ 児童生活調査

オ 聞くことの調査

カ 話すことの調査

(2) 保護者の子どもに対する調査

(3) 結果の考察

ア 児童に対する調査

(ア) 話す相手の方を見て聞ける子どもは25%、話す途中で何かいう子どもが46%ということは、聞く力の基本が十分でないということが分かる。

(イ) 聞く態度はよいが内容がつかめないのが50%もある。聞きとる必要感と

積極的態度が無いと思う。

- (7) 話さない子が半数いるし、話す子どもの10%の子もは何でも平気で話せるのはテレビの影響であろうか。保育所や幼稚園での集団生活のためかと思う。

イ 保護者の子どもに対する調査

- (7) 短所として「落ちつきがない」ことが断然多いことは、聞くための集中力ができていないとも考える。
- (4) 「自分の考えを言える子」を殆どの親が望んでいるということは「聞く」「話す」ことに重点を置く必要があると考える。成績面のことかでないのは、親の本心ではなく遠慮からではなかろうかと思われる。

2 学習の基礎としてのしつけの重視

入門期こそ学習の基礎をつけたい。それは基礎をしっかりとさせることにより子どもは言語に対して目を開き耳を傾けるようになるからである。

- (1) ことはは目で聞く。

目を働かせて、相手の口もとを見詰めることにより話し手の心が分かる。

- (2) 話はからだで聞く。

学校での学習活動は内容を正しく聞くそして実践することである。よく話せたり、自分の意見と同じときは手をたたいたり、わからなかったら不審な顔をして首をかしげて話に反応しながら聞くようにする。

- (3) はっきりと話す。

発音が不明瞭であったり、中途までで文末まで話さなかったり、声が小さくボンボン話すことは見すごしにできない。

ア 口を開く練習

イ 日直を輪番にさせ、朝のつどい、帰りの話し合いの司会

ウ 休憩時間に子どものそばで、いろいろ聞いてやる。

エ 考えたこと、思ったことが言えたらほめる。

(4) 話す 聞くの訓練 (話型を教える)

ア 1年生では読むということは、聞くことであるとも考えられる。目で聞いて理解するからである。聞く力、話す力を高めていくことは、国語科の内容を読み取る能力を高めていくことである。

イ 他学年の教室には、話し方の基本型をかき掲示している。

3 「光ることば」に するために

「光ることば」とは、書きことばは書いて、話しことばは話してこそよいことばとなる。即ち相手に感動、共鳴、納得させることばといえる。

(1) 気持ちのよい あいさつをさせる。

簡単な日常のあいさつは「おはよう」から始り、「こんにちは」それだけでなく「すみません」「いらっしゃい。」など 時と場に応じたあいさつができるように、その場その時に応じて教師の方で教える。あいさつこそ人の心を開き人間関係をつくるものはない。

(2) ことば遊びで 語彙の拡充を図る。

ことばの数を増すために 絵はなづくり、しりとり遊び、手ですることば集め、ことばのたばこ などによりことばに対する興味を増し 語意指導もできた。

(3) ことばの しつけ

ア 自分のことば「わたし」「ぼく」といわせる。

入学当初は自分のことを「あちゃん」という子どもがたくさんいた。

イ 〇〇です。とはきりいわせる。

話しことばの語尾をはきりいう。また教科書を読むときに「〇〇です。」と句点をまると読ませ、文末にはまる(。)があることを意識させる。

ウ 共通語で話し合える習慣をつける。

例えば「あんな」を「あのね」に

エ 話しやすい雰囲気にする。

ことばは感情を表わすので表情にでる。

オ 返事は「はい」とはきりいえるようにする。

カ 話しをするとき、文を読むときは情景を想像させる。

(ア) 話しをするときはどのような擬態語を使って話しをすればよいか考えて話させる。

(イ) 文を読むときには、行と行との間に読み手の解説、感想をいれる。

文章を読んだとき、表現されたままうけとることよりも、もっと読み手としての主体的反応をさせる方が意欲的学習となり、ひとりひとりの考え方を表現する力もついてくると考える。

キ 自由帳に思ったこと、感動したことをかく。

ク 教師の話術と、聞き上手こそ話しことはみかくことにつながる。

(4) 読書を通して語彙を広げた。

ア 読書の導き方

(ア) 本の読み聞かせ

(イ) 対話をする

(ウ) 学校の進める本20冊の選定

(エ) 集団読書

・ 読書指導の実際

(オ) 読書ノートが必要

・ 読書カード

・ 絵から文へ

イ 自由読書……読書のチャンピオン

4 入門期……小集団(バス)学習

バス学習では、学習の目的を達成しながら、表現力、理解力を高めることができる。また自主的積極的で協力によって問題を解決していこうとする態度を養うことができる。

(1) バス学習のグループ編成

ア 話し合い学習が同時に始り、できるだけ同時に終わるようにするのがよい。

- イ グループの編成はグループ内異質、グループ間等質にする。
- ウ グループ内の人間関係を尊重するよう配慮する。
- エ バス長はできるだけ交替する。

(2) 発言の基本型

ア メンバー発言の基本型

- ・ 〇〇です。そのわけは 〇〇だからです。
- ・ 〇〇と思います。そのわけは 〇〇と思いますがどうですか。
- ・ 〇〇さんの考えとよく似ていて 〇〇と思います。
- ・ 〇〇さんの意見にすしつめたします。

イ バス長発言の基本型

- ・ そうですね。(肯定)
- ・ 〇〇さんの意見は 〇〇ですがそれでよろしいか(確認)
- ・ ニつの意見に分かれましたね。それでは次を考えたください。(対立)
- ・ ちがった意見はありませんか。(補足)
- ・ いまの答えでよろしいか。(疑問)
- ・ 何かおかしいところはありませんか。(矛盾)

(3) なかまづくり

なかまづくりは、メンバー相互の心のふれあいがなければならぬ。そのためにメンバーを固定したり、人数は何人と決めてしまわないで教科により、その場の状態により弾力性をもたすようにすることが大切であると思う。

ア ペア (なかよし、ならんでいるとうし)

対話形式で発言の基本型をしっかりと身につけさせるのをねらいとする。

1. 1年後半から2年生はグループで (給食のなかまから)

1年前半の習慣化された態度を基礎としてグループづくりを考えていく。4人グループとして話し合いができるようにする。バス長は話し合いの結果をまとめたり、採決するのはむずかしいのでみんなが話す、話せるという場を作ることをねらいとする。

バス長は順番にあてたり、「そうですね」と替成をする程度でよい。

(4) バス学習（単純バス……徳島方式）

1時間の指導の流れの中で、いくつかの節を選が、子どもに話し合わせるための発問を精選しなげかけるものである。指導計画の中にちゃんと位置づけ、どんな話し合いかなされるか予想をたてておく必要がある。

単純バスでは、精選された発問であるので、二者択一的な発問では話し合いにならない。子どもが当惑し、抵抗を感じ、こうも考えられるのではないかと話し合わずにはいられないという立場にたてる発問であることが大事である。思考が練りあい、結合しあうという解決過程を伴うのが普通である。それぞれの子どもが持っている学習問題が昇華されたものが学習課題となる。

単純バスは3～5分という短時間で、行う話し合いであるから、すばり教師の意図することが話し合っているかどうかが大変である。教師は机間巡視をしながらどんな内容の話し合いができていくかということに敏速、的確に把握しなければならない。特に問題を持つグループについては、適当な指導助言が必要となる。

5 まとめ

国語科学習指導で（スミー・光村上）バス長が「ひとりぼっちで泳いだスミーの気持ちはどうだったでしょう。」という課題に対して、A児は「みんなたべられて悲しかったと思います。」と一般的な悲しみとして発言したが、グループ内で他の子どもの意見をきいたのちバス長が「もうほかにもありませんか」というと、A児は「どうしようかなと思ったり、ほかの赤い魚をどんなにしたらいいかなと思ったりと思います。」と答えた。どうしようかというのはスミー自身のことと、赤い魚を助けてあげたい、どうしたら助けることができるかという仲間のことを考えての発言ができた。

このA児の変容からみても、「集団の中において個が育つ。同時に個が育つことにより、質の高い集団が形成される。」といわれているが、子どもの徐々の変容を喜びとして、さらに実践をつづけ、よいなまをつくりをめざし、自己表現のできる子どもの育成に漸進の努力をしたい。

自閉的傾向のA児の指導は どうあるべきか

広島県豊田郡豊町立沖女幼稚園 池内 文子
(前 豊幼稚園)
 広島県豊田郡豊町立 豊小学校 土井 紀美子

I. はじめに

集団の中に入らず奇声を出したり、話しかけても無反応なA児が入園してから3年目。

小学校入学に伴い、必然的に担任も変わった。

しかし、広島県豊高校区教育推進協議会が発足して4年目を迎えた今日、幼小中高一貫態勢づくりも軌道にのったとみえ、幼小の連携も緊密になり、幼稚園の取り組みを土台に系統的に指導している。

校内に於ても、全教職員がA児をめぐってよいことにしろ、悪いことにしろ担任に情報を入れるようにしており、A児を温かに見守る体制が整っている。

II. A児への取り組み

1. 生育歴

1) 家族構成 父(38才)、母(34才)、祖父(67才)、祖母(65才)、
 姉(9才)、本人(6才)の6人家族(1982年4月調べ)

2) 発達歴

(ウ) 生年月日 1975年6月26日

(イ) 出生期 妊娠中、出産時、出産後とも異常なし。

(ウ) 発達の様子

- ・ 2才頃まで、親の目からして順調。
- ・ 3才になってもはなし言葉がでてこないで 診断を受ける。医師から「自閉的傾向なので、努めて外出させ、人と交流をもたせるように。」といわれる。

(二) 家庭環境

- ・父・祖母 出作地が多いため、朝6時頃から夕方6時頃まで畑仕事に出ている。祖母は、A児の言動についてよく愚痴をこぼす。
- ・母 A児の育児をまかされていたが、本年1月から町内にできた会社に入社。これにより授業参観を父親に委ねる。
- ・祖父 夜盲症で失明に近い視野狭窄状態のため、家に一日中おり、口うるさい。A児が奇声を出すとどなりつけ、「よどすな」、「おもちゃを出すな」等々、禁止、規制が多い。
- ・姉 家では、弟の生活の躰をしたり、学習を見てあげているが、人前で弟と共に行動する場が少ない方を望んでいる。

2. 1980年度(幼稚園年少組)の取り組み

- ・簡単な運動は保育者の援助により繰り返し指導し、友達のを模倣してできるようにさせる。(集団へのかかわり)
- ・保育者の介助により、すべり台、ジャングルジムで遊べるようにさせる。(手足、感覚器官の促進)

3. 1981年度(幼稚園年長組)の取り組み

1) 言葉について

- ・自分の物である時に「ぼくの」、作品ができた時に「できました。」が言えるように、給食時、一斉保育の場で繰り返し尋ねる。
- ・友達にも作品を見せて、「A君のはどれ。」とか言ってA児に尋ねさせる。

2) 戸外遊びについて (小刻みに補助動作の手を抜いていく)

- ① 「いちがいだから」といって戸外で遊ばせようとしないう家族に了解を得て、降園させないで園庭で遊ばせる。
- ② 学級児にA児を誘って遊ぶように働きかけ、家まで誘いにいかせて園庭へ遊びに来させる。
- ③ 保育者がA児の家まで一緒に降園し、玄関の所にかばんを置いて、家の

人に「幼稚園へ行ってきました。」と言わせ、幼稚園へ遊びにいかせる。

④降園時「幼稚園へ遊びにおいで。」と声をかけ、自分でかばんを置いて来させる。

4. 1982年度(小学校1年生)の取り組み

1) A児の言動と指導の実際 (A児の言動…㊦ 指導…㊧)

(1) ㊦ 速足の時500Mしか歩いていないのに奇声をあげて手足をじたばたさせ、坐りこもうとする。

㊧ 泣き叫んでも無視して片腕をもちあげ体重を教師にかけさせて、5K Mの道程を同歩調で歩かせる。

(2) ㊦ 録音テープを聞くと奇声をあげる。

㊧ 「A君、黙って。」と大声で怒り、A児の口に手を伏せて声を出させない。

(3) ㊦ 色、字、平均台に興味を示す。

㊧ 「この服は赤色よ。」というふうには、色へのこだわりを利用した言葉かけをし、何度も反復させる。

・配り係、牛乳係の当番活動を通じて、クラスへの帰属感を高める。

・A児の好きな平均台を渡る遊びをひとりの遊びに終わらせないで、ジャンケン遊びとしてクラス全体の遊びにする。

(4) ㊦ 健康観察、聴力検査、発表の際、人が言った言葉を反復する。

㊧ 担任も学級児も、動作をしながら言葉をかけたり、具体物を見せて行動する。

(5) ㊦ 話しかけても、そそくさといなくなり、あらごち歩き回る。

㊧ A児が返事をしなくても、温かい話しかけをする。

(6) ㊦ ボール拾いの際、ボールが自分の前を通過してしまうと追いつけない。

㊧ 「A君、ボールをとりに行こう。」と呼びかけ、教師も一緒に追いつける。

② ボールを指しながら「A君、ボール。」と言、てとりにいかせる。

③ 口だけで「A君、早く、早く。」と急きたてる。

- ④ 自分で ボールをどりにいさせる。
- (7) ⑤ 買物にも、呼ばれにも、歯の治療にも行かない。
- ⑥ 家族で「一緒に行こう」と言いかけ、手を引いて連れていく。

2) 反省と課題

- ・ A 児にとって安心して接することのできる学校の雰囲気なので、今までどおりの対応により、A 児の言葉ができるような援助をしていく。
- ・ 気持ちに見合った表現をさせるために、今後も同じパターンを何度も繰り返して指導する。
- ・ 家族へは、臨機応変的対応により、あせらず、根気強く指導の手を止し、少しの進歩をも喜び合うようお願いする。

Ⅲ. おわりに

A 児の家族が10年、20年先の生活に向けて、より安定した、より確実な一歩をふみ出すことができるようになってほしい。一生懸命やれば今の状態よりよい結果が期待できると思う。

だから、担任として精一杯努力しているし、将来もし続けたいという立場から、親、保育者、教職員集団、学級集団に対して発言し、彼等の報告を聞いて、A 児の理解にヒントを与えてもらっている。またそれと同時に A 君の発達を援助するという目標に向け、A 児へことばをかけるように協力を依頼している。

殊に両親には、担任の行動によって両親の不安を解決していくことができたので、A 児のいいなりになるのではなく指導していくことの大切さを述べて、目標に向かってしつめるようお願いしている。

今後も表裏のよき相談相手として、またよき理解者として、家族に勇気が湧いてくるような存在になりたい。

第 / 7回全国バズ学習研究集会 (分科会番号2)

—— 効果的な話し合い学習のとりくみ ——

三重県安芸郡河芸町立豊津小学校

是 次 紀 勇

〈研究主題とその要旨〉

今のクラスの子どもの中には、授業中、自分の考えを発表できない子が多い。休み時間には、そのほとんどの子は元気であり、また授業中などには、となりの子とすぐ話をしたりしている。

ひとりひとりが自分の考えていることを何でも話し合える学級づくりを目ざしているものの、まず授業の中で実践できることとしては、話し方の訓練、人の話をしっかり聞くなどの基礎的な学習態度を身につけることであろう。次に考えたことは、小グループでの話し合い活動を取り入れることにより、多くの子が発言する機会を得て、発表することに対するはずかしさを解消し、自信を持てるようにすることである。その結果、学習の深まりができるものと考えられる。

ここに話し合い学習について、これまでのとりくみの一端をあげる。

〈研究内容〉

—— 算数科学習における自由バズ学習 ——

ひとりひとりの子どもの可能性をひきだし、育てる学習指導法の工夫として自由バズ方式をとりあげ、その実践的研究をすすめてきた。

自由バズの教育操作は、児童自身の意志によって自由に相手を選択し、また変更できるという特徴を持っている。さらに児童の積極的な参加をうながすために、

◎問題解決できない児童は、立ち上がってできた児童のところへたずねに

行く。

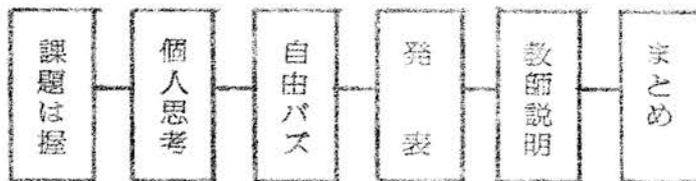
◎理解できない児童は、できるまで席にもどれない。

◎解決できている児童は、たずねてきた児童に教える義務がある。

といったとりくみに関するルールを設定している。このような事態では従来の授業での人間関係が表面化し、強い緊張とかがっとうが期待できると考える。

そこで、教科としては課題・思考過程・結果がはっきりしている算数科をとりあげ、授業をすすめる中で学習方法についての意識がどう変容するかを意識調査の分析からは握し、自由バス方式の効果を測定しようと試みた。

(1) 授業の流れ



自由バスは、児童間に様々な緊張とかがっとうを起こすだけに、その意図を十分に理解させておくことが必要である。そこで、一方策として「学習のきまり」を作成し配布した。

学習のきまり (抜すい)

○ わからないときには、助け合ってください。

そのときには、

- 表示柱の —— 緑 —— を出している友だちにたずねましょう。
- たずねに行くときには、男・女の区別をつけないようにしましょう。
- わからないまま、すわっていることのないようにしましょう。

- ひとりのところに大勢が集まらずに、緑の表示柱を出している友だちのところへ早く分かれましょう。
- 方法がわかっていても、うまく説明できない人も行ってみましょう。

のようにしましょう。

このようにすると、

- ◎「わからない人は、友だちと話し合うことによって少しでもわかる。」
- ◎「わかっている人は、友だちに説明することによって、よりいっそうわかる。」
よくなると同時に、
- ◎「クラスの人たちが、みんなで力を合わせて、勉強したり作業をすることができるようになる。」
と思います。
楽しく、明るいクラスで、みんながわかる勉強をすすめるためにがんばっていきましょう。

(2) 児童の意識について

自由パスという学習方法を子どもたちは、どう受けとめているかを知るために、18項目にわたって意識調査を実施した。次にある表は6項目をとり出したものである。

自由パスが立ってたずねに行き、理解できるまですわれないというきびしさの中に、自分で聞きやすい人のところへ行くという方法であることから、熱心に問題にとりくむ態度を養うとともに、友だちと協力して問題を解いていく楽しさを味わうことができるということが言えそうである。このように自由パスは、ひとりひとりの児童がそれぞれの立場に応じて学習に参加していくという興味ある学習方法として受けとめられていると考えられる。

<今後の課題>

- これまでは算数科を中心として研究をすすめてきたが、他の教科に適用した場合、効果的な話し合い学習が可能か。そのためにも個人思考をより高めるための手だてが必要である。
- 一般にいわれるグループ学習同様、どこで使う場合が最も効果的かを考えねばならない。また、学年、課題の性質によって当然かえていかねばならない。

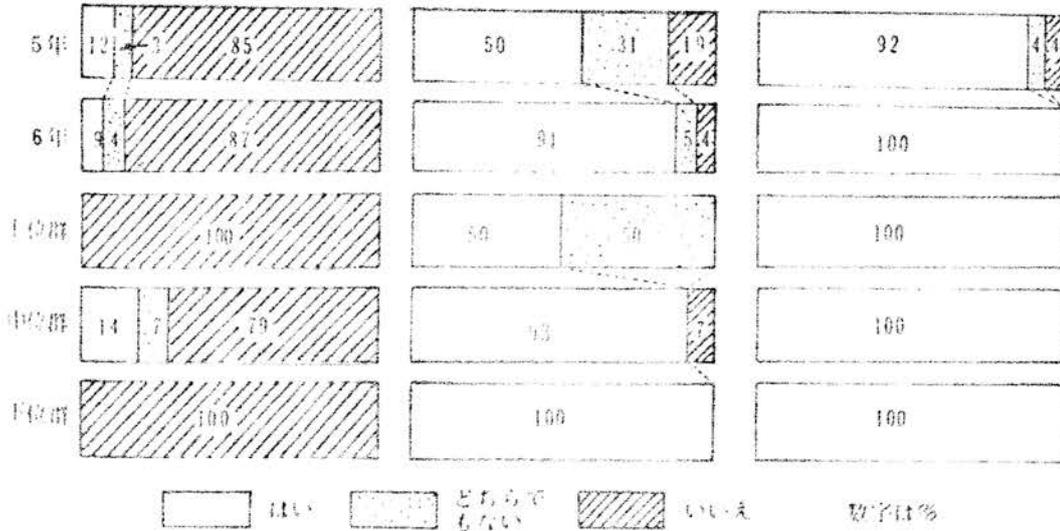
<たすねに行った人>

あなたは、たすねに行くとき、はげかしいと思いますか。

相手の人は、わかりやすく説明してくれましたか。

<説明した人>

説明することは、自分のために役に立つと思いますか。

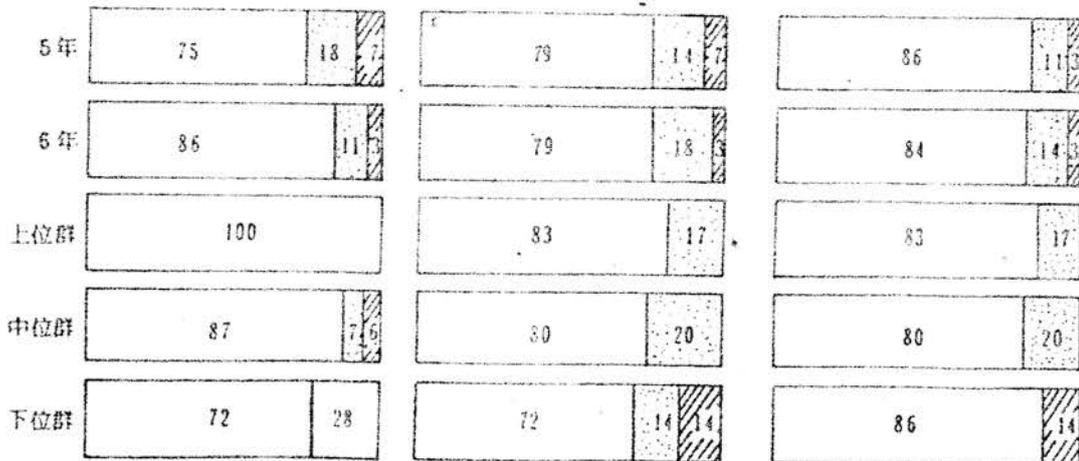


<全員>

あなたは、話し合いのとき熱心に問題について考えましたか。

いまのようなやり方はこれからも自分の役に立つと思いますか。

いまのように友達と協力して問題を解くのは楽しいと思いますか。



研究主題 「効果的な話し合い学習」

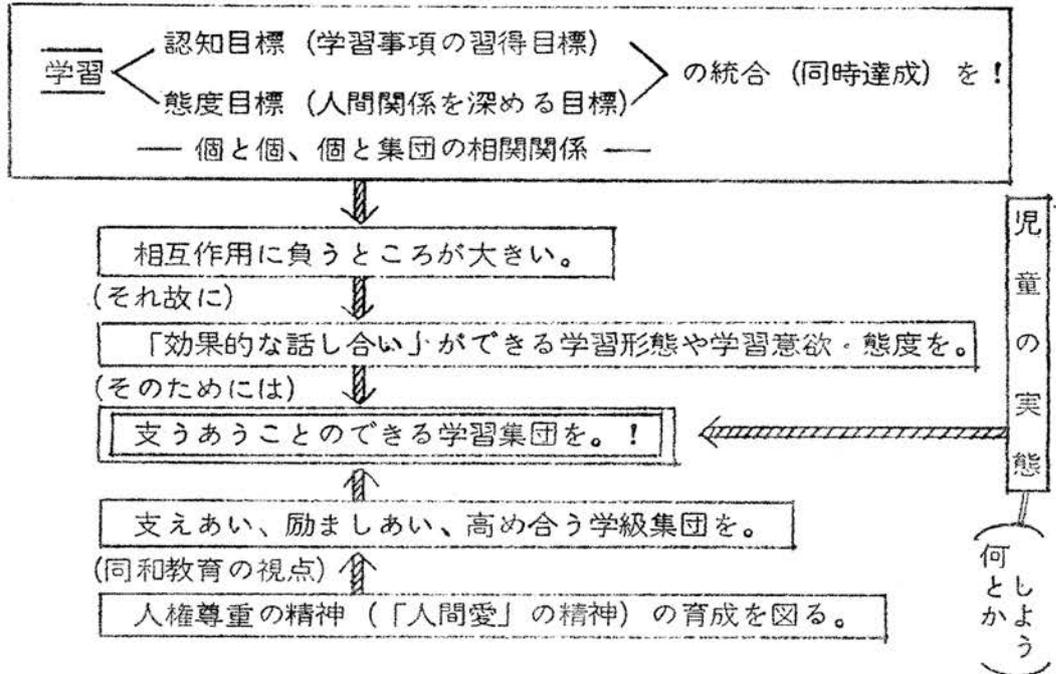
——「支えあう学習集団づくり」をめざして——

兵庫県姫路市立八木小学校

市場 郁也

要 旨

(1) 研究主題をどう受け止めたか。



(2) 「支えあう学習集団」にするための集団典型 (集団づくりの指針)

- 自由にコミュニケーションできる集団であること。
- 全員が共通の価値体系をもつことができる集団であること。
- 常に協同活動が見られる集団であること。
- 個人の欲求調整がなされる集団であること。
- メンバー間の役割の分化が見られる集団であること。
- 個々人の生産性が高めやすい集団であること。

このような学習集団をつくるべし努力を重ねてきた。

ノ。「個を生かす」とりくみについて。

ひとりひとりの子どもが、生きがいや意欲をたぎらせ、自分自身の持ち味を生かしつつ、仲間としての相互扶助や連帯感を持ち、常に新しい価値を求めて学習に励む。これが求めて止まない教育の姿ではないだろうか。

従って、「支えあう集団」⇔「個を生かす集団」であると思う。

① 意欲づくりのために

○ これからやろうとする学習の目的や課題に興味と関心を持たせるようにしている。

・ 授業の中で、自分なりの感想が持てるようにさせ、それを引き出すようにしている。

・ 個人の問題や悩み（理解しにくい事項）をグループや全体の問題に拡げるようにしている。

○ 学習の目的や課題の持つ意義とやる方法を十分に理解させるようにしている。

・ やり方を考える。 ・ 手順を考える。 ・ 仕事を分担する。
などを、はるべく子どもの手に委ねるようにしている。

○ いっしょに学習する仲間への所属感を持たせるようにしている。

・ グループの特色や個性を持たせ、話し合いなどがうまくできているとき、賞揚を多く与えるようにしている。

・ 分担や役を一人占めにしたり、有名無実の役を作らせないようにしている。（どの子ども何らかで関わり、役立っているようにする。）

② 個性を生かすために留意し、配慮している事項は。

○ リーダーの育て方について。

授業のリーダーシップは、教師の他、子どもたちの中にリーダーを育て、指導の分極化を図っている。ただし、リーダーを固定せずに時と場

によってだれとでも交替できるように、育成に努めている。

○ 指導の形態について。

- ・ 一斉指導（一斉学習）の他に、グループ（小集団）学習を多く取り入れるようにしている。＝ 話し合い活動。共同学習作業 など
- ・ 遅進児は、なるべく集団の中で指導し＝教師が、仲間が＝教師の個別指導を避けている。（「しない」という意味でなく、遅進児指導＝個別指導の型をとらない。の意。）

○ 学力観と評価について。

教師側が教えた（指導した）事項の理解度だけを学力と見なして評価するのではなく、「学び方の方法の体得」を重視し、問題解決的な能力・態度を学力として重じてきた。＝ 指導要録・通知票にも、この趣旨が生きている。

2. 「個と個」・「個と集団」の人間関係を深めるとりくみについて

「支え合う学習集団」とは、個と個、個と集団が仲間意識のもとに、助け教え合い、励まし合い、磨き合い、高め合っていける人間関係ができてい

る学習集団をいうのではないだろうか。

その基底となるのは、

- 1 なんでも言える「ふんいき」を、集団の中につくること。
- 2 集団のひとりひとりが、仲間意識に燃えること。

ではないだろうか。

(1) なんでも言えるふんいきづくりのために。

① 学習の中だけで「何でも言おう。」はだめである。

- なんでも言える場づくりと訓練がいる。

② 詰問は止め、賞賛を送ろう。

- 能力いっぱいの話し方になるよう、激励と賞め言葉を。（教師も仲間も）

③ 聞き上手になってやろう。

(2) 仲間意識を高めるために

① 道徳(同和)学習の中で

道徳(同和)学習を通して、仲間意識の高揚＝人を大切にする精神の育成＝を図ることができる面が大きい。

仲間意識を高めるために基盤となることは、

1 生命・健康を尊重することができる。 2 能力を十分に伸ばすことができる。 3 労働を尊重することができる。 4 差別・不合理・矛盾を認識し、その解消ができる。 5 差別のない平和な社会(学級)を創造することができる。である。

特に、支え合える仲間意識をつくるためには、

- 自分の正しいと信じる意見を出し合い、みんなの力で確かめ合うことができるようになる。
- ◎ 自分を見つめ、力いっぱいがんばり、互いに励まし合って、より高い目標の実現に努めることができるようになる。
- 困難に負けず、みんなで解決することができるようになる。

以上の視点に立って、同和学習を展開しつつ、仲間意識の高揚を図っている。

② その他、学校生活全体の中で。

- ア 「朝の会」・「終わりの会」の重視を。
- イ 基本的生活習慣の育成と生活指導の徹底を。
- ウ 集団活動の重視を。(共同活動の機会を増やす等)
- エ 縦割りの学習集団の機会も。

3. ま と め

本研究集会の本分科会で、何に視点を当てて研究討議がなされるのかを十分には握しないまま、レジメにまとめたので、ピントはずれが多いと思う。しかし、「支えあう学習集団」というとき、いつ・何を・どのように支え合うか？よりも、「どのように集団をつくるか」が問題になると思う。

研究主題 4年生の卓球から ゲームの指導

「なかまとともに 楽しく 意欲的に取り組む」

ゲームの効果的な指導を求めて」

・ポートボールの特性と効果的な話し合いを生かした指導のありさと、
その問題点

滋賀県神崎郡五箇荘町五箇荘小学校

教諭 野瀬 隆

(1) 運動の特性とねらい

子どもたちのほとんどはボール運動が好きである。特にこの時期の子どもは
集団意識が強くなり、競争的な運動を好むようになる。かしながらこの時期
には、よく動ける子とそうでない子の差が大きくなってくる

従って、指導者は、どの子にも、その子にあった役割を与え、互いに助け合
い喜んで参加させるとともに、「先生できたよ。」「先生たのしいね。」「
先生もう一度やろう。」という声を全ての子から聞けることを最大の目標と
して指導にあたらなければならない。

ポートボールは、他のいくつかの競技(バスケットボール・サッカー等々)
と同じく、集団で勝負を決し、競技といえる。一個のボールを一定のルールに
従い、ふたつのチームが得点を争うのである。従って個人の能力や技能だけで
なく、集団としてまとまった方向性あるプレーが大切となってくる。同時に教
科や競技を越えた人と人のつながりとしての協力性も着られることを望んでい
る。

またふたつのチームが、得点を争うためには、自分のチーム状態、動きを口
ることが大切である。それとともに、相手のチームを観察することも重要な役
割を持っている。敵・味方の入り混じった中でボールや人の動きに対応するため
には、機敏な動作、正確な判断力が必要である。しかしながらこれらの動作・
判断力はすぐに養われるものでなく、度重なる失敗から身に付けられたゲーム
観として生まれてくるのである。このゲーム観は、指導者が一方的に教え込む
といったものでなく、子どもたちの *play - do - see* の繰り返しのなかから
生まれてくる。

このようにチームプレーのよさがその勝負を左右するポートボールは、5・6
年で学習するバスケットボールとからみ合わせ、子ども達の技能・体力の向上
はもちろんのこと、先の協力・思考・判断力向上も目指し指導に当たって来
たい。

(2) 目標の設定

認知的目標 簡単な技能を身につけ よく動いて 楽しくゲームや練習ができる。

態度的目標 A 友だちの動きを観察し チームの人と意見の交換を行ない、友だちのよいところを取り入れようとする。

B 協力し、互いに構い合いながら活動しようとする。

(3) 課題の設定と指導計画

先ず指導の流れとして「試合」→「練習」→「試合」による技能の向上を考えた。そこで、この単元を「見通しを持つ段階」→「基礎の習得の段階」→「ためしの段階」→「補強をする段階」→「まとめの試合の段階」と5つの段階をつくり学習を進めることにした。

① 見通しを持つ段階 注) □は学習課題

ポートボールのあらましを知り、ゲームをやって、どんなことを学習したらいいか見つけよう。----- ①

② 基礎の習得の段階

パスやドリブルの基本の型を知り、できるようになろう。----- ②

パスやドリブルを使って、せめ方を考え練習してみよう。----- ③

④ ためしの段階

パスを継いでシュートに結びつけるゲームをしよう。----- ④
次の相手のチームの観察をして、せめ方を考えよう。

⑤ 補強をする段階

ボールを持っていない人が動いて、パスが継がるチームをつくろう。----- ⑤

⑥ まとめ試合の段階

みんなが動いて、パスを継ぎ たのしいゲームをしよう。----- ⑥

(4) 実践を通して

ポータボールの運動の特性の中に「チームで行なう」ということが考えられる。多くの場面でチームの子どもも同志のまじわりを生かした実践を考えてみた。具体的には

㊦ 4組のルールづくり。

㊧ チームづくり。

㊨ 試合をして学習の方向を見つける。

㊩ 学習カードの活用

㊪ 観察と記録

㊫ ゲーム化による学習の楽しさ

④ グループ活動

以上のごとくグループ活動の有効性を生かすべく実践を行なったが、体育教科が目指すものは、運動の楽しさを味わうことにある。では、楽しさとは何かそれは、ポートボールそのものができるということの楽しさだけでなく、友だちと一緒に、うまくパスを継りたり、敵にうち勝つ非戦をたてたりというグループ活動にある。そのことが生涯にわたって運動を楽しむ子に育てるといふことになる。

(5) まとめと今後の課題

わずか4時間の実践であり、なお多くの問題点や不備な点が残っているものの、一応、初期の目的は達成できたと考えている。即ち

① 単元単位の学習を見通しを持って、子どもがグループ毎に楽しくゲームに打ち込んだこと。

・ 学習計画と各段階ごとに学習課題をもとととも立てたことが、抑、何をやるかはっきりとつかめ、ポートボールの生活化が促された。

・ 基礎の習得にも、子どもの思いや、工夫をこらし、ゲーム化を行なったことにより、楽しい練習ができ身に付いた。

② すぐに消える動きを評価するための材料として記録をとり、よく用いたことがplan-do-seeの一連の過程を積み重ね、自分の動きや、チームの動きをつくる方向にむいたこと

③ 相手チームの動きに対応する自チームの動きづくりがいつも行なわれ、友だちへのいつかまで広がり、自他の関係・集団と個のかかわりといった人間関係の改善に役立ったこと

しかしながら、どの子どもが、自分の動きづくりができたかというところはいまもなかった。リーダー的な子が動けはいるに指示をし、声をかけ合ってチームとしての動きの中にまき込んだとはいえ、その子自身が、自分の方向をつかまえてはいたらなかったことである。

また指導過程にも楽しさを求めて効果的に行なうためには、見通しの段階でのルールづくりが適切であったかということ。

そしてチームづくりにおいても、抑、違うメンバーと組んだ時、今と同じように語ることができるかということ。

以上のようなことが今後の課題とされたと思われる。

第17回 全国バス学習研究集会 (2)

研究主題： 効果的な話し合い学習

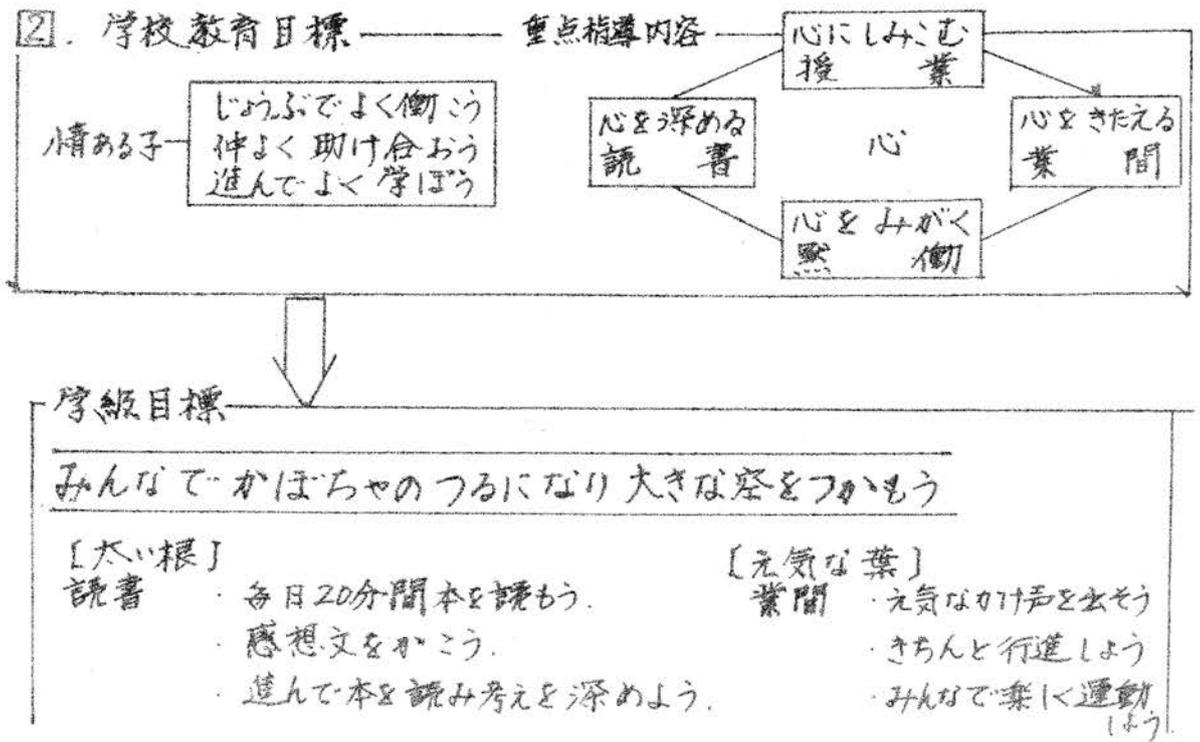
岐阜県瑞浪市立 瑞浪小学校

後 藤 健 二

Ⅲ. はじめに

私は昨年、はじめて小学校に赴任した。そして本年、教員生活20年目に
して小学校4年生の1クラスを担当した。子どもたちの言動のすなわさ、
すばらしさに感動し、自分の教師としての至らなさに愕然とした1学期で
あった。そんななかで、私自身がこだわっている指導 → 子どもが自分たち
で考え、話し合いながら学習集団として高まっていくクラスを、とめざ
し、学級指導、道徳を中心とした話し合い学習を進めさせたいと努力
してきた。

以下はその実践報告ですが、至らない内容ですので、ご指導、ご助
言をよろしくお願いいたします。



【からまるまきかけ】
 黙働・だまて掃除をしよう。
 ・めあて、反省をしっかりとやろう。
 ・全席ならんでかえろう

【大きな実】
 授業・正しい姿勢でがんばろう
 ・先生、友だちの話をよくきこう
 ・何の勉強をやっているのかいつも頭に置いてがんばろう。

③ 学級経営の柱

本校の研究テーマ

心にしみこむ授業づくり — 第1段階 子どもづかみと子どもづくり
 第2段階 子どもづかみと教材づくり
 第3段階 心にしみこむ授業づくり

上記の全校研究テーマを受けて「心にしみこむ授業づくり」をめざし、「子どもづかみと子どもづくり」をするために毎月核になる場と指導をすることを考えた。

④月 学級づくり

子どもとの出会いと大切に組織づくりとする。学指 遠足を通して係活動と生活グループの位置づけを明確にする。

⑤月 道徳

生活の中の事実をとらえ話し合うなかで、自分の生き方と切り結んで学習や係活動がしていける子どもづくり。

⑥月 読書

読む楽しさ、本の内容に感動する心を体感させ、読書の大切さを話し合う。

⑦月 学習

基本的な学習姿勢ではどんなことを大切にしたらいいか考えよう。

黙働

清掃強調週間を期に黙働をみなおそう。

ふりがえり
一学期の自分たちの財産とみつめなおし、学期目標のどの点が成果であり、どの点が今後の課題かを考える。

8月 ひとりになって自分に挑戦する夏休み

9月 体カフツリ

夏休みの水泳、秋の運動会を通して、体ときたえることの大切さを考える。併せて業間運動とみつめなおそう。

10月 みつめる。

前期のふりがえりとするなかでやり切った充実感を持たせ、後期への歩み出しについて話し合う。

11月 教科学習

担任の個人テーマをもとに音楽学習(合唱)に力をつくせ、支え合う授業とはどうすることが考えます。

12月 たかめる。

二学期とふりがえるなかでやる気を生み出したリーダーとフォロワーの連帯感とみきわめさせ、さびしい仲間関係をつくりあげる。

ひとりになって自分とふりがえる冬休み

1月-3月 ふかめる

5年生を招向しつ、学習に対する意欲とついかめ、周辺活動としての業間、懇話、読書の場を深める。

④ 発表内容

1. 話し合いを通しての学級づくり (4月実践)

ねらい: 新学期を迎え4年生への希望やねがいを新たにしながらも、新しい仲間(担任がかわった)の中で期待と不安が入り交っている子どもたちに、これからの一年間の学校生活を通して自分自身への課題や、こんな学級にしたいとの願いを出させながら、もう一度仲間をみなおし、ひとりひとりに「よし、がんばるぞ!」という意欲を持たせる指導。

- ・ ひとりひとりが力強い活動をしてよかったといえる遠足を通して、仲間とともに話し合い、活動していくことこそ、仲間がわかり自分たちの学級集団をより高めていくことに気づかせたい。

2. 生活の中の事実をとらえ話し合うなかで自分の生き方と切り結んで考え直す道徳指導 (5月実践)

ねらい: 友だちを大切にしなければと思いつつ、つい自分の立場だけでまわりをみてしまい、人を非難してしまう自分の弱さに気づかせ、たがいにはげまし合い、いたわり合うことの大切さに気づかせる指導。

- ・ 直接資料「やりたい、私!」、間接資料「あたらしい友だち」を通して、この一時間の圭子の悲しみは敏郎がすべての生活を通して持ちつづけている悲しみであることに気づかせたい。

第17回全国バス学習研究集会(分科会番号2)

研究主題 効果的な話しあい学習(中学年)

学校名 愛知県春日井市立小野小学校

氏名 辻 善造

要旨 話しあい学習は、思いつかないことを想起させあったり、考えを補いあったり承認しあったりする場面に効果的である。

研究内容 一学期で効果的な話しあいと思われる事例をとりあげ、分類してみた。そして、分類した項目ごとに、今後の指針になるようなかたちでまとめてみた。

1. 話しあいにより、道徳的意識を高めていった事例

例1 『困っている時、心遣いをしてもらい、うれしかったことがあったら発表してください。』(3~4人挙手したので発表させる)

「給食を食べている時、牛乳をこぼしてはった。その上、友だちのふきんまで汚してしまっ。その時、その友だちは、ぞうきんを持ってきて、いしに拭いてくれた。この時……」

「下校の時、おなかかいたくてつらかった。その時、友だちが大塚がと声をかけてくれた。かばんを持ってくれた。この時……」

以下略(この発表を聞き、挙手する者が増え、その発表を聞き、挙手が増えるというように連鎖的に発表が続いた。)

※ ちよとした心遣いか、こんなに清潔にもらえるものかと再認識した様子。

例2 『がんばりぬいて、とてどううれしかったことがあったら発表してください。』(数名挙手したので発表させる)

「マラソン大会の途中で、えらくなつた。でも、がまんして走ったら、昨年より順位が上がった。春に帰ってお母さんに話したら、喜んでくれた。」

「自転車に乗るよう練習した。でも、何回もこぼして嫌になってしまった。やめようと思った時、お父さんが自転車の後ろを持ってくれた。そして、お父さんは知らないうちに手を離していたが、ぼくは乗れていた。」

以下略(例1のように連鎖的に発表が続いた。)

※ 一通り発表が終わった後、一流の人の裏の努力ぶりを話すと、きちんと聞いている様子。

例3 『「こんなことを言われて、とても嫌だった。」と思ったことがあったら発表してください。』(例1, 例2と比べて挙手が多かった。)

「(内気で皮ふ病にかがっている女の子) イボがエルのと言われるのがとても嫌です。」

「(明朗ではあるが容姿に恵まれていない女の子) コシシマンと言われるのがとても嫌です。」

以下略(発表を聞きながら挙手がどんどん増えた。発表の中には、そんなに気にしていないようなものもあった。)

※しばらくの間、人の嫌がることは言わなくなった様子。

例4 『意地を張りあっていったが、相手に素直に出され、仲直りしたことがあったら発表してください。』 児童の発言等略

例5 『こんなことをされて、とてもいやだったと思うことがあったら発表してください。』以下略

1のまとめ 自分からは思いつけないが、人の発表を聞き誘発されて、自分の似た経験を思い出すことができる。それを発表することで、おたがいの経験を意識しあう。そこで、共通の基盤ができる。こうなれば、友の心情が分かりあえ、安定した素直な気持ちになる。そして道徳的意識が高まってくる。

2. 話し合いにより、みんなを補いあうから考えを高めしていく事例

例 とうじの時 清掃道具の奪い合いが目につき、とうじのときも悪かった。そこで、学級会でとりあげ 対策を考えあわせた。(議長の発言は略)

C1 「本人が選んでやる気になっているのだから、やりたい道具をやればよい。」

C2 「そんなことだったら、今までと同じようになってしまう。」

C3 「やりたい道具が重なったら、ジャンケンをやればよい。」

C4 「免の弱い子や、やさい子は、遠慮して、かあつてもらう。」

C5 「それに、多くの人がジャンケンに参加したら、時間を損してしまう。」

C6 「また、運が悪くて嫌な道具ばかりになってしまい、とうじをやる気がなくなってしまう。」

C7 「じゃ、みんなに道具を平等に回すようにすればよい。」

C8 「それが見ても はっきりわかるように表を作って、貼ればよい。」

(C7の意見に多くの者が賛成し、以後、表の作り方について話が進む。)

2のまとめ 児童一人だけでは、一人よがりの考えになりやすい。そこで、みんなの前に考えを発表させると、建設的に補いあう場面を作ることができる。その時、幅の広い考えや妥当性のある考えが作り上げられる。また、ここでひとりひとりにより確かな考え方を経験させることができる。

・この際、学級内の切実な問題で、多くの者がかかっていると効果的である。

3. 話し合いにより相互評価し、規律を高めていく事例

例 係活動の相互評価

『よくがんばったと思う係を発表してください。また、どんなところがよかたかも発表してください。』(拍手、クラスのお1/3位)

・「保健係がいい。朝 健康観察をやり、その結果を保健室へ持っていくのを1回も忘れたことがないから。」

『保健係は、よくがんばったと思う人、手をあげなさい。』(ほとんどの者、挙手する。)

・「学級委員がいい。教室移動のとき、みんなを並ばせ、静かに移動させるから。」

(保健係の時とほとんど同じように進み、ほとんどの者に支持された。)

・習字係がよい。水・用紙・寺本等の準備、使い残しの墨・寺本の後片付けをいつできちんとやっているから。(同様で支持多数あり)

(その他にも、クラスの多くの者から支持された係は、12あった(全部で係は21)。係名をあげられても、みんなの同意の少ない係、係名を全然あげられない係もあった。これらの係には、どんなことでもがんばればよいかアドバイスをし、励ます必要がある。)

例2 清掃・給食などの当番活動の評価

見回り等をして、よい班があったら、特りの会等で

『今日の〇〇をそうじた班は、とてもよかった。みんなよかったが、特にがんばった人はだれか、同じ班の人で発表してください』

(教名の名前がでてくる。その中で、みんなをリードしようとした者を、特にほめる。)

例3 専科の授業での、授業態度の相互評価

(良い場合と悪い場合があるが、悪い場合で書く。)

『今日の音楽の時間、まじめにやれなかった人は立ちなさい』 『他の人から言われてから立つのではなく、自分で決めて立ちなさい』

(教師が掌握しているより、はるかに多くの者が立つ。)

『立っている人の中で、この人は悪くないと思う人があったら、助けてやってください』

『〇〇さんは、他事をしている人を注意している時、先生にしかられたのです。だから…』

『〇〇さんは、△△君が回ってきたものを持って困っている時、先生にしかられたのです。』

以下略。(いろいろな弁護がでてくる。教師が見えない面までいろいろと知らされる。また、だれにも弁護されず、残って立っている者は、それだけで反省の機会を十分に与えられたことになる。)

3のまとめ がんばっている子が認められる場を作ることは、とても大切である。さらに、それ以外の子ども、次にはがんばって認められようとする意欲を起すことにもなる。この際、「どの子も、その子なりにがんばれば価値がある」という意識をみんなに持たせる必要がある。

4. 話し合いを教科の授業に入れた事例

例1 へちまの観察文の書き方(国語)

・観察文の書き方のポイント(中心を決め変化すること、驚いたこと、疑問に思ったこと、色・におい・感じ・大きさ等)を示し、鉢植えのへちまを見せ、文を書かせる。

・1巻初めに書き終えた者ができた時、書くことをやめさせ、その発表をみんなに聞かせる。そして、ポイントに照らしながらみんなの評価していく。その結果、文を書く時、ポイントの生かし方を、より意識させる。

・一通り書き終えた時点で、班(4人)の順に読みあわせる。そして、ポイントに照らして、班の代表を選ばせる。

・代表者を順に発表させ、発表されたものの長所を指摘させる。指摘のできなかった者には、そのつと発表させる。このことを、くり返す。

(この結果、目のつけ所が広がる・思ったり感じる事が豊かになる・数量を使った表現が適切にできる等の進歩があったように思う。)

・今までのことを聞いて、自分の観劇文を修正しなさい。

※遠足・運動会・作品展・演劇鑑賞等、共通に経験したことで、短く作文を書かせ、例1のようなステップを踏めば、効果が上がるように思う。

例2 人柄の読みとり方(国語)

・(ある範囲を示し)『この中から、太郎がどんな子かわかる所に線を引きなさい。また、そこから、どんな子かわかったら、それを書きなさい。』

(机間巡視して反応を見たら、5つとも全部線が引いてある者…10%位
・4つの者…20%弱(予想より悪かった。)

・(書き出した所を発表させる。この時、補助しながら、どんな子と言えるかと発表させる。また、他の子にも、どんな子が発表させる。このようにして、書き出した所からイメージ豊かに人柄をつかませる。)

※この時、[太郎は、ときどき、いりまぬなどをポケットにしのばせてきて、こっそり教室で食べました。]という文から、食いんほう・あまり勉強のできない子、いたずらっ子・横着な子等と人柄を豊かにとらえるなど、他の4つの文でも効果があつたと思う。

4のまとめ まずできるだけ多くの子が、その子なりに取り組める課題を工夫する。そして、自分なりに取り組ませた後、班で発表しあい参考になる点を見つけさせる。その後、全体の場での発表を聞き参考になる点を見つけさせる。この時、見つける時のポイントを場に応じて提示する。そして最後に、もう一度自分で取り組ませる。

研究主題 効果的対話し合い学習

—自ら考え意欲的にとりくむ子どもをめざして—

兵庫県加西市立北条小学校

小林 俊 広

1 はじめに

子どもは本来生き生きと活動できるものであるが、その活動をさまたげているのは教師中心の授業形態であると考えられる。その中においては、子ども自ら考え活動する必要性はなく自然と受身的な学習になり学習意欲が減退してくるのは当然である。これまでは、教師の発問に対して一問一答でしか答えられない平面的授業、おぼえることだけに終結した授業、一時間中ものいゆめ子をつくってきた授業であったと考えたい。

そこで、子どもたちが学習のよろこびを見出し、意欲的に学習にとりくみ、子どもたちの効果的対話し合いができるようにするため、受身的な学習形態を能動的、主体的な学習形態に切りかえ、子どもを学習の主人公にすえた学習を！と考えバス学習にとりくんできた。

子どもの表現力を高めるために指導の重点を「よく聞く耳」「よく見る目」「よく表現する口」におき、ほぼ固定化した発表者と聞き手の関係を打破するためにも基本的なことから出発していった。

2 とりくみ

① 話し方の訓練

1. 自分からすすんで学習することの訓練

「あすの学習で、わたしはこのことについてみんなにたずねてみよう。このことをグループのみんなに話そう」というように議題の設定をあすの学習として、各自がもつように手だてをする。

2. みんなで学習しているのだという意識づけの訓練

- a. 聞き手からだきむけて話すこと。
- b. 聞き手を確かめてから話し出すこと。
- c. 話しことばに気をつけて、聞いている人によくわかるように。
- d. 自分の発表に対して応答を求める習慣
- e. 聞き手によりわかりやすく説明するため、黒板、小黒板、O.H.P. 自分のできた資料をできるだけつかうこと。

ハ. 具体的な発表の仕方

・ほくは〇〇だと思います。そのわけは〇〇だからです。

わたしは〇〇さんに賛成^{賛成}反対^{反対}です。そのわけは〇〇だからです。

よくわかりませんが〇〇ではないでしょうが。

③ 聞き方の訓練

イ. 聞くことの大切さ

聞いていないと学習のなままりりができないことの意識づけをする。

ロ. 聞くためのエチケット

ア. 話し手の方に顔をむけて聞く

カ. 聞いたことに対してわからないことをはっきりさせる習慣

④ 教科別学習訓練

特定の教科 教材の学習の仕方を学ばせるための訓練

課題の設定-----子どもから自由に。また学習の仕方も工夫させて。ただし自由という発想が先行しすぎて。はい回り学習にならないように。

学習段階の設定-----前もって定められた課題を学習の最初にする。子どもたちの学習をひき出し。問題を焦点化し。検証し。まとめるという道筋を尊重しながら学力をつける。

違った意見を生かす。

④ バス学習訓練

学習に全員参加させる手だてとしてバス学習を取り入れた。

イ. 司会者の仕事内容

・何について学習するか確認の意味で皆に知らせる。

・途中で話を整理しながら次にすすむようにする。

・何が問題かを意識しており。話をそらさないようにする。

ロ. 学習のすすめ方

・一人一人が課題を自分のものとして捉え。自分の考えをもつ。これは家庭学習で十分にやらせる。それをもちよってグループで話し合うのだが。独自の考えがなく。他者の発言を聞くだけでは。話し合いの効果が半減するばかりでなく。かえって依拠心の強い子どもをつくってしまう。

グループ(全体)での話し合い。

疑問に思ったことをその都度記入していき、あとでみんなで話し合ったことをノートにまとめる。(あくまで、個人思考を大切にし各自の意見を述べたり、確認したりするためにグループでの話し合いをする。

④ 支えあう学級集団づくり

子ども全員が自分の力なりに一生懸命学習に取り組む。何でも気がるに気がおなく、自分の考えていることや、困っていることを発言し、それを聞き合いながら学習を進め、ますますやる気を出して学習に参加することができるような雰囲気づくりに力を入れた。

1. 学級目標、学級標(班標)、学級歌づくり。
2. 非論理的態度をとる子ども等について何回も話し合う。
3. 係活動を活発にし、特にレクリエーション係には常にみんなと一緒に遊ぶよう楽しい行事計画を立てる
4. できる限り子どもとの“ふれあい”を大切に教師自ら、子どもと一緒に遊ぶことにした。

3. 学習記録 (算数科)

算数科において子どもが自ら考え意欲的に取り組むということは、指導要領の目標の中にある——日常の事象を数理的にとらえ、筋道を立てて考え、処理する能力と態度を育てる——があげられると思う。具体的に言えば、ある問題を学習する場合に、教師からの教えを待つのではなく、子どもたちが自ら、学習のことを資料として利用し、自分なりの考え方をを用いて思考し、さらに友だちと話し合いながら深めながら、新しい事実を見つけ、確立することだと考える。

単元 計算と式——計算の関の展開

単元目標 四則の意味、四則に関して成り立つ性質の理解をまとめさせ、四則の混合した式の意味を知らせ、正しい計算ができるようにする。

学習過程 問題をいろいろ考え方でといてみよう。

同じキヤラメルを3はこ買って、中のキヤラメルを数えたら全部で360あった。1はこには、キヤラメルが120はこはっていたのさ。

展開

内容	児童の発表と教師の助言	形態
	C. 今日のためあてを確かめてみようか	④ 本時の課題確認

問題
を
つ
ま
む

予
想
を
た
て
る

環
の
る

ま
ち
あ
る

- C. それでは丸などところをいっていきましょう。
- C. 同じキヤメル3は二個あったということである。
- C. キヤメルの数は全部で36個あったからである。
- C. 1は2にはキヤメルが何個はらいていたかという問題です。
- C. それでは00さんから説明してもらおう。
- ...
- C. 何を□にしているのかわからないので教えてください。
- C. この問題でかわらないのは□に入っているキヤメルの数である。
- C. よくわからないのでもう一度説明して下さい。
- C. ぼくがかわって説明する...
- T. 上手な方がいいですね、よかったです。
- C. どうして $\square \times 3 = 36$, $\square = 36 \div 3$ とおぼえてるの。
- ...
- T. 今日の学習で一番丸などところですね。
- C. どうして $\square = 36 \div 3$ とおぼえるのグループで話し合ってください。
- C. 賛成
- C. 反対
- <Aグループ>
- C. どうして $36 \div 3$ とおぼえるの。
- C. ぼくは $\times 3$ とおぼえて12から逆にして $\div 3$ とおぼえていいからと男の子
- C. ああそれじゃ $\div 3$ をおぼえてもいいね、-3はいいね
- C. +の場合は $\times 3$ だね、-の場合は $\div 3$ だね
- C. おけ算やわり算もこのように考えたらいいですね。
- C. Eからの場合は \square を3で割ればおぼえておぼえていいから。
- ...

⑤

課題に対して自分の考えを
発表

わからないところをみんな
おしえて

多面的な意見を
思考のいきづまり

⑥

⑦

グループでの話し合い

⑧

発展的学習

4. おわりに

効果的対話し合い学習を目指し、学級集団づくり学習形態のくりかえしと子どもととも考え、歩みとりくんできた。4月当初より現在は、自分の子ども達の発言量が増えている。全く無音であった子がグループの中だけではあるが言えるようになり、一緒に言いたいことが言えるのが楽しいという。ところが、皆が納得いくまで話し合っているとどうしても時間延長となってしまう。教師が足らなくなる。また、次元では、何れも回る学習になりかねない。このような問題を解決していくためには、さらに教師自身が入念に深く教材研究をし、教材を精選すると同時に、子どもの発言力を適確に見分け、見切る力をつけていかなければならないと思う。

第7回 全国バス学習研究集会

効果的な話し合い学習

支えあう学習集団づくり

徳島市八万南小学校

北村 艶子

1. はじめに

新しい教育のねらいとして「ゆとりあるしかも充実した学校生活の創造」ということが望まれている。このことの実現は何ととっても1時間1時間の授業におけるゆとりと充実が図られなければならない。では学ぶ者にとっての授業におけるゆとりと充実とは何であろうか。

それは、「よくわかる授業」であり、「自分から進んで取り組める学習」「自分なりにじっくり考えたり想像したりすることができる授業」ということであろう。つまり、ひとりひとりがよろこんで参加する授業の創造ということである。

2. よろこんで参加する授業

このことには、いくつかの条件がある。

(1) 人の話に耳を傾けて聞ける学級づくり

問題に直面し答えを求めるまでには、児童たちの試行錯誤がある。この試行錯誤には、ある児童の誤解や曲解があろう。この誤りを聞けることが、どの児童も参加できる条件の一つである。どの児童の発言でも、最後まで聞ける人間関係が育てられなければならない

(2) 何でも発言できる学級づくり

児童にとって、思ったことが言える学級は、自己の存在が認められる学級である。発言するためには、相手を意識したり、発言内容を気にしたり、間違っはならない、というような気後れによって恐怖感をもってしまう。だから認め励ますことによって、学習への

意欲をもり立てなければならない。

(3) 学習方法の改善

学習指導法は一般的にまだ一問一答式一斉指導の域を脱していない。これでは一時間の指導を終ってみても、目標に対する到達度がいまいなことが多い。五、六人の児童の発表を聞いてなんとなく学力が高まったような鎖覚をもつわけである。

このような教師中心のつめ込みによる弊については論をまたないところである。ここに学習方法の改善が求められるのは当然のことであった。

以上のようなことから「新しい教育の灯」として、ここに脚光をあびたのが「バス学習」なのである。

3. バス学習への期待

バス学習は、効果的な話し合い学習により、「自ら学ぶ」力を高めながら、児童達相互の力で学習を推し進めていく。つまりバス集団に支えられながら、自力で学習する構えを育て方向を示唆し方法を学びとらせることができる。同時に支え合う学習集団を育成し、人間関係を高め「生きがい」につながるものなのである。

4. バス学習への取り組み

前述のようにバス学習は、小集団による効果的な話し合い学習により、ひとりひとりの学力を伸ばし同時に支え合う望ましい人間関係を高める指導の統合である。そこで指導目標もこの両者で設定する。

課題のないところに、学習は存在しない。バス学習においても適切な課題の構成と提示、解決方法の指示などが必要となる。前者については、個々の教材により、教師の指導意図によって一概に述べられないので、後者について考えてみたい。

1. 拡散反応……解決への予想を立て、方向や見通しをもつ

◎分類 —— 分けるバス (単 純)

◎比較 —— 比べるバス (単 純)

2. 集中反応……課題に没頭し、予想を実証する解決行動。

◎解決 —— 集めるバス (深 化)

3. 主体反応……学習を反省し、問題点や解決事項などを明確にする。

◎確認 —— まとめるバス (複 合)

4. 発展反応……練習により理解を確実にし、他へも適用をはかる。

◎応用 —— ひろげるバス (複 合)

バス学習には、一つの問題解決のために、小集団で集中的に話し合う「単純バス」と学習過程の中で、問題解決に至る思考の流れをプログラムに組み、小集団で話し合う「深化バス」がある。更にその両者を組み合わせた「複合バス」がある。それらの位置づけは教師の指導意図によることはいうまでもない。

5. バス学習の実践例

◎国語科（光村）3年上

／单元 心に思ったことは（どう話）

2 題材 太郎こおろぎ

3 指導目標

- a 価値目標……この童話にこめられている「人物像」を、感じとることができるようにする。
- b 技能目標……登場人物についての語り手のとらえ方と、自分の考えを比べたり、人物の性格や場面のようすを手がかりにして、イメージ豊かに読みひろげられるようにする。
- c 言語事項……人物の心情を理解するために必要な文字や語句に関心をもち、それを増すことができるようにする。

4 本時の指導（／〇時間扱いの第6時）

- a 本時の目標……消しゴムの場面から、太郎としのとの関係を中心に、太郎の人柄を読みとることができる。
- b 本時の展開

指 導 事 項	学 習 事 項	バ ス 学 習
1 本時の「学習のねらい」を明確にさせる。	1 本時の学習のめあて「太郎はどんな子か、読みとろう。1をつかむ。	② 分けるバス…一人ひとりの児童は、既習の学習体験の想起から、本時問題解決の方法を選別して考えるであろうが、バス学習によりその方法がより明確になり、効果的に学習を進めることができる。
2 人柄を読み取るために、言動や気持ちを手がかりにすることを理解させる。	② 学習のめあてを解決するために、どうすればよいか話し合う。	
3 「学習のめあて」を考えながら、読ませる。	3 消しゴムの場面を音読する。	
4 太郎の言動について、想像しながら読ませる。	4 課題にそってひとり調べをする。	

5 一人ひとりの感じ方や考え方にはちがいがあること
に気づかせる。
6 外の人物がどう
思い、どう言っ
ているかを調べるこ
とにより太郎の人
柄の読み取りを深
めさせる。
7 本時学習のまと
めをさせる。
8 次時の学習へ方
向づける。

⑤ひとり調べした
ことを、小集団で
話し合わせる。
6 全体で話し合っ
て「学習問題」を
まとめる。
⑦プログラムによ
ってバスをし、本
時の学習をまとめ
る。
8 次時の「学習の
めあて」を知る。

⑤集めるバス・課題
に向って読みひろげ
読み深める。学習展
開の場面である。
ひとり調べの読み
取りの上に、友達
のいろいろな意見を
聞くことにより、い
ろいろな読み取りが
あることにより、自
分の読みが深めら
れる。
⑦作成されたプログ
ラムにより、本時の
学習のまとめを効果
的にする。これは深
化バスで、ラダース
テップによりaはじ
めにbつぎにcそ
れでdそうすると
・・・のように話し
合われる。

6. おわりに

現代っ子は、「頭でっかち」だとか「感激がない」たどと言われているが、ほんとうにそうなのだろうか。地下水もそのままではわき出してはこない。きっかけが必要なのだ。

話し合い・・・というもっとも人間的な活動をとおして、個人と集団との相互関係に着目し、学力と人間関係の統合をはかったすばらしい学習方式。その効果と価値を信じて歩み続けてきたが、日暮れて道遠しの感じきりである。

しかし、何よりも児童たちの「バスは楽しい。」「勉強がよくわかる。」「きらいだった友だちとも仲よくなれる。」「・・・などのよろこびの声に支えられてがんばってきた。

反面、バス学習をより確かなものにするために、「位置づけ」「書くことへの定着」「評価の方法」などの問題についての研究を重ね、よりよいものに育てあげたいと願っている。

第17回全国バス学習研究会 (分科会番号3)

(研究主題)

思考を深める相互作用

——自由バスによる人間関係の高まり——

三重 一志郡波瀬小学校

吉井 秀人

<要旨>

授業を通して学力と人間関係の向上をはかるという2つの目標を同時に達成させるための解決方法として自由バス方式——授業過程の中に自由バス"の教育操作を導入した授業方式——を取り上げ、その実践的研究をすすめた。研究計画は1時間での自由バスを導入した授業実践の試みと、年間の実践を通して得られた成果の測定である。前者は授業設計や指導過程への自由バス"の適切な配置の工夫がなされ、後者では学力(標準学力検査)、人間関係(ソイメリー、志村調査) 学級集団の発達(学級構造、志気)の側面から検討した。得られた成果によれば、児童の学力、人間関係、学級集団のいずれにおいても、望ましい方向へ変化し、自由バス"の授業研究の有効性が支持される結果が得られた。また今後解明されなければならないいくつかの問題点もある。

<研究内容>

1. 自由バス"の教育操作。

児童自身の意志によって自由に相手を選択し、また変更できるという特徴をもつ。更に積極的参加をうながすために、次のようなルールを設立した。

- 課題解決できない児童は立ち上がってできる児童にたすねに行く。
- 解決できない児童は、できるまで席にもどれない。
- 解決できている児童はたすねに来た子に教える義務がある。

2. 学習効果と学力の測定

自由バスの学習効果とメンバーを固定したグループのそれを、フリティ、オスト、テスト、把持車移動テストの成績で比較すると、自由バス群の方が良かった。また自由バス方式の導入前と導入後(3学期)の学力を標準学力検査でくらべると、成績は伸びていることがわかった。

3. 児童の参加についての意識調査

質問紙による調査結果から児童は、認知的にも、態度的にも(人間関係)満足していると回答するが多い。今後も自由バスを続けてほしいと答えた子は90%以上。

4. ソシオメトリックテスト結果

課題について説明する者、聞く者とのかわりによって相手をよく知り、相互関係が高まることがわかる。また1学期と3学期の比較によって、学級集団としてのまとまりができてきたことが示された。

5. 社会心理学的構造の変化

権威構造(リーダーシップ)、接近構造(相互作用)目標指向(目標、方法理解)の3つの側面(塩田、田中)からとりあげ、1学期と3学期で調査した。その結果、接近構造の得点の変化は、成績にかかわらず、相互作用や好意的感情の促進がなされる結果が見い出された。

6. 学校生活に対する志気

日本文化科学社のスクール・モラル・テスト(S.M.T.)を実施した。テストは1学期と3学期をくらべて比較すると共に、他学級(統制群)でも実施してもらい比較した。その結果、級友や教師との人間関係は3学期の方が良くなった。また統制群にくらべて、人間関係はよいことが明らかになった。

7. 児童の観察から

学級担任からみて、上記の結果のほか、特徴的に感じられることは、この期によくみる男女の対立がみられず、男女混合の遊びや協力がみられた。

8. 問題点、今後の課題

教科、課題の性質、発達段階(学年)評価、グループ構成、成員の能力と参加、導入するところ、固定グループ学習との関係、リーダーの変化。

研究主題 理科学習における個人思考と集団思考
単元「ほのお」の実践授業報告

滋賀県神崎郡五個荘町五個荘小学校
友本志津雄

1. 今回の授業を組織するにあたり、

(1) 学習内容のあらまし

○ 炎の部分による違い……色・明るさ・温度

○ 炎のしくみ……炎の中の気体の存在
温度と空気の供給量

○ 燃えるものの状態の変化……ろう 固体→液体→気体
(本時)

○ 木材の熱による分解

(2) 学習計画のねらい

○ 単元全体を見通し

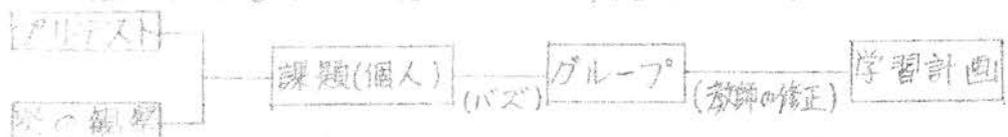
○ 子どもから生まれた疑問 → 課題

・ プリテストの作成 (\times 式・選択式 \Rightarrow 記述式)

・ 炎の観察からの疑問

○ 教師の意図を配慮した修正

○ 個々の子どもの予想をもとに実験方法を考え出す方法



(3) 指導目標

◎ 学習目標

- (1) 炎の名称に応じた色・明るさ・温度の違いと空気の量の違いとの関係を説明する。
- (2) 炎はなぜ燃えることができるかわかる。
- (3) 木材を空気の入れ換わらないところで熱すると、燃える気体が出て、あとに木炭が残ることがわかる。

- 態度的 A. 疑問に対しての予想を立てながら、炎を出して燃えるしくみを確かめようとする。
 B. 実験・観察の結果をもとに自分の考えをはっきりさせながら話そうとする。

◎本時(第4次 2/2 時限)の目標

- 認知的 ろうそくの炎は、ろうが熱せられることにより、固体→液体→気体と状態をかえ、気体が燃えるために炎の燃えていることがわかる。
 態度的 A ろうそくの炎はろうが気体になって燃えているという予想のもとに確かめようとする。
 B 実験結果をもとに自分の考えをまとめて話そうとする。

(4)学習課題

第二次

- ・ろうそくの炎を観察し、色や温度のちがいをみつけよう。

第三次

- ・炎の色や温度の違いと燃えるものの関係を考えよう。
- ・炎の形について考えよう。

第四次

- ・ろうそくのほのおは、何がどのようにして燃えているのだろう。(本時)

第五次

- ・いろいろな物の燃えかたについて調べよう。
- ・木の炎について考えよう。

2. 今回の授業の実際

本時は、第四次の2/2時限目である。第三次に炎の中の気体(白いけむり)を形ど出し、この白いけむりが何であろうかという問題意識を高め、前時に、燃えるものがいっただい何であるのかという予想を考えさせ、この予想をもとに実験方法を考え、本時で確かめたのである。また、同時にしんの様子についても考えさせた。

<児童の予想>

- ・ろうが溶けて蒸発して、それが燃える。
- ・ろうが燃えている。
- ・しんがろうをまわっている。
- ・ろうは燃える気体となって炎の中へ入る。

〈学習の流れ〉

課題確認

C37. ろうのとけたものが、しんから伝わって、蒸発しても燃えるのです。(予想)

学習のめあて

C26. 実験の時に、はじめをつけてしっかりかんげろ。

実験方法の確認

C31. 小さなことも見逃さずにノートに記入する。
1班～9班. 発表

実験時の注意

- ・試験管の口を人に向けない
- ・火が広がったら、おわてずに
- ・ろうの量は小指の量

実験

各グループ毎に実験

結果発表

ろうを熱したらどうなった？

1班 ろうが蒸発して燃えていた。

6班 白い気体が出てきて、火を近づけたら火がついた。

しんの役割の実験はどうだった？

7班 ピンセットでつまむとだんだん火が小さくなって消えました。

3班 ピンセットでつまむと小さくなり、離すと大きくなりました。

炭を出して燃えるしくみ

個人 ⇒ グループ ⇒ 全体

2班. ろうがとけて、しんを通って、蒸発して燃える。

5班 しんの働きは、すい上げるといふことと、もう一つは、ろうは蒸発して火がつくということ。

7班 しんからとけたものが上がって、先であなたのためらねて蒸発したものが燃える。

まとめ

↓ 固体 → 液体 → 気体

反省

質問

〈実験の振り返り〉

・実験に対して、そういう実験を行いたしかめるか、といったことをほかに考えていた。(翌日の実験方法)

・質疑 自分の考えがでっぴりさせる手段。実験中は特に印象

づけられたものだけ、くわしいと時間がかかる。

・各種の実験をやらせた。各グループの予想をもとに実験方法を考えさせた。方法についてのグループ間の意見交換が時間の都合でなかった。

3. 児童の思考と評価

(1) 個人思考の変容例

C29 酸素をすって、二酸化炭素を出す。(テスト) ⇒ ろうが溶けて、しんに伝わって行って、蒸発したものが白いけむり

C27. もえる元がある。(テスト) ⇒ ろうが蒸発して、炎に送られ、炎が出る。

C19. ろうが溶けて蒸発して燃える。(予想) ⇒ ろう(固体)が炎にあたためられて溶けて、とう明になり、しんによって炎の中へ入り蒸発して気体(白いけむり)になり燃える。

C28 燃える(予想) ⇒ ろうがとける → しんをつたわる → 蒸発 → 炎

(2) 集団思考

個々の児童が自分の予想意見を持って、この予想に従って、実験方法の計画を立て、実験 ⇒ 実験結果から、課題追求を行なった本授業は、児童の科学的思考に効果的な指導と考える。しかし、ポストテストの結果など、認知的効果の面をより重視するならば、一斉的な実験を行なった指導の方が効果的であったかもしれない。本授業において、認知的効果のより充実をはかるためには、相互作用のより良い効果を上げるより他ならないであろう。実験方法についての、学級集団の思考のやりとりが不足していたこと、また、実験結果の考察についての相互作用も、充分でなかったことが反省すべき点である。今後、科学的思考分野において、より効果的な相互作用の充実をはかるなければならない。

思考を深める相互作用

— 5年生 算数の実践を通して —

新潟県五泉市立五泉南小学校
大 関 巖

1. 日常の基本方針

個人学習(ひとり学習)

フリテストにより、学習が強く動機づけられ、子どもたちの手により学習計画がたてられ、適切な学習課題が設定され、かつ単元全体の学習の見通しを十分持つことができるならば、子どもたちの学習意欲は高まり活発なひとり学習が展開されるだろう。それが、ひとり勉強ノートの提出という主体的な行動となってでてくるはずである。

その時、教師は、次の様に対応してやることにしている。知的に低位の子には、疑問点をはっきりさせておくように、また、少々解説的なことはヒントをおりませてもら。中位の子には、まず、自分の考えを持つこと、持ったら、まちがっていてもよいから自信を持って授業にのぞむように励ましのことは書いてやる。理解の早い子には、その考えの他に、もっとちがう考え方(解決方法)はないかとゆきぶりをかけたり、時には示唆を与える。

また、自由に個人で考える前に、バスグループで課題を確認しあったり、解決の見通しについて話し合わせたりしている。

→ **班バス** ひとり学習の成果が、十分発揮されるように、次の点に留意して指導している。

(1)

- 全員参加を原則とする。そのため、特に、バス長にはメンバーから話をひきだすべく、なごやかさが必要であることを強く訴えておく。また、話し方はバス長も発言者も形式けらず気楽にする。
- 話し合いをひとりじめしないように。
- 話しにくい人に、なるべく先に発言してもらう。
- よくわからないこと、つぶやきのような意見をできるだけ捨いあげてもらう。
- よく言える人は、なるべく後から発言する。「人の考えをよく聞いて、人の言わなかったことを言って欲しい。」と指導する。
- 異質な、他とみる角度の違う考えを歓迎してほめあうようにする。

→ 班バスから学級集団へ

特に、この段階が、主題から考えて最も大切だし、必ずかしい。(単元、「三角形と四角形」の授業実践例を、ここに絞ってあげてみたい。別紙資料)

まず、基本的には、

異質な考えやつぶやき、あいまいな考え、間違っただけの考えをそのまま紹介的に学級へ提出する。(班でまとめすぎない。)

例) 『私たちの班での話し合いを紹介します。まずAさんから「……？」という疑問が出されました。しかしまだはっきり解決していないのです。みなさんからも考えて欲しいのです。次にB君から「……」という考えが発表されましたが、この考えとCさんの「……」という考え方が分かれてしまいました。この2つの考え方をどう考えたらいいのでしょうか。私はB君の考え方に賛成なのです。わけは○○○○だからです。』

一人の発表者のあと、同じグループの者が補足する

例) 『ほく(B)の考え方をもう少し詳しく説明します。それは……』※ことはだけでなく、黒板や道具を使った説明となるようにする。

他のグループの発表したことは同じだとして重複をさける。賛意を表明したり補足程度にする。

例) 『私たちの班では、Cさんの考え方にまとまりました。でも、Cさんの説明が簡単だったので、もう少し詳しく説明します。……』

提出された疑問などは、解決の見通しがたった者が説明を加える。
(班)

例) 『Aさんの疑問について、私たちの考えをいいます。同じことがD君から出されみんなで考えてみたのです。それは……』
『Aさんのいる〇班のみなさんどうですか?』

説明があっても、それでもまだ納得がいかなかったり、わからない点があったら再度問い返してみる。(さらに補い合ふとする)

例) 『さっき、Cさんの考えについて△班のEさんが説明してくれましたが、ほくは、まだすっきりしないところがあるんです。〇〇〇のところをもう一回説明して下さい。』

さらに、解決方法をめぐって、意見が対立した場合など班バズを要求し、考えをより深める。

例) 『先生、B君とCさんの考え方について、もう一度班バズをやらせて下さい。3分間でいいですから。』

無理にまとめようとして、ある意見に追随したり、多数決をしたりしない。

よりよい考えや、意見が発見できたり、理解できたり、また自分の間違いに気づいた時は、自分の考えに固執せず、班や学級全体に提出紹介する。

例) 『私は、最初Cさんの考え方だったんですが、さっきの班バズで、Sさんの意見を聞いて、なるほど、B君の考えがよりよいということがわかったんです。私は………が考えちがいをしていたと思います。』

例) 『ほくは、今の話し合いで、ふっとひらめいたんですが、Cさんの考えをこうすれば、B君の考えにつながりまとめられると思うのです。それは………。』

いくつか提出された疑問点、考え方についての最終決定は個人とする(他と違った自己決定をする自由の保障。)

教師の補足説明

例) 『先生、私たちはここまで考え合いました。あとはお願いします。』

確認バズ

今の学習でわかったことは何か、さらに疑問に思ったことは何かについて確認し合う。

全体で確認

次の課題へのとりくみを約束し合う。

(4)

第17回全国バズ学習研究集会 (分科会番号3)

研究主題「学習過程における評価の研究」 ——観点別達成度評価と即時評価——

春日井市立西山小学校
新木 秀 弘

1. はじめに

一昨年度から児童の指導要録の内容も変わり、観点別の到達度評価をつけるようになってきた。しかし、現実には、観点別のあらゆる面の達成度がどのように達成されているかの追求より、成績の評定が、各教科とも知識、理解、技能面だけでつけられることが多かった。そのため、毎日の授業の指導の重点も、知識、理解の面を中心にすすめられていることが多かった。けれども、観点別到達度評価のねらいが、知識、理解の認知的な領域ばかり重視するのではなく、興味、関心、態度などの情意的な領域や技能、能力的な領域も充分考慮して評価するようになってきている。また、毎日の授業においても、上記の三領域を教師がしっかり把握し、自覚して指導していくことが児童の学習意欲を高め知識の定着をはかっていく上でも大切であると思っている。そして、到達度評価が、児童の成績を他人との比較でみるものでなく、学習目標に対してどれだけの児童が出来たかをみていくものである。だから、教師は毎時間の目標をきちんと把握していて、その目標にどれだけの児童が達成しているかをたえず把握していくことが大切である。その把握の方法が評価である。評価して達成が不十分ならば、フィールドバックして再指導をして十分理解させたり、どこに指導の欠陥があったかを追求しなければならない。このように「指導」と「評価」は一体でお互いに関連しあって指導の向上に役立っている。

2. 研究のねらい

本年度の研究のねらいを次のようにたてて研究をすすめてきた。

(1) 学習過程における評価を追求することにより次の6点の進展をはかる。

- 児童の参加度を高め自己実現の場を与える。
- 学習内容の理解を促進し、深化拡充をする。
- 児童の学習意欲を高める。
- 児童の社会的態度の変化と人間関係の一層の醸成をはかる。
- 個の発見をはかり、個の育成をはかる。
- 指導と評価の一体化をすすめて授業の改善をはかり、学習の効率化をすすめる。

3. 観点別到達目標のとりえ方とすすめ方

観点別到達度評価を学年末の指導要録につけるためにするという考え方に立つと毎時間、単元ごと、学期ごとに評価をきちんとつけていかななくてはならない。そのため、教師は評価のために授業をするという考え方に立つのではなく、毎日の授業の目標をしっかりと立て、目標に対してどれだけ到達しているかをみながら授業をすすめることが大切であり、それが到達度評価を充実することであると本校では考えて研究をすすめてきた。

そのため、市から出されている観点別到達目標を生かした授業を設計していくことが大切であると考える研究をすすめた。具体的には、次のような点にしばって研究をすすめてきた。

- 「市から出された観点別到達目標」を分析して、1時間ごとの観点別のねらいをはっきりさせた授業を推進する。
- 毎日の授業において、その時間のねらいを児童に知らせ、学習中や授業の終わりに児童自身に反省させる自己評価活動を充実し、児童の学習意欲を高めようとした。また授業の活動状況を観察、発言、ノート、児童のメモ、感想文、小テストなどをつかって評価したものをどのように記録したり、累積したりするか、その方法を工夫研究する。
- 学習中児童が到達目標(1時間の目標)にどの程度到達したかを把握するため即時評価を充実して授業をすすめる。その実践とその結果の活用方法(指導の反省、授業の改造、児童の参加度の向上、評価結果の累積方法)の追求につとめる。
- 態度、関心を評定するために、具体的にどのような方法を実践して、毎日の授業の改善と子どもの学習意欲の向上にどう役立てるか追求する。

◎到達度評価をしていく上での留意点

- この評価を、指導要録や通知表に成績をつけるための評価という考えでなく、児童が目標に対してどれだけ到達したかをみていくためのものである。その結果は、指導の反省に役立て、授業をどう改善していくかに資するものでなければならない。
- 到達目標は、知識理解だけでなく、態度、関心、技能の面からも検討して、教師自身が何を教えるかを十分に工夫し研究して作成することが大切である。
- 到達度評価は、他人との比較をするものでなく、目標をどれだけ達成したかをみていく評価である。
- 到達度評価の実践にあたっては、形成的評価の充実をはかり完全習得学習をめざすものでなければならない。
- 毎時間の指導にあたって教師はしっかりした目標をもって授業にのぞむことが大切である。
- 授業中の評価では、児童にこれがわかりましたかとたずねるより、具体的な問題を出してこれが出来ましたかとまく方がより科学的で確かな評価方法である。

4. 研究内容(各学年の実践)

低学年(1年)

(1) 座席表

一年生は、まだ、脅くことに抵抗があり、テストによる評価に、かたよることは、危険である。児童一人一人を、細かく観察し、座席表を活用して記録することを試みた。また、結果やできばえのみを重視することをさけるため、作業中の児童の様子をチェックしていった。遊んだり、観察している時など、様々な場面での児童のつぶやきをとりあげるのに、大へん役立った。

(例) 理科「磁石遊び」

- くつつくものはてつ、ふくや木はくつつかん。
- クリップにクリップがつく。
- クリップはさいこう 4こまでつく。 ※ これは、磁石・クリップ
- さてつが よこからとんでくる。 砂鉄等で、自由に遊ばせた
- 本の下からでもうごく。 場面で、ひろったつぶやき
- 下じきの上でさてつがダンスする。 の一部である。
- ぶらんこみたいにふるえて、ついている。

(2) 評価テスト

観察をしていく一方、授業中の活動が、具体的にあとに残るよう、ノート・プリント・小テスト・ワークシート・ペーパーテスト等を活用した。評価テストは、たとえば、国語ではひらがな五十音の表記・拗音・掟音、長音、拗長音の表記、というように、なるべく細かいステップで、一人一人の学習状況が把握できるようにした。

(例)

(3) がんばりノート

単元ごとの区切りだけでなく、反復練習ができるよう、小テスト用のがんばりノートを作った。このノートは、国語の書き取り、算数の計算練習に、主に活用し、必ず、できなかったところを、その日の内に、繰り返し練習させ、事後の指導に努めた。ノートという点で、プリントより児童の進歩の記録が累積でき、教師の手元に置いておけるという利点が、大きかった。

(4) 評価の難しい観点に対する試み

評価を、教師の主題に頼ることのないよう、どの観点でも、なるべく具体的なものにあらわすことのできるように、評価方法を工夫した。たとえば、国語の「聞く」の観点では、話を聞いて答える、聞き取りのテストを行った。また、図工の「鑑賞の能力」では、児童の作品の中から、よいと思う作品、作品のよい所を深させ、それにより評価するという方法も試みた。「関心・態度」では、国語で 本読みカード、本読み感想カード。音楽では、ピアノ

カ練習カードを利用した。

(例) 本読み感想カード → 別紙

(5) 総括的評価について

通知表の学習状況は、それぞれの目標のはぼ9割以上理解していれば+、6割以下であれば-とし、評定欄も同様に、◎と○をつけた。国語、算数は、具体的な到達目標をあげ、それに対する評価を行った。

学習の様子〔3学期〕

高学年(5年)

(1) 学習過程における形成的評価の有り方

授業の展開は、下位行動目標を一定の順序でおさえながら進行していく。到達目標を達成するためには、一つの下位行動目標が達成されなければならない。このことは下位行動目標のまとまりごとに評価し不十分なところは補充しなければならない。

この形成的評価については、教師だけでなく、子ども一人ひとりの自主的な自己評価とグループ活動の話し合いの中で評価される。

(2) 教育課程の内容と、観点別到達目標と照らしあわせた評価方法

ア 算数の題材教材

ケ 三角形と四角形より

	時数	教育課程	目標行動	評価方法
(1) 合同な 図形	1	用語「合同」を指導し確かめる	A・C	ノート
	2	対応する頂点辺角の意味を指導 合同な図形の性質について考察	B	ノート・小テスト
	3	合同な図形を見つける問題	A・B・C	ノート・小テスト
(2) 三角形と 四角形の かき方	4	三角形の形大きさについて考察	D	ノート
	5	三角形のかき方の指導練習	D	ノート
	6	四角形のかき方の指導練習	E・F・G・H	ノート・小テスト
	7	合同な図形三角形四角形の作図	F・G・H	ノート・小テスト
(3) 三角形と 四角形の 角	8	三角形の内角の和(180°)を実証 四角形の内角の和を考察	I・J	ノート
	9	角の大きさを求める問題作図	I・J・K	ノート・小テスト

<目標行動>

- A 図形の合同の意味がわかる。
- B 合同な図形では、対応する頂点・辺・角の大きさが等しいことがわかる。
- C 平行四辺形、ひし形は対角線によって2つの合同な三角形に分けられることが分かる。
- D どれだけの条件を用いれば、合同な三角形をかくことができるかわかる。
- E 合同な四角形のかき方がわかる。
- F 合同な三角形、四角形をかくことができる。
- G 三角形・四角形を合同という観点で調べることができる。
- H 合同な図形をかくために必要な条件を見つけようとする。
- I 三角形の内角の和が 180° になることがわかる。
- J 三角形の内角の和が 180° であることを基に、多角形の内角の和を考え出すことができる。
- K 三角形や、多角形の内角の和を図形の性質を用いて調べようとする。

(イ) 考察

教育課程の示した学習内容と、市教委の示した目標行動が、必ずしも一致しない部分が見うけられた。この方法によると、教師は、小テストをするなど評価に追われ、時間的には指導内容が短縮できるということがわかった。また一方、学習内容に児童がについていけないという不安も感じられる。

学習過程の中で形成的評価をすることによって、一人ひとりの解かり方の良さを認めてやることができ、主体的・個性的な学習力が育っていくものである。

高学年（6年）

関心・態度の評価について

1 はじめに

観点別評価をふりかえてみると、最も取扱いのむずかしいものが、関心・態度である。関心・態度の趣旨をみても、一体何によって評価すればよいのかが、よく分からない。そこで、関心・態度の高さを測りうる具体的な行動と数量化について、研究してみることにした。

2 方針

- (1) 評価のための評価ではなく、各教科の学習の土台となりうる具体的な行動を見つける。
- (2) 関心・態度の高さを数量化するための妥当な評価規準をつくる。

3 研究の内容

(1) 国語

予習による評定と発言・読書量による評定を総合して評定する。

意味調べ（意味のわからない語句をどれだけ調べたか）

- 次の單元にはいる前にやった② いわれてやった① やらなかった④
- 発言（授業中どれだけ挙手をし、発言したか。教科書を進んで読んだか）
- 挙手・発言回数を5段階絶対評定
- 読書量（図書をどれだけ読んだか。家で教科書を何回読んだか）
- 読んだ量を5段階絶対評定
- ノート（わかりやすく、大切な事項がしっかり書けているか）
- しっかり書けている③ だいたい書けている② 書けていない①

(2) 社会

予習内容による評定（調べるための資料を自分でさがし、自分の力で調べる。そして、調べたことをノートにメモする。そのノートの内容によって評定）

	アとイ③ ウとエ②	ア・イ② ウ・エ①	ア・イ① ウ・エ④
観	ア、課題についてくわしく調べてある	だいたい	少ない
点	イ、メモとして書かれている	だいたい	丸うつしとなっている
規	ウ、わからないことが調べてある	書き出してある	ない
準	エ、自分の考えがまとめられている	だいたい	ない

5. おわりに

評価を研究することにより次のような成果をあげることができた。

- 児童の理解の程度、学習の修得力などをより具体的に把握することが出来て理解の悪い児童への再指導が適切にできるようになった。
- 毎時間の即時評価の実践は、児童に学習のねらいを自覚させて理解を促進し、学習意欲を高めることができた。また児童のつまづきがよくわかり、フィードバックが可能で、理解の段階にそった具体的な指導が出来て、理解を定着させることが出来た。
- 教師が観点別の到達目標を分析研究して授業にのぞむことにより、学習内容の精選と指導の要点の把握がより可能となった。
- 観点別の評価をおしすすめることは、教師の学習内容の分析がより具体化し、指導の手だて、授業の準備、テストの処理等を計画的にすすめることの大切さが自覚されて毎日の授業内容の充実に役立っている。
- 評価の研究は、教師が児童の実態と多方面からより深く理解するのに役立ち、児童の理解を確実にすることは、適切な指導はどうあるべきかがより可能となって授業の改善が促進され、よりよい指導法の追求となっている。児童の思考力も高まっている

以上、本年1年間の実践のまとめを列挙したが、今後次のような問題点の追求をしなければならぬ。

- 児童の活動状況を各方面からとらえて評価しているが、その結果を毎日の授業に生かすために授業構造のあり方をもっと研究していくことが重要である。

第17回全国バス学習研究集会(分科会 3)

研究主題

思考を深める相互作用 (高学年)

兵庫県姫路市立城南小学校 津野敬子

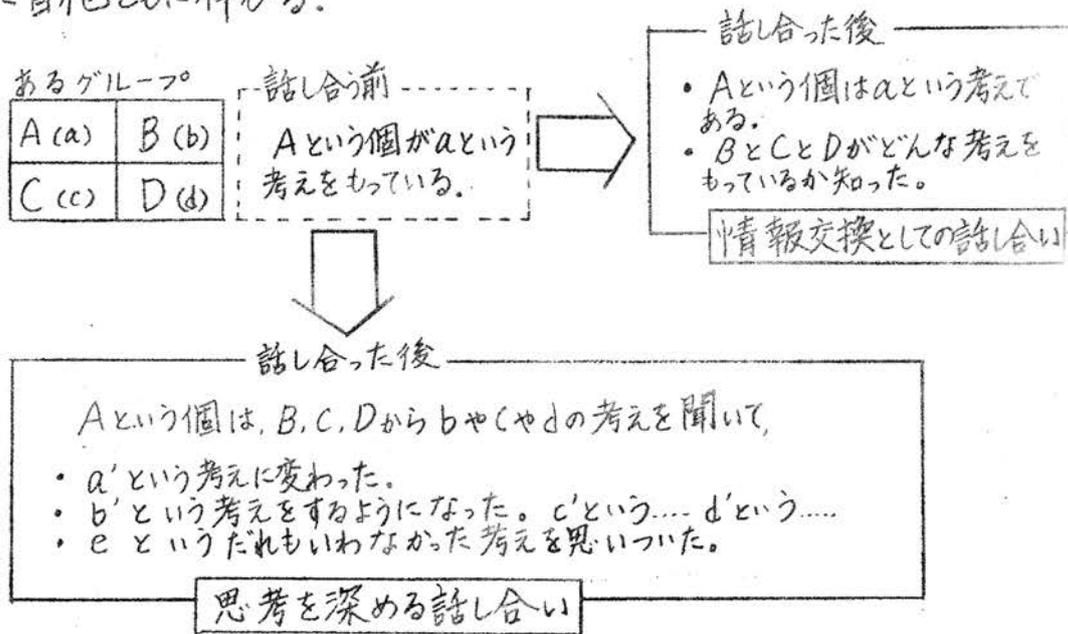
1. 本校の実態

本校は市街地であり、ドーナツ化現象で年々児童数が減少しているという典型的な都心型の学校である。家庭の職業は70%が商業を営んでおり、親の労働時間は長く、忙しい。そのため、家庭での話し合いが少なく、学習は塾にお任せ(学習塾に行っている児童は全学年にわたり、他校の2~3倍)極端には、三度の食事も親子がいっしょにとれない家庭環境の児童も多い。なおかつ、校区外通学者が8%おり、適当な遊び場所も少なく、学年のわくをはずした遊び方や、集団でチームワークをとるようなスポーツをするといった遊び方も非常に少ない。これらの要因から本校児童は、自己中心的な考え方の強い子が多く、友だちと共に知恵を働かせ物事を解決しようという態度が育ちにくい。本校では、そのような児童の実態をとらえ、バス学習を適切な場でとり入れることにより、共通の課題に向かって、相互に、活発に作用し合いながら共に力いっぱい伸びようとする態度を養うことをねらっている。

2. 思考を深める相互作用とは

ある課題に取り組む際、個ひとりの思考で解決できた時には、個と個、個と集団の間には、思考を深める相互作用はなかったといえる。次に個人思考のあと、問題解決の途中に、グループや全体での話し合

いを入れ、他の個の考えを聞いた場合はどうだろう。それが情報交換を
 しただけに終わったというのであれば、たとえていえばたし算の世界のようなもので広
 がりはあるが深まりはなかったといえよう。もう一歩進んで、他の個の考えを聞く
 ことにより、自分の考えがより高いレベルに変わったり、新しい考えが生まれた時、
 逆に、自分の考えを述べることにより、他の個の考えがより高いレベルに変わ
 ったり新しい考えが生まれた時、思考を深める相互作用があったといえる
 のである。それはかけ算の世界のようなもので、他との作用があるゆえ
 に自他ともに伸びる。



(※ 学級全体の話し合いでも同様である。)

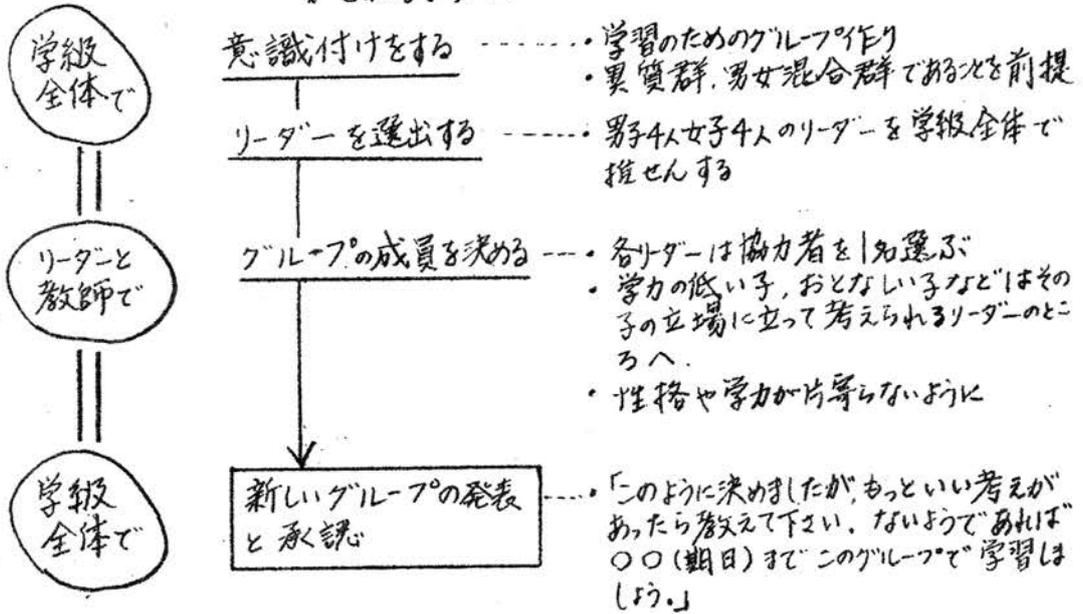
3. 実践

思考を深める話し合いが成立するには、ひとりひとりが意欲的に課題
 に取り組み、十分な個人思考をし、自分の考えや疑問をはっきり持つこと、自
 分の考えと比較しながら友だちの考えをしっかりと聞けることが必要である。
 そのために (1) 学習集団としてのグループ作り (2) 問題意識を高める課題
 作り (3) 全体の話し合いでの教師の役割について実践の例を上げよう。

(1) 学習集団としてのグループ作り

それぞれのグループは、課題解決に必要な知識、理解、技能をもって
いる者で構成されているのが理想であるが、学級の中には学力の低い児童
もいるのが現状である。

① グループ編成-----いろいろな個性を持ちながらどのグループもバランス
がとれるように。



② グループ運営-----きびしさとやさしさをもって。

- ・生活面(そらじ、給食、遊びなど)ではやさしさと協力を前面に。
- ・学習面ではきびしさを前面に。(安易に友だちを頼らないように。まず自分の力でやってみよう。)

③ グループバス-----思考を深める話し合いになるように。

- ・個人思考を十分にさせる。(ノートに自分の考えを書く。)
- ・聞く力を育てる。(自分の言葉に言い直す。反問、比較しながら聞く。)
- ・わかってもらうため工夫しながら話す。

(話す向き、声の大きさ、話すスピード、間のおき方)
(黒板の利用、TPの利用)

(2) 問題意識を高める課題作り

- 単元全体を見通した課題であること。
- いろいろな解決法のあるもの。
- いろいろな考え、意見が出やすいもの。
- 結論(解決)まで思考の段階があるもの。

(3) 全体の話し合いでの教師の役割

- 少数意見、珍しい思いつきがグループの中で埋没することのないように、グループバスの時には机間巡視でつぶやきをひろい上げる。(子どもの思いつきが価値あることをグループの子に示す。)
- いくつかの意見に分かれたところで、それぞれの意見について、児童の思考を明快な言葉でたどってやる。(それぞれの意見について教師は即時評価をしない。)
- いくつかの考えに整理したところでもう一度個人思考にかえす。

4. 事例 (別紙 資料)

5年 理科 単元「メダカのおえ方」

課題① ほりや池ではメダカは何を食べているのだろう。

6年 理科 単元「ほのお」

課題④ ろうそくのほのおの正体はなんだろう。

〃〃⑤ ろうそくのしんは何のためにあるのだろう。

5. まとめ

この研究主題は話し合いの中では高度なレベルである。実践できれば児童も教師も満足でき非常にすばらしいが、それまでの条件整備がむずかしいことも確かである。考えるという働きが十分に行われるためには、自ら進んで考えることが必要である。つまり個がしっかりとした考えを持っていればグループ全体、学級全体が元気になる、その結果個も高まるわけである。

第17回全国バス学習研究集会 (分科会 3)

研究主題 授業改善とバス学習

兵庫県加西市立比奈小学校

吉田 廣

1. 一斉学習

(1) 授業分析による一斉学習 (J-T 授業分析)

- 児童の発言が少なく、教師の発言が多い。

(2) 一斉学習の長所・短所

(3) 過去の研究

- 末吉謙次・片岡徳雄 (1959)

2. バス学習

(1) 授業分析によるバス学習 (J-T 授業分析)

- 児童の発言が多く、教師の発言は少ない。

(2) 実践的研究によるバス学習 (吉田・1981)

① バス学習と一斉学習に対する所感

・ バス学習支持がふえる (全体・男女別・学力別)

③ バス学習と学習意欲

・ 学習意欲を向上させる。特に下位層の伸びがよい

④ バス学習と対仲間態度

・ 対仲間態度をより好意的な方向に変容させる。

⑤ バス学習と人間関係の高まり

・ 集団かまとまりをみせる ・ 孤立児がなくなってきた

⑥ バス学習と学力

・ 学力を伸ばす

⑦ バス学習と学習参加

・ 好意を示し、積極的な反応を示す

⑧ バス学習で留意すること

1) 一般的傾向

2) 児童の所感

3. よりよい授業を求めて

(1) バス学習の充実 深化

(2) 最適化

研究主題 思 考 を 深 め る 相 互 作 用

個人思考と集団思考・人間関係の高まり

岐阜県土岐市立泉西小学校 吉村 一雅

/ 研究主題とその要旨

1 児童の実態

昨年、五個荘小学校を参観し、全職員でバズ学習のすばらしさを眼のあたりにし、4年生当時の担任の指導により、ある程度のバズ学習の経験をしている。しかし内容は、順番に自分の考えを述べるだけで、話しあいにも発展することもなく、思考も深まっているとはいえない状態である。原因として

- 1) 学習課題に対しての自分の考えがしっかり確立していない。
- 2) 自分の考えと他人の考えを比較しようとししない。
- 3) クラス替えて、お互いに自由な話しあいがまだできない。

以上の3点があると考え次のような仮説を立てて指導してきた。

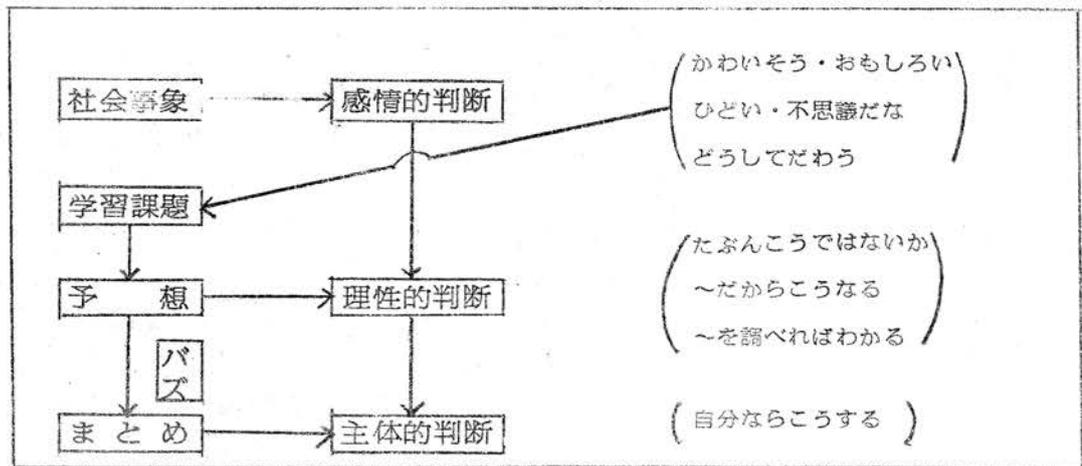
- 1) 学習課題に対する自分の立場や考えをはっきりさせるために、個の時間を確保し、必ずノートに書かせる。
- 2) 話しあいを深め、有効なものにするために、発言の約束を決める。
「〇〇さんに付け足しですが……」
「〇〇さんに反対ですが……」
「〇〇さんに質問ですが……」
「ほくは……と思います。わけは……です。」
- 3) 話しあいだけでなく、人間関係を改善するため、グループ単位の学習作業を採り入れる。
- 4) 話しあい・学習作業の能率化を図るために、リーダーの育成に努める。
- 5) 望ましい人間関係を形成しつつ、学力を向上させ、成果を自分たちの目で確認させる。
(自己採点・グループ毎の平均点)

2 社会科におけるバズ学習

社会科はともすると、数多くの知識をいかにしてより多くつめこむか、ということになりがちである。しかし、真の目的は、自分が新たな事象に直面した時、過去の社会事象で学んだ力を活用させて社会の一員としてよりよく生きていくかを求め続ける態度・習慣を、いかにして形成するかというこ

とであると考える。

こうした力を育てるために、私は社会科の一時間の授業の構造の基本を次表のように考えている。



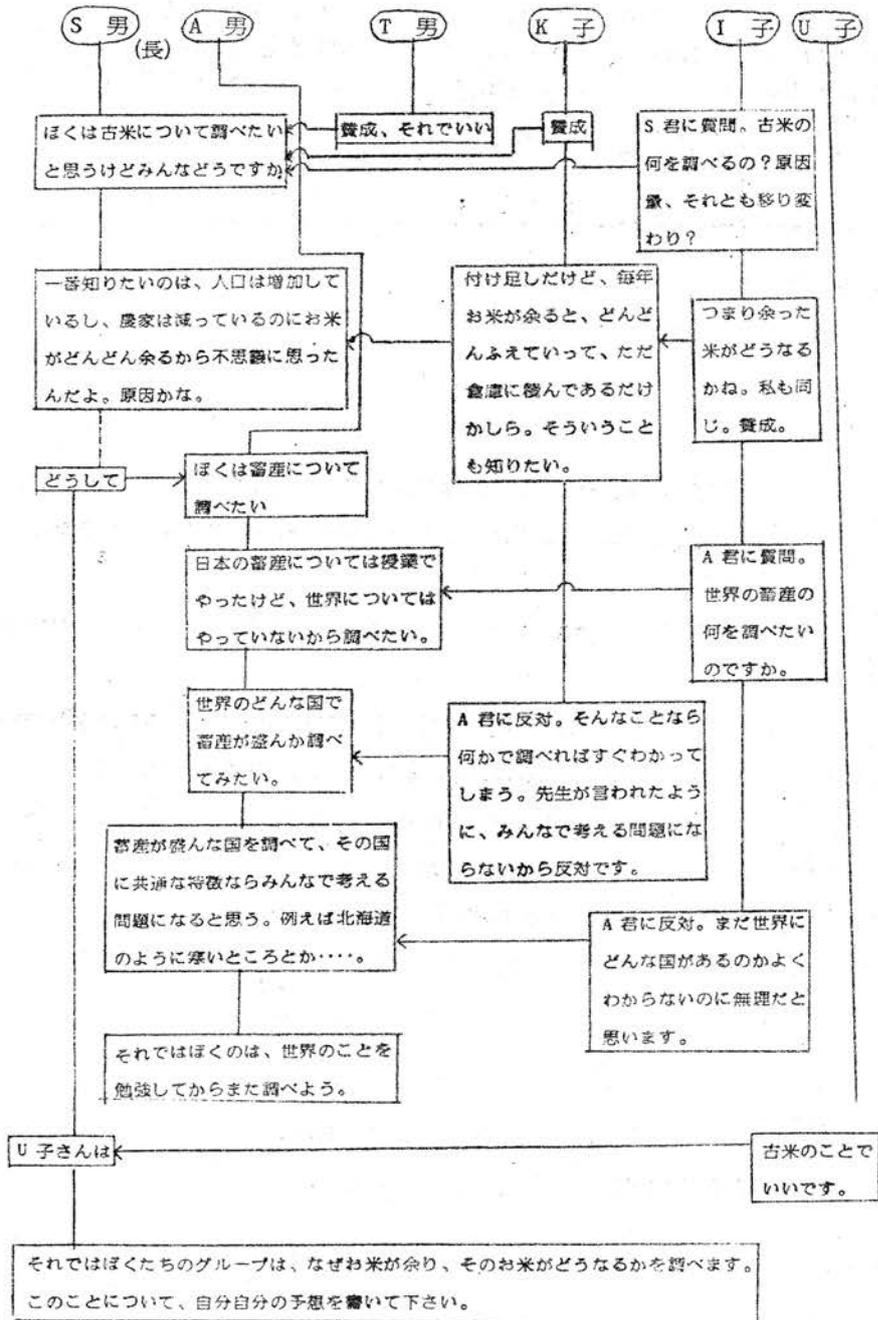
社会科の授業を上図のようにとらえた場合、学んだことを将来生きて働く知識にまで高めることは、感情的判断を理性的判断に、更にそれを主体的判断にまで高めることを意味するものである。

そのために、感情的判断から主体的判断に至る過程の中で、児童が自分の考えを確立し、異なる立場の考えも吸収しつつ、意欲的に学習に参加できる最も有効な方法が必要になってくる。

その最も有効な方法こそパズである。即ち、個人思考ではどうしても限られた狭い視野でしかないが、6人の小集団に広げて話しあいをすれば、多角的に広い視野で思考ができ、個人思考も高まるのである。これは話しあうことを通して自己実現への意欲を育てるとともに、将来、社会に対して主体的・民主的に参加していく基礎になるものである。

以下、農業学習を終えた段階での児童たちの自主学習のささやかな実践を述べることにする。

2 実際の授業より



S	A	T	K	I	U
日本人は洋食が多くなってきたので米を食べなくなっ たと思う。余った米は輸出している と思う。	米は高いけどパンの方が安いのでお米が 余ると思う。余りは輸出。	このころ米よりパンやめん類を食べる から余る。余った米はどうなるか かわからん	人口の増加以上にお米も機械でた くさん作れるから、余ってしまう。 余った米は輸出。	昔はお米しか食べるものがな かったけど、今は何でも食べられる ので、それだけ米が余ると思う。 余りはいざという時に備えて貯 えておくと思う。	お米を食べなくなったから。 わからない。

これ以後、予想を各自発表しあって、グループで統一した予想にする。

更に予想を基にして何をどう調べていくかを話しあう。

3 考察

ここに紹介した実践例は、一通り農業学習が済んだ段階で、グループ単位で、疑問に思ったことや、もっと調べたいことを自分たちで調べ、発表していくための話しあいの冒頭の部分である。6つのグループの中で、最も平均的なグループをとりあげた。

この話しあいから、ただ古米についてというばく然とした問題が、集団思考により具体的な学習課題へと発展したことがわかる。

もしこの話しあいがなく、個人で問題を作り、予想を立て、調べるとなれば、T やU は何もできなかったかも知れない。また、リーダーに依存してしまうことなく、6人中4人は対等に主体的に学習に参加している。K 子やI 子は集団学習・協同学習のよさに気付き、ルールに基づいた発言ができるので、話しあいが深まっている。ただT 男とU 子の2人が発言も少なく、主体的に参加しているとは言い難い。事実、資料を作る段階になってもこの2人は、他のメンバーが見付けたグラフ等をB 紙に写すだけであった。

こうした児童をも授業の中で生かすには、考えや思いをノートに書き、隣どうして話しあわせる方法がある。その後グループでの話しあいに参加させるよう指導していきたい。

開校2年度を迎えたばかりの新設校であり、全校がバズの協同研究をしているのでもなく、私自身もまた、バズ学習に関心を抱いてから一年にもならず、テーマに迫るには十分な実践研究ではなかったが、個人思考と集団思考は相互補完の関係にあり、両者を同時に高めるバズのあり方を今後も研究していきたい。

第17回全国バス学習研究集会 (分科会番号3)

研究主題 思考を深める相互作用

徳島市助任小学校

教諭 小倉 貴美子

バス学習とグループ編成

バス学習は人選り教育であるといわれているこれは従来の教育
があまりにも知識・技能を重視するあまり、人間形成や 態度的な
ものが軽視されていたことに対する警鐘であると考えられる
小集団の話し合い学習が学習方法の主流として頻繁に活用されて
いる理由を考えてみると

- ① いつでも どこでも.....
 - ② 平等な 立場.....
 - ③ 思考に広がりや深まり.....
 - ④ 人間関係の 深まり.....
 - ⑤ 旺盛な学習意欲.....
- } 主体性、自主性が養われる。

バス方式

ひとりひとりの子供を互いが認め合い励ましあひ 最も民主的
な方法で知的な高まりと共に態度的なねらいを達し 人間とし
て 人格を高めようとする全人教育なのである。

では話し合うことが主体で 思考の高まりや深まりが達成
されるのだろうかという疑問 に対しては 頭の中で考へもせず
直ぐに話したり書いたりする いう思いつき発言は 思考と

いうことについて全く無意味であるが、思考を整然と整えるまでには、頭の中であれこれ練りに練るという作業が必要であり、発言の段階までにはものすごい思考を伴うものである。そのためには適切な課題をいつどこでどのような形で課せればよいかという教師のかけの努力が必要となる。

思考を深めるためのパターン

段階	学習活動	学習形態
課題把握	自主活動の契機 - 学習意欲 学習に対する期待、興味、関心 探究	一斉
予想と計画	不正の発見 資料、教材に対する疑問、苦惑 矛盾、修正	個別 小集団
課題解決	弁証法的止場 話し合い、相互確認 相互誘発、相互補足 相互葛藤 問題解決 協力探究深化	小集団
課題整理と発展	思考の高まり 補足、修正、一般化、適応	一斉

互いに考えを發表し合い、妥当性、合理性を追求し、葛藤場面
にこそ「バス」を生かす肝心なところである。

話し合いの学習の機能

- ① 相互に確認し合う ---- 記憶が定着
- ② 相互に補足し合う ---- 言語表現に自信
- ③ 相互に誘発し合う ---- 発表意欲が旺盛
- ④ 相互に葛藤し合う ---- 探求心がわく
- ⑤ 相互に発露し合う ---- 一般化し適応

P-P型のバス学習では 四角ばらないのびのびしたなかで話し合いがすすみ子供達にとって楽しい学習になる。

学習集団造り

バス学習の入門期

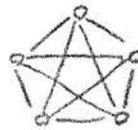


関係数
(6)

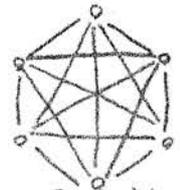
ペアバス

関係数 (1)

" (3)



関係数
(10)



関係数
(15)

相互誘発や葛藤場面が少ない

6人グループの効果

グループの人数が増すことは関係数が幾何級数的に倍加して行く。それならば 8人、10人、20人とした方がよいのではないかと考えられるがグループの人数が小まると

- ① メンバーの発言する時間や回数が増える。
- ② バス長がまとめきれない。
- ③ 全員発言の原則が守れない。
- ④ 発言内容に深みがなくなる。などの欠点が出てくる。

その点 6人組にすると発言の機会、考える時間や回数
意見のまとめなど適切であることが 永い経験の中から実証
された。現在 私たち五、六年では 6人グループをとり入
れている。

グループ編成上の配慮

特に人間関係であることはいうまでもない。

① グループ内 異質 グループ間 等質

② 男女混合

以上のことを原則としながら、ひとりひとりの性格、知能、
学習態度を考慮しながら グループのメンバーを固定
せず 1週間か10日毎に 編成替えするとか
教科により バズ長やメンバーをかえるとか 解かい
配慮をしながら ひとりのおちこぼれもないよう 全本
の雰囲気づくりを考えていかなければならない。

単に教科指導にとどまらず 教育の全領域でバズ
を活用していくことにより 相互の交流や人間関係がよ
くなり グループ編成が自然にできてくるものである。

まとめ

教育の今日的課題

最近の青少年の非行の増加と低年齢化の傾向は現場教師
にとってそれらと如何に対処し解決していくかが大きな課題
となっている。生徒指導のなかにもバズ学習の根本理念が
定着し実践されていくなれば非行化への歯止めとなることを信じる。

第17回 全国バス学習研究集会 (分科会番号 4)

清掃活動を改善するための試み

— バスと自己決定の導入による —

三重県鈴鹿市立神戸中学校

市川 雄二

1. はじめに

本校は清掃活動に問題がある。三隅二不二は、集団決定の効果に関する実験のなかで、「掃除の徹底」について、集団決定を行った集団と講義式訓示のみを行った集団と、講義式訓示と自己決定を併せて行った集団を構成して、いずれの集団が効果があがるかを調査した。その結果、集団決定の効果は集団討議のみの場合よりも、集団討議の結果、その討議場面で自己決定する過程が含まれている場合がより効果的であると述べている。

今回の試みは、この研究を参考にして、次のように計画した。

2. 予想

訓示式で行ったグループと集団討議に自己決定を含む形で行ったグループと(バス)比較すると後者が前者より効果があると予想される。

3. 方法

被験者 中学校1年生 40名、2クラス、各クラス 8班編成(各班5名)
実施期間 昭和57年7月12日～17日

統制群 (訓示式)	事前テスト 15分	教師による訓示 10分	掃除 20分 4回	事後テスト 15分
実験群 (バス+自己決定)	事前テスト 15分	バス+自己決定 30分	掃除 20分4回	事後テスト 15分

- 教師による訓示 …… 「皆、そうじを熱心に、美しくしよう。そうじ用具はせいとんしてゴミは必ずすてよう。」(一斉)
- バス+自己決定 …… 班長か司会「そうじをさぼらず美しくするにはどうすればよいか」討議後、用紙に「私はそうじをかんぱうてやります」署名して提出
- 掃除後 班長は 各そうじ区域を点検し、点検用紙へ記入する

4. 結果と考察

1 表

□

		統 制 群			実 験 群		
		事前	事後	差	事前	事後	差
1	あなたはそうじを熱心にやっていますか	1.19	1.20	0.01	1.02	1.05	0.03
2	班の人はそうじを熱心にやっていますか	1.04	1.02	-0.02	0.74	0.77	0.03
3	そうじをした所はきれいになっていますか	1.26	1.20	-0.06	1.02	1.00	-0.02

※ 各項目 はい 2点、ふつう 1点、いいえ 0点として平均をとった

1表より

- ① 傾向として、統制群より実験群はよい。(進歩の差)
- ② 従って予想は認められる傾向がある。
- ③ 進歩量が減少にあるところが問題である。
- ④ 事前の段階で両群間に大きな差があるのが問題である。

② 掃除の点検結果より (教室の掃除区域のみ) 2 表

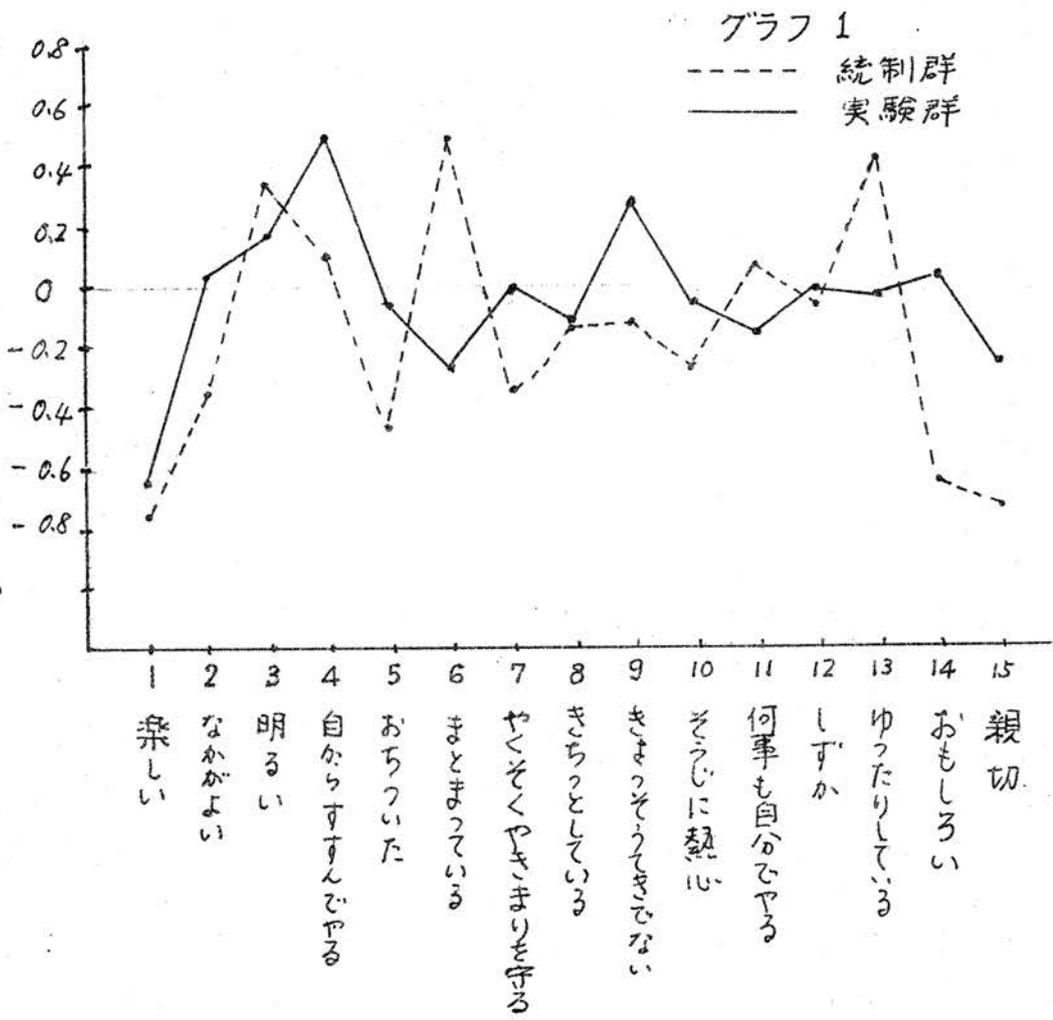
点検項目	統 制 群								実 験 群							
	A 教 室				B 教 室				C 教 室				D 教 室			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
1	さぼっていた者(人数)				110				41.20				2110			
2	美しくなっているか				101				1112				1111			
3	道具が整理してあるか				220				2111				2122			
4	ゴミはすててあるか				220				2222				2222			

※ 2~4項の数字は はい 2点、ふつう 1点、いいえ 0点として平均したもの
統制群 A 班は 2回、B 班は 3回分しか点検用紙が回収されなかった。

2表より

- ① 統制群で4回全部の資料が得られなかったので比較は難点がある。
- ② さぼっていた者の人数は、実験群は 6人から 2人、統制群では 3人から 2人 (1回から 2回) に減少している。
- ③ 2, 3, 4 項目については著しい差が認められない。(両群間における)

③ 学級の印象テストの結果より。



※ 各項目 7段階 7点満点とし 平均値を求め進歩率を求めて両群の数値をグラフ化したものである。

グラフ1より

- ① 実験群でよい傾向が認められる項目は、自からすすんでやる、きょうそうしてない、明るい、なかがよい、おもしろい、である。
統制群でよい傾向が認められる項目は、明るい、自からすすんでやる、まとまっている、ゆったりしている、があげられる。
- ② そうじに熱心の項ではマイナスの傾向を示しているが統制群より実験群の落ちこみは少ない

- ③ 全体的に両群とも減少しているところが問題である。
- ④ 全体的に統制群より実験群が好ましい傾向を示している。

5. 問題点および今後の課題

- ① 短期間の調査であったため、結果に著しい差が認められなかった。今後も引き続き行ないたい。
- ② 事前調査の段階で両群間において平均値に大きな差があった。両群間の実験条件をできる限り均一化する必要がある。

第17回 全国バス学習研究集会(分科会番号4)

研究主題 非行と生みださない指導

姫路市立安室中学校

松田 福義

○要旨

本校は、開校3年目のいよいよ勝負の年を迎えに新設校である。開校初年度から3年目にかけて学校は荒れに荒れた。隣接の高丘中のマンモス化にともない分離新設後、地域の人々の過剰な期待を受けてスタートしたが荒れている学校に対し、「どうなっているのか」「学校はなにをしているのか」「先生はやる気があるのか」というような批判的な声が続出した。生徒達の学習態度は、主体性がなく意欲にも欠け、授業中のちやう笑や攻撃が平然と行なわれ1時間の授業を終えた教師はもうくたくたの毎日が続いた。非行生徒との対応に苦悩する教師集団は当時自薦中学校長であられた永井辰夫先生の助言と指導を受け、「生徒指導の根本は「授業の改造」にある。非行生徒を生まない生徒指導をめぐし「よりよい人間関係を育てつつ、意欲的に学習にとりくませる」ためのバス学習の研究と実践」に力を入れた。ともすれば人間関係が希薄であった教師集団も共通の目標にむかってようやく一体化し、校内研修や生徒指導へのとりくみにも協同歩調の姿勢が定着した。「バス学習の手引き」を作成してバス学習の基本的理解と訓練を徹底し、変則50分授業(45分)により毎日朝バスと7校時バスを特設して学級の人間関係、学級のモラルづくりにとりくんだ。さらに教科バス研究を押しすすめる課題追求学習を確立し、共に学び共に高めよう学習集団づくりに専念した。だが悲しいかなバス研究の一年生である我々教師集団の力は知れたものであった。山積する生徒指導問題に追われ研究は遅々として進まなかった。でも兆候はあらわれた。教師集団の精熱と使命感が高まるとともに生徒達や保護者がバス学習への理解や関心を示し喜びをもって参加する学習習慣がめばえてきて学校が変わってきた。バス学習理論を十分に理解し得ないまゝ、とりくんだバス学習による教育実践1年目であったが

我々教師集団はなん度も壁にぶつかりながらも、目に見えて非行件数の減少していく実態と日を追うごとに積極的にいきいきと学校生活を送る明るく生徒達の表情に自信を得てバズ実践す早目の今年に勝負をかけ、バズ学習による喜びと充実感の味わえる授業の創造を、はかることを教育信条にすえ、バズ学習の確立をめざしながら「仲間と共に考え話し合うことにより学ぶ態度、学ぶ意欲を育て、ともに支え合いながら伸ばす学習習慣をつくらせる」として基本的なねらいとして非行を生みださない土壌づくりにとりくんだ。

○研究内容

＜本年度校内研究テーマ＞

1. バズ学習の研究と学力の充実をはかるための指導技術の向上をめざす。
2. 生徒理解を深め、学級経営の充実をめざすとともに温かさに支えられた中にも厳しさを持つ集団の育成をはかるための集団活動のあり方を追求する

研究主題にせまるためには、まず教師集団が校内研修体制を確立し実践に結びついたり、ゆまぬ研修を組織的に継続的に一丸となって行なっていくことこそ基本なりとし、バズ学習による指導技術の研究と集団育成のための集団活動のあり方を追求していくことの重点に、重点をいぼり課題設定として研究を深めるようにした。

1. 学級集団の育成



温かい愛情と信頼に満ちた人間関係が、つよつよに学級で、一人ひとりの子ども達が自分の持つ個性や能力を発揮でき、さらに他人の生き方に共感して自分自身のあり方を学び、互いに認め合い協力しながら、「なかま」のために献身することによって生きている満足感や連帯感も生まれる。そのことがいさいさとした活動を促し、さらに意欲をかきたてるものである。学級内での人間

関係が円滑に築きあげられてこそ本当に喜びと充実感の味わえる人間性豊かな
 学級づくりが成り立つのでありこれが楽しい学校づくりの核であるとの視点
 に立ち、本年度はとくに「集団のなかにおける個の確立」"集団行動における
 自分のあり方に焦点をすえ実践とすすめた。

(1) 朝バス・終バスの確立 ----- 小集団の班編成による点検活動

・朝バス

- 8:15+ 予鈴・登校・着席 (学級担任は教室に)
- 8:17+ 黙想(音楽) ----- 班や学級の高まりのための今日一日と自分はどうありたいかを考え誓いを立てる (個人)
- 8:20+ 朝バス開始(土足の確認)
- (学習バス)
 - ・家庭学習の確認
 - ・学習課題進捗 今日の教科学習のポイントの確認
- (生活バス)
 - ・日目標の決定と確認
 - ・忘れ物調べ
 - ・風紀検査
 - ・各休からの連絡
- 8:35+ 先生からの連絡
 - ・個人生活ノートの提出
- 8:40+ 第1校時開始

・終バス (第6校時)

- 2:05+ 第5校時終了、清掃準備、移動
- 2:10+ 清掃開始 ----- 全員清掃、清掃バス
- 2:25+ 清掃終了、移動音楽
- 2:30+ 終バス開始
 - ・黙想 ----- 音楽を用きながら心を静めて一日の反省(個人)
 - ・黙書 ----- あらかじめ背面黒板に書いてある連絡や明日の予定黙想時に反省したことを個人ノートに記入
- 2:37+ (学習バス)
 - ・バス教科決定 ----- ノート教科と今日の学習教科の中から選ぶ
 - ・個人進捗 ----- 学習内容のポイントを整理しながら理解のあまいなところを抽出する
 - ・相互進捗 ----- バスリーグの司会で班単位で質疑応答をする
 - ・全体討議 ----- 班内で解決できなかったことを学級全体で検討する
 - ・家庭学習のプランニング ----- 課題確認と訂正
- 3:00+ (生活バス)
 - ・一日の生活反省
 - ・班ノートの記入
 - ・班ノート発表・反省(日目標・清掃・日勤務など)などの話し合ったこと ----- 学級全体への提案、討議
 - ・各休からの連絡
 - ・日番の反省
 - ・明日の朝バスの課題

先生からの連絡と指導
3:20 短学活
3:30 校歌・帰りの挨拶・下校

(2) 集団行動様式の訓練強化

・体育の授業時や宿泊訓練の中で集団行動様式の基本的訓練を徹底して行ないそれを日常生活のあらゆる授業や集会の場に生かしている。集団の一員としての自覚を養うとともに規律ある行動ができるようにする。

・集団行動訓練コンクールの実施

(3) 話し合い原則の指導と訓練 ---- 朝バス、終バス、教科バスにおける訓練の徹底

(4) 終バスの相互参観 ---- 学年内や他学年を参観してクラス間の交流と促す

2. 自主活動の推進

すべての生徒活動の場を自主活動を促すということから常に課題と設定させそれを追求していくという課題追求の姿勢を一貫させている。全校生徒集会、学年集会、生徒代議員会、学校委員長会、班長会、町別集会、球技大会、合唱コンクール、学級新聞づくり、手づくり実力テストなどすべてに全生徒が一人一役で参加し、全員活動、全員役割、全員発表の楽しい学習の場づくりをめざしている。

○ 問題点と今後の課題

- (1) すでに集団からハミ出してしまう非行生徒を集団の中にとけこませていく難しさ。
- (2) なれ合いバスの防止 → 厳しいバスの追求
- (3) 教科バス推進の徹底 → 全校ぐるみのとり組みと授業研究、朝バス、終バスの連携。
- (4) バス学習の評価をどのようにするか → 学習効果の良しかの良しのために →
- (5) 地域や保護者への啓蒙

第4分科会

より望ましい学級集団(班)づくりをめざして

愛知県春日井市立藤山台中学校 林 泰男

1、はじめに

本校では、「よい個人はよい集団によってのみつぐられ、よい集団はよい個人によってのみつぐられる。」という考えを基本に個人を、班を、学級を指導し、成長を促してきた。

しかし、班を基盤とした活動にも問題がないわけではない。授業中ムダ話が多かったり、他人に依存し過ぎたり、利己的な行動に走ったり等々、いろいろな悩みを抱えている。

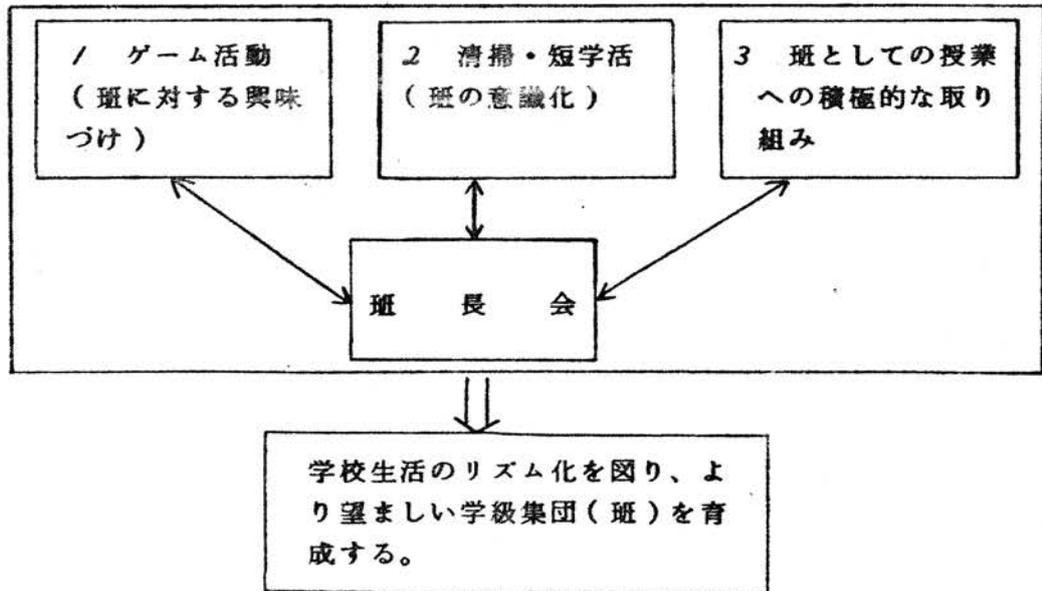
そこで、本年は、本校の現職教育のテーマの下に、「より望ましい学級集団(班)づくりをめざして」実践を試みてきた。

2、方法

班員一人一人をよく理解させ、班意識を高めるために、下記に図示したような方法を試みてきた。

- ① ゲーム活動を通して班に対する興味づけを行う。
- ② 清掃活動、短学活での活動を通して、班の意識化を行う。
- ③ 班を意識化させ、班として授業へ積極的に取り組ませる。

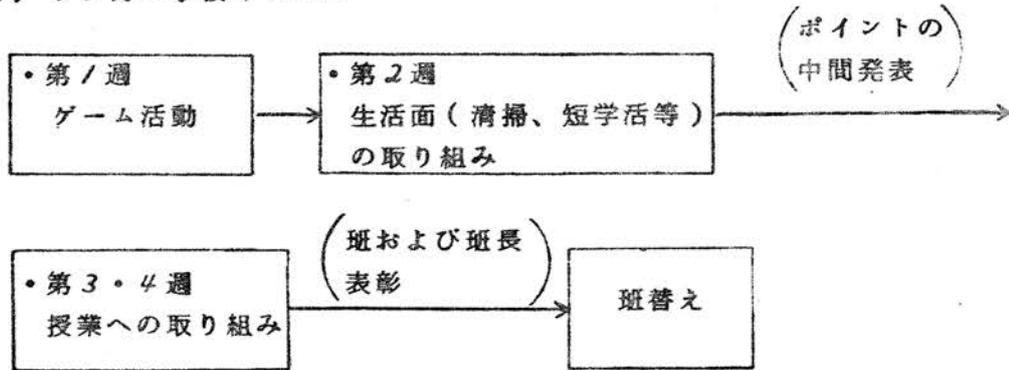
以上、3点を基盤として、班長会と関連づけ学校生活のリズム化を図りより望ましいクラスづくりをめざした。



3、実践

班を高め、お互いに助け合い、協力していこうという姿勢を作り上げるために、1 2 3 のすべてに点検活動を取り入れ、次のような指導を行ってきた。

(1) /ヶ月の学級のリズム



(2) /日の学級のリズム

/ヶ月のリズムを基盤として、朝の短学活での班目標づくり、帰りの短学活での/日の反省、復習バスの充実等々により、/日のリズム化を図った。

① 内容

ア ゲーム活動

内容は、学級の係などと話し合い決める。活動期間は、課題発表日から2～3日を期間とし、班ごとに放課に活動した。(例)にがお絵コンテスト、かけことばコンテスト

イ 清掃、

・清掃活動 ◊反省 ◊短学活での報告という形を基本とし、活動させた。

ウ、短学活

・(朝) 健康観察 ◊班目標 ◊学習用具、家庭学習の確認 ◊今日の連絡、(帰り) /日の反省 ◊係の連絡 ◊計画ノート記入 ◊復習バス(今日の学習の確認)の形を基本とし行った。/日の反省は、自、他班の活動の反省をさせ、翌日の班目標設定につなげる。復習バスは、学習の基本ルールや今日の学習の復習を徹底させ、家庭学習への動機づけとする。

エ、授業

・バスの充実、ハンドサイン、反応器の活用等々の課題を設定し、活発に取り組ませた。

オ、班長会

⑦、課題を十分理解させる。⑧、班の長短を話し合い、改善の糸口を見つけさせる。⑨、班長の考え方の統一を図る。以上の目的で週/回 1 回放課取り組ませた。

4、まとめ

より望ましい学級集団をつくるためには、一人一人の生徒に班を、学級を意識化させることは大切なことである。点検活動を取り入れ、班を意識化させ、学級の/日の生活のリズム化を図ってきた。その結果、利己的な行動やムダ話なども少なくなり、お互いに助け合い、協力して班を高めようという姿勢がみられるようになってきた。

第17回全国バス学習研究会（4分科会）

研究主題

地域の教育課題をふまえた教育内容の創造をめざして
一授業改善を軸に集団の質的向上と自主性の育成一

広島県豊田郡豊町立 豊中学校

村上 範明

横長 真知子

研究内容

1. 地域の実態

2. 生徒指導

3. 生徒会活動

4. クラブ活動

5. 単元際通し学習

6. 学級集団づくり

第17回全国バス学習研究集会

研究主題 非行を生みださない指導

—リーダー—の自覚—

岐阜県土岐市立泉中学校 山田利彦

●要旨

昭和30年代の中頃、日本経済は高度成長期に入り、高校進学熱も高まった。こうした環境の中で、当時本校の生徒にも協調性やうらおいのある心情がうすれ、労作を嫌い、人や物に対する愛情が希薄となる傾向があらわれた。その中で生徒に不良化の傾向もみられるようになった。

そこで、希望を失いかちになる生徒たちに、まず人として価値を認めあゆせ助けあい、励ましあうことを考えさせ、よりよい人間関係を育てねばならぬと、昭和37年「バス学習」を導入した。以来20年、新しい工夫をつけ加えながら、一貫して考え方を变えることなく今日におよんでいる。

本校では、ゆとりの時間に「特設バス」を位置づけバスによって仲間づくりをめざし、学習に対する構え、教師や仲間に対する人間関係、協力や自主性、積極性などの社会的態度をつけることを願ってきた。特に最近では教科内バスも充実させることを考えている。その中で「態度的目標」をあきらかにしていくことを考えている。

●研究内容

1. 態度的目標をと入れた教科内バスの充実

従来の指導案に、バスにおける態度的目標も明記する。この態度的目標とは、やる気、意欲、学習のかまえ、仲間づくり、人間関係をあらわすもので、その教科、その教材でねらえるものを考えるわけである。

授業開始時に、右表のようなプリントを配り、

バスのとき注意すること				
バスのとき		朗読		活動
話す	聞く、	読む	読む	
仲間の前で、一回以上話すことができたか。	仲間の読み取りや朗読を、最後まで聞くことができたか。	仲間の読み取りや朗読を、ひやかさずに聞くことができたか。	仲間の前で、相手に聞こえるように読むことができたか。	態度目標
自分の思いや感じたことを、すなおに出すことができたか。	仲間の読み取りや朗読を、最後まで聞くことができたか。	仲間の読み取りや朗読を、ひやかさずに聞くことができたか。	仲間の前で、恥ずかしがらずに、感情を込めて読めたか。	
				評価

「本等」教科内バス 態度目標 (○×△で評価しよう。)

それを意識してやることにより、学習効果も高め、仲間づくりをすすめていこうとするものである。

研究授業において、各グループに教師がつき、記録観察したあと、バズがうまく成立していないグループを抽出し検討をした。その結果、学習リーダーの側に次のような問題があった。

- 課題をし、かりとらえていない
- 人に言わせるだけで、自分は言っていない。
- 自分が言うだけで、他を指名しない。

今後は態度的目標の中に、次のような学習リーダーに対する項目を入れる必要がわかった。

- (1) バズの課題を正しくとらえ、他の者に言うことができたか。
- (2) バズの最初に、自分からすすんで、自分の考えや思いを出してかき始めることができたか。
- (3) 全員の子を指名して発言させることができたか。

以上、今後は教科、教材、課題にあわせた態度的目標を明らかにしていくことが研究の課題である。

2. リーダー挙手法による学習リーダーの自覚と意欲づけ

前述の学習リーダーの自覚不足をさげなうため、次の方法をとった。

バズで話し合い、練習をしたあとの発表の挙手を、学習リーダーが代表してやる。教師は、班を指名する。そのため学習リーダーに班の番号を書いたカードをわたしておく。指名された班のリーダーは、自分の班員のうちだれかを指名して発表させる。や、ていて次のような効果が確認できた。

- (1) 弱いリーダーに自信がついた。
- (2) できない子への教え合いが活発になった。
- (3) リーダーの目が一人一人にむいていた。
- (4) ごまかす生徒がなくなつた。

第7回全国バス学習研究集会 (分科会番号4)

非行を生み出さない指導をどうするか

- ・学級集団の育成
- ・わかる授業の研究

姫路市立城乾中学校

名賀 一三

要旨

1年生の時には、あんなに生き生きと学習にクラブ活動に取り組んでいたのに、2年、3年と学年が進むにつれて、冷たく、輝きを失った目を持つ生徒が多くなる。本校においても表面上は大きく問題にはならないが、非行の芽が育ちつつある。そこで全職員が一体となって問題生徒に深く関わり、基本的な生活習慣や基礎学力の定着に努めている。ここでは、2年3組において、「失敗しても恥ずかしくない」「欠席すればだれかが様子を見に行行ってやる」そして「学習成績だけでなくお互いの努力している点を認め合える学級集団をつくりたい」と努力したところを発表し、人間関係を基盤とした個人と集団を高める指導についてさらに学びたいと考えている。

研究内容

1 全員でつくる学級

1, 同等の場を

- ・1週毎の班の移動

- ・清掃場所ローテーション・・・すぐには分からぬ清掃分担表

今週は ○色	教室	○	!	u	@	△	※	◎	×
	教室ローカ	×	○	!	u	@	△	※	◎
	理科 1	◎	×	○	!	u	@	△	※
	理科 2	△	※	◎	×	○	!	u	@
	理1-2ローカ	@	△	※	◎	×	○	!	u
		u	@	△	※	◎	×	○	!
	1班	2班	3班	4班	5班	6班	7班	8班	

2, 仕事の分担

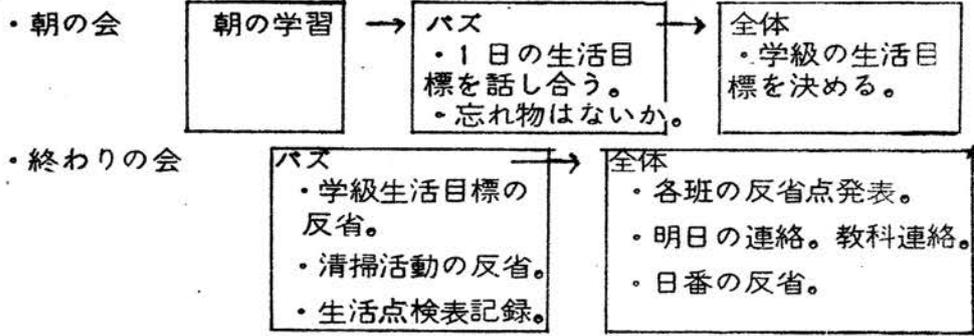
- ・日番の仕事の強化・2人で日番を行ない、朝と終わりの会の運営と記録、

環境整備、連絡事項の徹底等に責任を持つ。

- ・代議員、風紀、美化、交通安全、文化、保健体育、図書、厚生委員の生徒

直結の係、及び、各教科の責任者となる。

3, 学校生活の充実をはかる朝と終わりの会での話し合い



2 個人を高める集団づくりをめざして

1, テストに対する強度の不安をやわらげる。

- ・テスト前 復習のためのバスを持つ。
 - ・班の学習リーダーを中心に理解の遅い生徒を対象に行なう。
- ・テスト後 テスト直しのバスを持つ。
 - ・点数の良い、悪いよりも、努力の成果を問題とする。
 - 点を隠さない。
 - ・分からない所はどこかを明確にする。

2, 教育相談を通して、自分の良い点や将来について考える。

3, 学習相談 (小集団での学習) の時間を設定、学ぶ苦しさを学ぶ楽しさに変える。

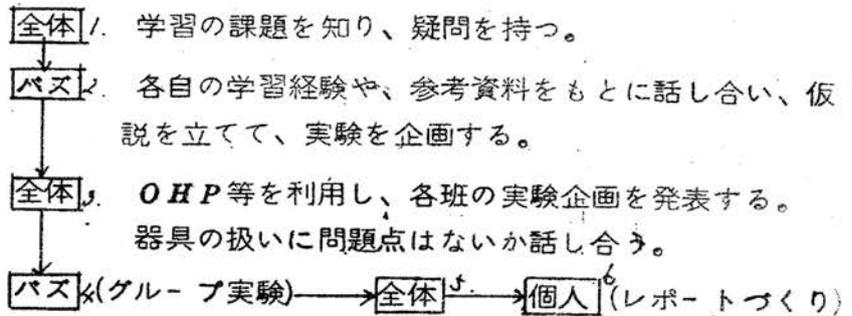
4, 小さな誤ちも学級全体の問題として話し合い、全員が考える。

5, ポスターづくり、班新聞づくり、清掃活動、キャンプなどを通して、グループで協力することの難しさ、楽しさと、ものをつくり出す喜びを経験する。

3 教科における、体を動かし、失敗し考え、工夫し、見つける学習。

◎理科の場合

・学習の流れ



第17回全国バス学習研究集会 (第5分科会)

効果的な指導ストラテジーの開発に関するアクション・リサーチ
— 高校体育科の柔道授業を題材として —

三重県立朝明高校
伊藤三洋

高校体育科の柔道授業における小集団の活用を中心に教授＝学習過程の組織化、すなわち指導ストラテジーの開発を中心的な問題とする。個人による取組み、小集団での取組みといった様々な形態を指導内容に応じて組み合わせ、より学習効果のある組み合わせを見出そうとするものである。

本報告は2つの授業実験からなる。実験Iはバス学習法の有効性の吟味である。実験IIは指導ストラテジーの様々なパターンについて検討する。

「授業実験」ということで、とくに次の2点を配慮した。①仮説の段階で条件間に有意な差が予想されるような実験群と統制群を準備しない。②どの条件群も学習効果があるように、これまでに明らかになっている授業の条件をできる限り導入する。したがって、①について、実験Iの場合、学習集団における構成員の内実を重視する立場と教材編成や教授活動を重視する立場の良いところを吟味しようとする。また実験IIでも、実験Iを基礎に各々のパターンが設定される。②教師と生徒の資質は別として、環境条件をはじめ集団構成に関する条件、課題条件、等は十分に吟味される。とくに毎授業の始まりには、本時授業の目標（技能、態度）の明確な提示には十分な時間をとり、教師の示範と解説によって徹底させる。

柔道授業の目標は、技能と態度の同時達成である。技能とは、いわゆる「形」(フォーム)の習得とそれが実践的なものとして定着することであり、態度とは、教材や学習仲間およびそれらとの相互作用に対して満足できることである。提示された授業目標を表1に示す。

表1 授業目標

1) 寝技の技能を試合を通して実践的なものとして定着させる。	「袈裟固」 相手の右腕を自分の左腕にかかえこんだ
2) チームによる学習活動と団体戦を通して、協力して互いの技能を伸ばす態度を養う。	か。 2) 自分の右腕は相手の頭部または胴体を制
3) 自己の技能を正しく知って練習を工夫する態度を身につける。	しているか。 3) 脚部の開き方として、足首、膝、股間ともに90°であるか。 4) 自分の胴体の位置は、相手の動きに応じて適切な動作をおこせる所にあるか。

評価は、授業目標に対応して、技能は技の提示ポイントについて教師の観察により、態度は13の項目について生徒に質問紙調査を実施する。

実 験 I

高校1年生の寝技（6時間）

・実験群（バズ学習条件）の指導ストラテジー

①準備運動の後、明確に学習目標を提示し、は握させる（言語伝達、掲示、予め配るグループノートを用いる）。目標は技能習得面に限らず、同時に達成されるべき態度的諸目標も示される。その後、教師が示範。

②学習へのとり組みは固定した4人集団による。2人が練習する間、他の2人が観察者となり講評する（即時的相互評価）。教師による技能面の助言は最少限にとどめ、生徒の主動的活動に任せる。教師は主に学習活動の進行をつかさどる。

③まとめのステップでは、グループノートに観察者側からの評価を行ない（形成的相互評価）、さらにその評価結果を材料の一つとして、各自の授業へのとり組みについての感想・反省を記す（自己評価）。

各評価活動における評価項目は予め教師が設定する。

・統制群の指導ストラテジー

①準備運動につづき、教師の示範、解説を生徒は一斉形態で観察し学習。

②続いて教師の指定した相手と練習。教師は適宜巡視し、個別に注意・助言を与える。80%程度が一応の水準に達した所で次のステップに進む。

③まとめでは、教師が全体の場で特定の生徒を指名し、実演させ講評する。教師が再度示範。

結果を表2に示す。

表2 技能,満足度の条件別平均値 ()内SD

条 件		実 験 群			統 制 群	
講 座 名		A	B	C	D	E
N		39	29	25	27	28
技 能	け さ 固	2.90 (0.81)	3.24 (1.01)	3.36 (0.97)	2.81 (1.22)	2.96 (1.15)
	横 四 方 固	2.87 (0.69)	3.59 (0.67)	2.80 (1.10)	3.00 (0.82)	3.20 (0.80)
	上 四 方 固	2.87 (0.91)	3.45 (0.97)	3.00 (1.13)	2.67 (1.02)	2.84 (0.78)
	勝ちポイント数	1.51 (1.11)	1.83 (1.62)	1.20 (1.33)	1.81 (1.22)	1.64 (1.55)
満 足 度	課 題 (柔道)	6.23 (1.94)	7.45 (1.65)	6.40 (2.10)	6.22 (1.13)	5.36 (1.65)
	学級内相互作用	7.18 (1.13)	7.10 (1.06)	6.64 (1.32)	6.52 (1.13)	6.72 (1.25)
	学 級 仲 間	7.46 (1.53)	7.14 (1.31)	7.16 (1.08)	6.04 (1.29)	6.72 (1.34)
	4人Gr相互作用	7.85 (1.37)	7.72 (1.34)	6.92 (1.29)	—	—
	4人Gr 仲 間	7.36 (1.76)	8.21 (1.16)	6.72 (1.66)	—	—
	仲間からの教示有	3.49 (0.71)	3.90 (0.71)	3.48 (0.81)	3.11 (0.87)	3.08 (0.80)
	仲間への教示有	3.26 (0.87)	3.55 (0.77)	3.32 (0.68)	3.11 (0.83)	3.04 (0.60)
	目標の自主設定有	3.54 (0.75)	3.66 (0.76)	3.24 (0.95)	3.19 (0.82)	3.32 (0.73)

実 験 II

高校3年生の連絡変化技 (6時間)

設定した指導ストラテジーの4条件 (表3) とその結果 (表4) を示す。

表3 設定した指導ストラテジーの条件

条 件		I	II	III	IV
導 入	5分	始まりのあいさつ、および準備運動			
	10分	本時授業目標（技能,態度）の明確な提示、 ならびに示範,解説			
展 開 1	5分	単独動作での打ち込み練習			
	5分	4人Gr内打ち込み練習	対人相互打ち込み練習		
展 開 2	15分	4人Gr内乱取練習	輪転形式の 乱取練習		
	(5分)	3分×4本 単独打ち込み	3分×6本	3分×6本	
整 理	5分	一斉指導法による整理、および整理運動			

表4 技能,満足度の条件別平均値 ()内SD

条 件		I	II	III	IV
N		36	36	38	39
技 能	フォームの得点	4.08 (0.68)	3.64 (0.79)	3.46 (0.78)	3.33 (1.09)
	勝ちポイント数	1.72 (1.46)	2.19 (1.34)	0.54 (0.32)	1.49 (1.45)
満 足 度	課 題 (柔道)	6.06 (1.70)	5.64 (1.60)	5.61 (1.68)	5.23 (1.82)
	学級内相互作用	7.36 (1.06)	6.83 (1.07)	7.00 (1.04)	6.46 (0.92)
	学 級 仲 間	8.00 (1.31)	6.28 (1.35)	6.82 (1.07)	6.74 (1.63)
	4人Gr相互作用	7.72 (1.22)	7.50 (1.07)	5.75 (1.21)	—
	4人Gr 仲 間	8.31 (1.41)	7.92 (1.06)	5.79 (1.21)	—
仲間からの教示有り		3.58 (0.86)	3.44 (0.83)	3.32 (0.80)	3.36 (0.97)
仲間への教示有り		3.42 (0.79)	3.58 (0.83)	3.36 (0.72)	3.21 (1.11)
目標の自主設定有り		3.69 (0.70)	3.33 (0.94)	3.46 (0.73)	3.08 (0.92)

学力と人間関係の同時達成

—— 班活動を通じた学習集団の育成 ——

愛知県春日井市立東部中学校

伊 藤 文 雄

1. はじめに

昨今の小・中学校の事態は、学習集団の指導による授業づくりへの期待を失なわせるような深刻な問題をかかえている。一定時間ものごとに集中する力が形成されていないため、授業において教師が少しでも気をゆるめると、教材とは無縁の私語がひろがり、中には立ち歩く子どもや、時には、授業からぬけ出す子どもがでてくる。教師は、毎時間子どもを叱りながら、かろうじて教材の学習に引きいれていかななくてはならない。

こうした現実を克服していくためには、授業の基盤である生徒指導、とりわけ学級集団づくりを積極的におしすすめることが大切である。集団としての自治的能力と規律を身につけさせることは、授業成立の基盤であり、ひとりひとりの学習意欲を高める大切な条件である。しかし、生徒指導、学級集団づくりがまず優先し、学習集団の指導はその後の問題だとする段階論には問題がある。

そこで、子どもの内面にひそむ知的な欲望を見ぬき、それにこたえる授業の組織化を通して、教科指導本来の人格形成力、すなわち子どもの認識力や技能を発達させ、自らの進路を選びとる主体に育てる教育力を回復したい。

2. 研究の方針

生徒指導上の諸問題の解決については、ひとりひとりの問題行動を追うのではなく、学習という目的に向って、まずは、自分の思考を表現し合う集団をつくり出しながら、問答や話し合いのスタイルの一つ一つを教えていって、学習することが自己を開放していくことになるという体験をつみあげることが重要な突破口となると考える。そして、教科指導がいかに生活指導的関心と結びついているか

また、両者を授業の中でどう統一させていくのかという問題こそが学習集団の指導だと把握する。

以上の方針にたって、学年現職教育委員を中心に原案を作成し、学年部会の共通理解のもとに、共同研究をすすめた。

授業成立の基盤である学級集団づくりと教科指導を当面下記のようにおさえて研究にとりくむことにした。

- 第1学年 —— 自治的集団としての学級の性格と学習集団とはどういう関係づけになるか、ということから 若干、学級集団づくりにウエイトをおいた研究とする。
- 第2学年 —— 学級を自治的集団と学習集団の統一した生活集団として組織する。(教科、教科外の教育的機能を統一的に実現する) 第一段階。
- 第3学年 —— 上記の第二段階。(第2学年を発展させたものとして)

3. 研究の方法

- (1) 月1回の学年現職教育において、実践計画にもとづく目標を決め、反省を加える。
- (2) 学級、教科指導における実践記録を累積する。(生活ノート、班日記等)
- (3) 学級会、短学活の指導実践を記録し、累積する。
- (4) 全教師による各教科ごとの授業研究を実施し、そのつど研究協議会を持ち現職教育全体会に報告し、検討協議する。(月計画による)
- (5) 参考図書による学習会を行なう。
- (6) 教科外領域での自治的諸活動、個人的交わりに伴う学習について研究するため、全職員を4つのグループに分け、学年ごとに、4つのテーマをそれぞれ発達段階にそって研究する。
(学級の自治的諸活動、短学活、事例研究・生徒理解、その他)

4. 研究計画

- 第1学年研究計画について
まだ集団の自治の力に依拠しながら、学習のための訓練を行っていく段階であり、「学習」と「班」という本来異なる概念を結びつけて表わさざるを得ない側面を持っている。
生徒の実態を考慮し、つぎのような計画を立てた。

段階	月	教科外領域	教科領域
1	4	仲間意識を高める <i>「仲良くしてやる」</i>	○ 授業の約束づくり
	5	班編成を考える 基本的学習ルールの育成	○ 生活班の導入 ○ リーダーづくり ア. 課題の確認 イ. 発言のうばい合い ウ. 質問や「わからない」のためのストップ
	6	班日記の指導	発言 ○ 班への評価 ○ 司会のしごと
	7	バズ学習の育成 (生活バズを主とした学習の基本)	ア. 学習の「やる気」の評価 イ. 班内の援助、協力体制づくり ウ. 班ノートの活用
2	9	班編成を考える (効果的な話し合い方)	○ 班員全員の学習活動への参加 ア. 発表者をきめる イ. 班学習
	10	話し合いを高める (その1.パターン化)	○ 班での話し合いの導入 ア. 班長による課題確認
	11	話し合いを高める (その2.)	イ. 時間設定 (時間要求) ウ. 班からの発言要求を活発にする エ. 発言していない者、発言の少ない者への援助のとりくみ
	12	話し合いを高める (その3.)	
3	1	班編成の見直し (他班への要求、批判、評価)	○ 規律をめぐる班と班との競い合い ア. 学習進行にかかわる相互評価 ○ 班長のしごと(教科内容にかかわるしごと
	2	バズ学習の定着と問題点	を含んでいる) ア. 司会のしごとの確立 イ. 問題点の明確化 ウ. 教科の力をもった班員への働きかけ
	3	研究のまとめと問題点	エ. 学習リーダーの発見と指導

(注) 教科領域については、月をまたがって行うものとする。

5. 実践 (1学期におけるもの)

(1) 教科外領域

ア. 仲間意識を高める。

- 一列にも、班にもなれるようにする。(時間や教科によって臨機応変に体験を積ませる。
- チャイムの合図で席につく。
- 学級指導において、「個人及び集団の一員としての在り方」の指導をする。

10 4月 20日

6-8人

- イ. 班編成を考える。
 - 班編成の実際、^{6-7人、3人4人、5人(位)等々} 学級ごとに種々の方法でとりくみ、それぞれの長所短所を体験させる。
 - 一斉学習(一列)とバス学習(班)との学習面における効果の検討。
- ウ. 基本的学習ルールの育成。
 - 「チャイムと同時に活動開始」
(1学期当初の学年目標とする)
 - 授業中の姿勢、答え方の指導をする。
(「ハイ」と返事、語尾まではっきり言う、など)
- エ. 班日記、生活ノートの指導。
 - 班日記、生活ノートを書く意味の指導をする。
 - 班日記、生活ノートで何をどのように指導すればよいか、助言の与え方、取り扱い方などについて職員間の共通理解をはかる。
- オ. バス学習の育成。
 - 職員間でバス学習にとりくむ意義を確認する。
 - バス学習の原理は何か、バス学習の3つの目標の認識(学習への積極的参加、理解の拡大と促進、態度の変化)をし、原点に立ちかえり、バス学習の見直しをはかる。
- カ. 全職員による主体的研究。
 - 学年の職員を4つのテーマ(学級の係活動、短学活、生徒理解、その他)に分けて研究する。

(2) 教科領域

- ア. 月1回の授業研究をもつ。
(第1学期、「学習規律と教師の発問」 参観者をポイントにそって分担し、協議する。)
- イ. 授業の約束づくり。
 - 全員が教師に顔を向けたとき、教師は説明をする。
 - 「わかる」、「わからない」という要求の出し方。
 - 「もう一度言って下さい」、「ゆっくり言って下さい」等の要求の出し方、 ● その他
- ウ. 班長指導。
 - 班内互選の班長に対して、授業における組織的活動(班への評価、司会のごと、班の協力、援助等)を教えていく。
- エ. 発問の研究。
 - 複数の問いを含まない。 ● 子どもの反応に即して問いを修正。
 - 対立点の明確化。

20日 4月 20日
あけの夜に
4/20

102
→ 4/20 入校
3人4人(5)11月等々
etc.

第17回 全国バス学習研究集会 (第4分科会)

非行を生みださない指導

兵庫県揖保郡太子町立入子西中学校

福本 反三

1. 要旨

最近、中学生の非行の問題が新聞紙上で数多くとりあげられ、学校教育の危機的状況が報道されている。非行問題がふきあれている学校では、そのために教師は疲れはて、消耗しきって、人権を育てるというよりは、問題を追いかけて毎日明け暮れている。そうならないために、非行を生み出さない指導が大切となってくる。本校では、とくに① 学習指導の充実・深化 (学力をしっかりと身につけさせる。) ② 学級づくりの充実 (民主的な社会人としての生き方を学ばせる。) ③ 特別活動の充実 (生徒の自治能力を高める) に重点をおいて、教職員が一致協力してとりくんでいる。

2. 本校の実態

- 生徒数 804人
 - 学級数 19 (に隣1)
 - 教職員数 34人
- 東に姫路市、西に相生市、北に竜野市と隣接し、町の中央に国道2号線が走っている。南には、国鉄のターミナルもあり、通勤に便利のため、ここ数年急激に住宅がふえた。本校も生徒増にともない、今年4月に2校に分離された。国道が通っているため、交通事故の多发地帯であり、排気ガスや騒音のため国道沿いの住民は公害に悩んでいる。国道にそって、モーター、ホテルがたちならんでおり、犯罪の発生の多い(竜野署管内)地域である。
- 生徒は、明朗、素直、挨拶もよくできるが、清掃活動など働くこととイヤがる傾向がある。校内では、問題行動は少ないが、校外での問題行動が出てきている。

3. 本校の実践

(1) 学習指導の充実・深化 (学力をしっかりと身につけさせる。)

- ひとりの生徒の学習権をしっかりと守る学習指導
- 教え込まれるのではなく自分で学びとる意欲に満ちた学習指導
- みんなて話し合い、みんなて考え、みんなてみつけ、みんなてしめぬ。
- 学習内容の本質、中心をしっかりとみきわめ握り下げ高めてゆく。

学習指導五つの構え

- ① 教え込まぬ ----- 生徒達が自ら学びとる力を育てる学習指導を。
- ② 教え過ぎぬ ----- 生徒達の話す力、考える力、作る力、創造する力を引き出し、引き伸す学習指導を。
- ③ かたよるぬ ----- 生徒達の全員参加の中で、ひとりひとりの個性・能力を伸す学習指導を。
- ④ 志しぬ ----- 生徒達の意欲的な家庭学習、自主学習に発展しつなげていく学習指導を。
- ⑤ 怠らぬ ----- 教師自らのたゆまぬ研究により生み出された学習構造と学習方法の創造の上にたつ学習指導

(2) 学級づくりの充実・深化 (民主的に社会人としての生き方を学ばせる。)

(ア) とらえ方

- 人間形成と本校教育目標を達成していくための生徒集団の中で最も重要な基礎集団として学級をとらえる。
- 民主的な社会人としての生き方(ものの見方、考え方、行動のし方)を学ぶためみんなて話し合い、磨き合い、高め合う最も大切な生活集団として学級をとらえる。

(1) 望ましい学級 (ひとりはおみんなのために、みんなはひとりのために)

- ① 解放感に満ち ----- みんながなんでも話せる。
- ② 願いを育て ----- ひとりひとりの願いが大切に受けとられる。
- ③ 人権が保障され ----- ひとりひとりの人権が保障され大切にされる。
- ④ 磨き合い ----- 厳しく励まし合い、磨き合う。
- ⑤ 真実を追求する ----- みんなで真実と理想を追求してゆく。

(2) 具体的実践

- ・生活記録)一トの点検、○班)一ト、○班新聞の発行、
- ・学級通信の発行、○学活を計画的にすすめる充実させる。

(3) **特別活動の充実** (生徒の自治能力を高める。)

- ① 生徒会活動 ----- 全員参加を軸とした自主的な生徒会活動を育成する。
 - 年2回の生徒総会では、必ず各学級目標とその達成状況、学級の様子などについての交流をしよう。
 - 各委員会が、強化週間をもうけて、みんなて決めたことの徹底をはかる。(例えば、整美週間、風紀週間、園芸週間など)
 - 奉仕活動の活発化をはかる。(例、親切実行委、S.L同好会)

② 行事運営の充実

- 遅れた生徒、障害された生徒も、参加するよるこびが味わえ、命のかがやく時であり、場となるよう配慮する。
- 行事のもつ多様な集団生活の中で広い生活経験、肌のふれあいを通して人間関係をただし、深め、定着させてゆく。
- 慣行としての行事ではなく一人一人の全面発達の道すじの上に、更に生徒集団の成長を全校域のなかでためし、たしかめ、よりよい次の実践の土台とする。
- 球技大会、運動会、合唱コンクール、文化クラブ発表会、カルタ会、弁論大会

4. 今後の課題と問題点、

今まで、のべてきたことがすべてうまく行っているというわけではない。非行問題は少ないと言えども、全然ないわけではなく、地域の変化からみて樂觀できない状態となっている。しかも、非行の入り口と言われる遅刻、授業中の私語、忘れものなどは日常茶飯事としてあるし、指導の手をゆるめると一挙にくずれていくだろう。それでは、今後非行を防止するため、さらにどのような点を重視しとりこんでいったらよいだろうか。

- ① 教師集団の共通認識をひろげ、教師集団の一致したとりくみをする事。
- ② 学力と非行は、表裏の関係であり、非行問題解決のなめは、学力問題にあると考える。したがって、この学力の問題について、どうすれば、すべての生徒に豊かな基礎学力を保障できるかを、さらに組織的に研究していくこと。
- ③ 社会の急激な変化にともない、親の生活や考え方がますます多様になってきており、したがって、子どもたちの価値感も様々であることを、認識し、ひとりひとりの子どもを総合的によく知ること大切だと思ふ。
- ④ 本校の生徒は、比較的素直であるので、教師の望む方向にひっぱってきた面がないとは言えない。強制するやり方は、生徒の自主性、主体性を疎外するばかりでなく、反発ともなりかねないので、結果と急ぎすぎないで、じっくりと子どもの言い分を聞き、生徒たちの力で問題を解決する力をつけることも大切である。
- ⑤ 以前(56年度まで)は、7校時バスがあったので、班で助け合い学習ができ、とくに居残りの子がそれによってよくわれ、仲間への信頼感のようなものが育っていたように思うが、「ゆとりの時間」が入ってきたため7校時バスできなくなった。これをどこで保障していくかが問題である。

研究主題

自己表現力(人間性と学力)の豊かさを求めて

バス学習を核とする授業の展開

威岡市立河南中学校 遠畑勝人

1. はじめに

本校では、昭和56年度二学期から、学習指導の成果を上げる指導法として、授業に小集団学習としてのバス学習を取り入れた。

当初は、学習指導法としてのバス学習を中心とした研究実践を重ねていたが、研究が進むにつれて、生徒の全生活場面にバス方式を取り入れることが相乗的に効果を上げ得るのではないかとの討議がなされた。そこで、56年度三学期には、6校時終了後に生活バスの時間を試行的に設定し、実践を重ねた。

本年度4月からは、前年度反省の上になつて、学習、生活の両面にバス方式を取り入れて研究実践を重ねている。先進校の実践に学ぶところが多かつた1年間であるが、ここでは本校の教科指導の一部と、生活バスの実践を報告し、多くのご批判をいただきたい。今後の研究の一助としたい。

2. 主題設定の理由

本校生徒の外観的特徴は、学習面では、学習意欲に乏しく、授業は受身に終始している。発表力や発言力が低く、加えて学習用具の忘れや、課題(宿題)の忘れも多い。生活行動面では、一見明るく素直であるが、表現方法(言説、行動)が稚拙なために相手を不快にさせたり、行動が自己本位であるため協調性がそこなわれたりしている。これらのことは、全体的な雰囲気として、向上の意欲を停滞させ、現状満足ムードを生んでいる。このような状態の背後には、発言、発表に対するひやかしかげり、また、

失敗を極度におそれるあまりの消極性、及び、何事に対しても自信を持ってない等々があると思われた。

そこで、意欲にあふれたいきいきした生徒を育成するために授業で学ぶ喜びを知ることであり、そのためには、自信を持って発表、発言ができる生徒を育てることであると考えた。自信ある発言、発表などの行為は、小集団の中でまず自分の考えを発表し合い、その自信に裏付けられて全体の場で発表することが効果的であるとの結論に達し、学習指導に小集団学習としてのバス学習を取り入れた。

3. 研究目標

学習指導や特活指導の場で、意欲ある生徒を育成していくためにバス学習を取り入れることにより、生徒の表現意欲の高揚にどのような効果をもたらすかを、実践的に明らかにする。

4. 研究仮説

バス学習を組み入れた指導過程により、生徒の自己表現力が高まるであろう。

5. 研究内容

<学習指導>

- (1) バス学習の課題内容と提示の在り方
- (2) バス学習と学習内容の定着について
- (3) バス学習と表現力(発表、発言)について

<特活指導>

- (1) 生活バスの在り方
- (2) 生活バスノート(五動態ノート)の活用
- (3) 係活動とバス学習の在り方
- (4) バス長指導の方法とバス長の活動について

6. 研究の方法

- (1) 文献による研究
- (2) 実態調査と分析・検討
- (3) 授業研究(全教科)
- (4) 教育研究法
- (5) 生活バスノートの在り方
- (6) 他校視察

7. 実践の結果

<教科指導>

理科

57.7.4

- (1) 対象 2年5組 男23名 女20名 計43名
 (2) 単元 「生きている細胞」 細胞も呼吸をするか
 (3) 指導目標 (1)生きている細胞は呼吸をしていることを説明できる
 (2) B.T.B溶液と石灰水で、二酸化炭素が検出されることを説明できる。
 (4) 展開 本時3時限の中の3時限

	学習内容	学習活動	留意点
準備 過程	1. 復習バス 課題 I. 細胞が生きているということは何のようなことでわかるか。また、呼吸とはどのようなことをいいますか。		<ul style="list-style-type: none"> 具体例を上げて説明させる 検証は石灰水とB.T.B溶液で行う。
中心 過程	2 細胞も呼吸している 課題 II 根、花びら、むやしなどが、呼吸しているだろうか。予想と検証方法(実験方法を考之る) 3 実験する(演示実験) 4 結果のまとめ		<ul style="list-style-type: none"> ビニル袋の栓は生徒の目の前で開く。
確認 過程	課題 III 生物の細胞も呼吸していることを、検証方法と対照実験の意味を含めてまとめる。 ポストテスト		

(5) 結果 1. 701. ポストテストによる進歩率

班	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	全体
701テストP ₁	3.5	11.0	16.0	10.8	8.0	3.5	3.5	4.0	4.5	6.0	8.0	7.0
ポストテストP ₂	33.5	37.5	38.0	28.0	26.0	32.5	31.5	30.5	34.5	36.3	37.0	34.2
進歩率%	82.2	91.4	91.7	58.9	87.5	99.5	76.7	73.6	84.5	89.1	90.0	80.5%

*テストは40点満点 P₁, P₂ は各班40点満点の平均

*進歩率 = $\frac{P_2 - P_1}{40 - P_1} \times 100$ で計算した

結果 2. バズ討議の中から (5班)

<課題 I>

- 長 まず最初に、今日の課題の確認とします。 C₁君
- C₁ 細胞が生きてることの証明です
- C₂ それは第二段階でしょう。細胞が活着していることは、どんなことでわかるかでしょう
- C₃ そうです
- 長 再確認します。 C₁君 (C₁発言略)
- では、とういうことで活着しているってわかりますか。
- C₂ 細胞は分裂するっていうこと。活着しているのはね。
- C₁ 原形質流動が受らぬっていうことです。
- C₃ 葉緑体がある。そして、原形質に流されてるってこと。
- 長 呼吸もしてるんじゃない。 C₂さん、このあたりでまとめてください。 (C₂のまとの省略)
- 長 前の時間に、カエルの肝臓が呼吸しているってこと勉強したでしょう。それについて復習します。
- C₁ B.T.B溶液の中に、カエルの新しい肝臓入れたら、肝臓のまわりから黄色になった
- C₂ カエルの肝臓は、呼吸しているために、二酸化炭素が出て水に溶け、B.T.Bの色が変わったのです。
- 長 色の変化はどうでしたか。 C₃君
- C₃ ーとね。B.T.Bの青い色が、肝臓のまわりから黄色になつていった。
- 長 呼吸するということとは、酸素を体内に取り入れて、二酸化炭素を出すことですね。では、これで復習バズを終わります。
- <課題 II>は省略

結果 3 発言チェックカードによる発言と発言内容の表
この研究にあたって、生徒の発言と内容をチェックしていく
発言チェックカードの活用を試みた。様式は次ページのもので、
使用方法は、バズ長が、各人の発言と、発言の内容と、5段階
に評定して記入する方法である。授業後、それを集計し、各班
の討議の淨まりの一部と数表化しようとしたものである。こ
こでは、1つの班の例と、全校全体の集計を報告する。

バス班用発言チェックカード

月 日

校時

学習テーマ () NO.

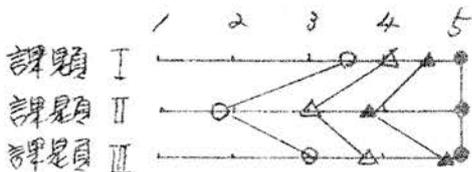
年 組 班

1 2 3 4 5

氏名	課題	課題 I		課題 II		発言
		発言	内容	発言	内容	
	自分の考え バス後	1 2 3 4 5				
	自分の考え バス後					

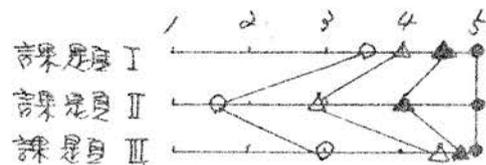
感想

発言の表



○—○ 5班バス前
●—● 同バス後

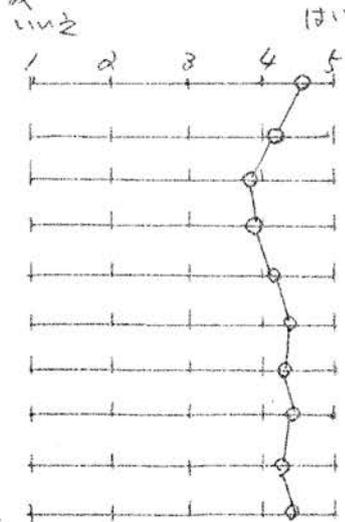
内容の表



△—△ 全体バス前
▲—▲ 同バス後

結果 4. 授業への参加度調査

- 1 授業は楽しくできましたか
- 2 授業は一生懸命やれましたか
- 3 授業はうちとけた気持ちでやれましたか
- 4 授業はしっかりやれて満足でしたか
- 5 授業はよくわかりましたか
- 6 授業内容がためになったと思いますか
- 7 授業で班員は親切でしたか
- 8 1 授業で先生は親切でしたか
- 9 先生のこと、いやなことはなかったか
- 10 班長のこと、いやなことはなかったか



(5)

<特活指導> 生活バスについて。

1日の授業終了後、従来は15分間の短学であった時間を、25分間に延長し、クページにあるような様式の五動態記録ノートに反省を記入している。将来は、家庭学習とのサイクル化ができるようなものにしたいたいと考えている。

(6) 結果の考察

学習指導においてバス学習は、本校生徒に、「教へ合いができていい」とか、「少しずつ発言しようと思うようになって」とかの感想が出ており、またポストテストの結果も80%とよい結果を生んでいる。結果2のバス記録をも、少人数による発表は、割とスムーズに行っている。全本バスについては、発表者は指名で発表する段階にとどまっており、今一步の努力を必要としている。発言や内容の発露も、好ましい方向へと動いている。尚、5班を取り上げた理由は、特別なものではなく、バス記録が比較的他の班よりもととのつていたために引用したものである。

生活バスノートについては、やっと試行から本格的に動き出した段階なので、更に工夫を加えるつもりである。特に、記入項目については、二学期から変えようつもりで、目下検討中である。

8. 子どもと課題

現在、本校のバス学習は、一つの形式をやつとのみ込んだ段階を過ぎて、次への発展を求める意味の低迷期にさしかかっている。5分、7分のバスはやれるが、生徒に20分ぐらいのバスを組ませるための課題をどうするかということと、20分間生徒に手がせ切ることに不安とで、実践が進まなくまっている。そのために、生徒がバス学習を自主運営できる力量をつける方法を求めて、バス長指導が本格的に計画され、実践されはじめたし、生活バスの見直しも行われている。その意味では、まだまだかけ出したばかりの実践であり、試行錯誤のつみ重ねであるといえよう。今後とも更に多くの先進校の奥に学びながら、本校らしいバス学習をつくり上げていきたいものと思っている。(1982.8.2.)

資料 生活バスツアー

月		日		曜日		天気	
学習を ふり返 って		教科名	わかった内容		わからなかった内容		
	1						
	2						
	3						
	4						
	5						
	6						
生活 を ふり返 って	来客・先生・友達 挨拶						
	服 装						
	バス学習への 参加・協力						
	学習中の 発言・発表						
	遅刻・ベル席・集会 時間行動						
	清掃への協力						
学習連絡・課題・宿題		教科名	内 容	課題・宿題	家庭学習（計画と実施）		
	1						
	2						
	3						
	4						
	5						
	6						
感 想							

「バズ学習」をよかったです

山田 孝子

「はい、この単語をよめるよ
一年生の一学期のころの英語の時間。何人かの人達が手を上げてい
るのに私は「こうじゃないかな」と思うけどまちがってたらいいよ
思いましたよ。でも「や」と決心がついてよ。もうと「思」のあた
りまで手をあげたところ。もう他の人とあそびました。
このよのなにとが私には何意もありました。
「他のみんなはちがうことを考えてるのよ。みんなはちがうと考
えると勇気がなくてないのよ。」
その年の9月にバズ学習というのを行いました。
「どんなことを話せばいいのかなあ。最初はみんな感じをわけがわ
らなくて困りました。しかし何度もやってみるとやりやすくなりました。
できました。」

みんな自分の意見をいうふうになつて私もこの4人だけの仲間
と思ひいろいろなことをいふやうになり、そして「ああ、あの
もや、ぱり同じことを考へてんだなあ」と思ふやうになり、「みんな
も同じなら、発表しても良いやうな、それに三山はバズ又話しあ
つたことだからもしおや、といつても何ともない」と思ひもつたあ
つても良いやうなうぶと真気があつてゐるのかもしれない。
それに時々は班全員で「うう、いいわ、みんなの手をあげよ
う」とおや、つてみんなの手をあげたときもありました。そんなとき
みんな同じ考へでし、おや、つて手を上げることをやりました。
二年生になつてもバズをつけていますかもう英語を調べている
発表回数などのときも私は手を上げることをやりますよになつて、
よかつたと思ひます。

それに 気難に話せるので 男女の仲が悪くなるという二と
い (聞)いたと云うに云うと ある班では仲がよすぎて、よすぎて
い というところもあるそうです。前のような班を、をたら、男子
の別、女子の別と分けていて、話しをするとき水げ、となりか人
ぐらいおもしろい。だ。だ。
二のように見てきても、バズになつてからは、みんな、い、二と
ばかりです。二のかわらぬ続けにいささかです。

第7回 全国バズ学習研究大会 (分科会番号 6)

研究主題

学力と人間関係の同時達成

——人間関係を基盤にした統合的教育——

姫路市立白鷺中学校 岸本博好

1. はじめに

現在、私たちに求められているものは「わかる授業」である。「ひとりも取り残さず、ひとりひとりをできるだけ伸ばす学習」の創造であって、すべての子供がたくましく生き、学習によってうまく適応し、創造行為によって生きていくような学習活動の場と教育方法を創造することである。しかし、現実には過重な教育内容によって何人かの生徒が未消化現象を起こし、その結果自ら学習に対する意欲を失ったり、ときには集団からもはじき出されて、生徒指導上の問題をひき起こす原因ともなっている。本校も数年前、例にもれず多くの問題が連続し、異常な状態であった。そこで、教師や保護者が一体となり学校生活の建て直しを図った。根本的な問題解決のための取り組みとして、「学級集団を高める中で、ひとりひとりの学習の成立をめざす人間関係を基盤にした統合的教育」をテーマにかかけ、学習指導、生徒指導、クラブ活動、教育機器の整備等あらゆる分野の見直しを行ってきた。

2. 学力と人間関係の同時達成をめざして

(1) 数科学習

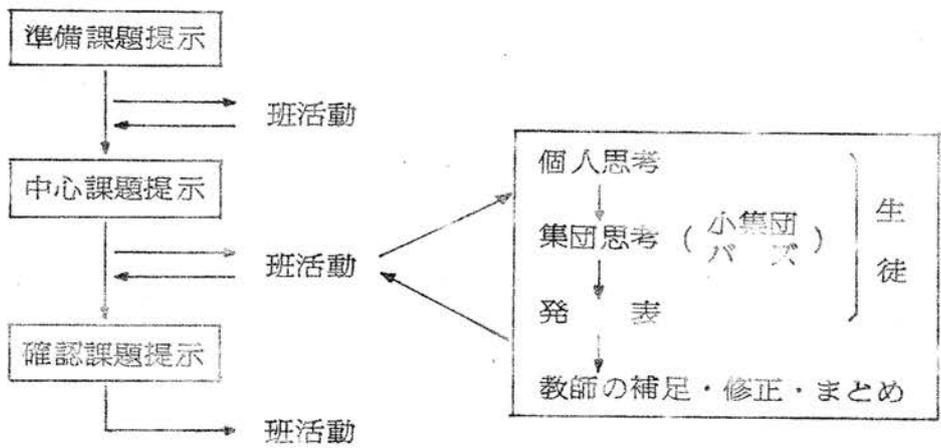
すべての生徒を同一直線上に並べ、学習活動を展開して、目標へ同時に到達させることは難しい。学力や能力に差のある生徒が出発点や到達点は異なっても、教師の適切な指導や生徒と生徒の相互作用によって、各個人が落ちこぼれることなく、自分で満足できる到達をねらっている。

本校では、1時間の授業の中に個人学習、^{4人}班学習、バズ学習、全体討議等を取り入れ、話し合い、確かめ、まとめ、発表、討議の活動を行なわせ、様々な構成反応を起こさせるよう工夫している。

① 本校の考えている統合・止揚の学習の原型

1. 事実をつかむ …… 主張の矛盾・対立をつかむ …… 課題の構成
2. たしかめる …… 相互作用を繰り返しながら価値葛藤させる。
…… 取り組み方
3. まとめる …… 高い段階で自己実現を図る。止揚の道(終結) ぐる。問題点 次時の計画 …… 統合の道

② 授業の流れ(パターン) 三段階四分節の学習の原理



生徒がわかる学習をめざす補助として、教育機器の活用も積極的に取り組んでいる。OHPは各教室に1台、特別教室や各学年にVTR、オープンルームにはTV、VTR、映写装置、シンクロフアックス等の機器が設置され、学習の効率を高めると共に、わかりやすい具体的な資料を豊富に提供させることができ、この設備を活用することにより、基礎学力の定着、ひいては学力保障につながっている。

(2) 教科外学習

ア. バズタイム（生活・学習 月・水の6校時50分）と生活バズ

（火・木・金・土の25分間の生活バズ）で、1日の生活反省を中心にし、各自生活バズノートに記録させ、班 — 全体の対話を通しての望ましい学級の集団づくりをし、生活から出発して、その成果を生活にかえすことをめざしている。

月・水の6校時の前半25分は生活点検、後半25分はその日の学習要点をまとめ、バズの中で学習をより確かなものにしていく。このような手だてで全員参加の学習の習慣や相互の協力的態度を養う。

役割（一人一役）

学 級 —— リーダー、学習長、生活長、健康長

グループ —— リーダー、学習係、生活係、健康係

イ. 学年集会

毎土曜日40分間、各学級のバズタイムの問題点、その他学校生活上の問題点などを学年全生徒自らが考え、話し合うことで人間関係を深め、集団規範をつくり、解決・行動する。

ウ. 止揚の時間

知・徳・体の調和のとれた人間を育成し、自ら考え行動する力を身につけさせる。自主的学習をすすめ成し遂げる力をつけさせ、基礎・基本的事項の定着を図る。

毎週木曜日午後70分、学年・学級のワクをはずし、教科学習の延長として22コース（1コース20名前後）を設定し、全校生を対象に全職員が援助にあたる。

エ. 部活動

17の部活動を設け、上級生・下級生が一丸となって共通の目的に向けて努力することによって、全人格を磨くために規則、礼儀作法、協力、

団結、忍耐、励まし合い等で人間関係を養う。

オ. 集団宿泊訓練

8~9月、10月、150~160人、31日、1週間、
寝食を共にした規律ある共同生活を通じて、学校や家庭、社会生活などで経験できない学習や人間関係を体験し、ひとりひとりが役割遂行の共通目標に参加し、集団の士気、凝集性を高めていく。

カ. 親と子の対話集会

学年毎に全生徒、保護者、学年教師が参加し、学校や家庭でおこる諸問題をバズに取り入れ、大集団で話し合うことによって、共通理解や問題解決を図っていく。

3. 問題点 (悩み)

- ・何をしても無意欲、無関心の生徒を集団にどう参加させるか。
- ・自分で思考せず、他力本願の生徒のあつかい方。
- ・生活バズでの反省がマンネリズム化の打開策。
- ・教材の精選化 (課題の精選化)

問題点 { 学習意欲
増加している集団

問題点を解決するために、
生活バズを有効活用し、
生徒の意欲を高めよう。

第17回全国入学習研究集会(分科会 6)

研究主題 抑たがは人間形成をめざして

姫路市立花田中学校

笹尾 秀 登

学力が生活と学習の結びついた上に成り立つ事を我々は疑わない。今、我々が平等を意識すればする程、その不平等は生活と関り、そして教育現場へとかえって来る。全ては生きるという問題であり、人間の願いである。生きる為には強くなければならず、その強さは育てられなければ成らぬ今をむかえてゐる。逃げる者は逃がしてはならず、交響に対しては正面から応えなければならぬ。その場を一つ解散学級という小集団の中においた。

1. 成すべき事。

今、我々の成すべき事は、彼等が失ったものを一つ一つ拾ってやる事ではなく、彼等をして拾える人間へと育てる事にある。我々は、ともすれば一つ一つを我々の手で拾い戻そうとし、その過程において我々自身が一喜一憂の自己満足に陥ってきた。問題の一つを判り易く解いてやり、できた事に成果を求め、金を立て替え、飯の心配をし、弱い立場にある彼等を必要以上に甘やかす結果になつたかもしれないのである。無駄とは言ひない。しかし、彼等の持つ能力と呼ばれるものが、開発されるべき時を待っている事を知るならば、我々は彼等を自ら立ち得る人間であると信じ、彼等にとって奪われた力を取り戻せる力を開発して、いかねばならぬと思う。仲間の中で、立ち上がる気力と交え合う喜びを見い出させなくてはならない。

2. その場として

時として子どもたらん交響に遭う、それは叫びの形で我々に小づかる。「何もわからへん、黙。で遊んどるしかないんや、それを怒られて頭に来たんや」彼等が言外に語る(それでも黙って座るといふんか、判るよりにわいの目え見て教えたらんかい)という言葉、我々はどうかとらえてきたのか、

すかさず仲間からの援護射撃が入る「勉強なんかしても何もならん、やめとけやめとけ」、しかし、彼等は休まず来る。この解放学級に、何故。

3. 加たかさを知らず

生きるという事がどれ程難しい事か、それを村の父母は知っている、知らざるを得ぬ、ぼろの道がその歩みの下にはあった。この子らにはこんな思いはさせぬ。そして解放学級の礎が生まれた。その中に学び既に若い父母になっている者もいる。

豊かさを考える時、村には大きな変化があった。賑がしい工場の二階、狭い部屋、大家族、共同便所、そんな中から多くの家族が団地に入った。村から出て家を建てた。同村は村の表の顔を少し変えた。子どもたちの生活も変わったかに見える。勉強部屋もできた、奨学金で高校も行ける。静けさが寂しげにできた。それで全てが返ってきたのか。子どもたちにとってこの変化は自らの奪われたものをより見えにくくするものではしなかった。

4. あいつの家もしんどいやな

親の願いを知っているか。その願いがどこから出たのかを知り、今の自分にも村の歩みがかかっている事を知る時、彼等は自らの生きる道を考える。夜の解放会館で、一人の声がそれぞれの胸に響き、おれんところもそうや、あいつんところもしんどいやな、と考え始めた時、見えてこなかった大きな差別とその中でもかきつけている自分の姿が見えてくる。なにくそ、負けるか。その気力は彼等の生き抜くバネとなり、自らの力を見つめ始める。

5. 訴える表現力を求めて

社会の大きさの中で自らが生き抜く為には彼らは求める。語り始めた時に彼等は奪われた時を生産の中にあつた大きな陥穽を感じ、訴える表現力を求める。書き綴る事によって自らをその中に映し出そうとし、書かれたものを読んで自らを確かめ、再び筆を執り訴える。選りぬ筆と、語りきれない表現にいらだち、怒りと自らの未来をぶつけ、そんな中で少しずつ変わって行く。

第17回全国バス学習研究集会

(6分科会)

研究主題

バス学習と同和教育の統合

広島県豊高校区教育推進協議会

広島県立豊高等学校

1. 地域の実態

差別の対象となっている地域で何が起きていたのか。

2. 豊高校(当時下島分校)と差別事件

差別事件で学んだものは何であったか。

3. <教師こそが最大の教育条件>

教育運動の主体者としての意志表明として。

4. 尾三地区高校分校部

分校差別解消のため何をどうすすめたか。

5. 進路保障の観点から。

何よりも学力保障であるところから授業研究へ。

6 義務教育との連携

進路保障と分校差別解消の不可欠な条件として。

7. 下島分校から豊高校への展望

地域総合高校構想

8. バズ学習との出会い

中高連携の所産として。

9. 広島県豊高校区教育推進協議会の結成

「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」

— 幼・小・中・高一貫教育態勢づくりをめざして —

10 実践目標の設定

「共に生きる集団づくりを」

「教育活動の全領域で言語認識を」

11 今私たちが始めたこと

ゆとり時間の活用

12 むすび

「バス学習」の実践

愛知県豊川市

白井 仁

[1] 「バス学習」を始めた動機

- 一律一斉学習の問題点の解決を目指した。
 - イ. 認知的な面から見て
 - ロ. 学級集団形成から見て
 - ハ. 態度的な面から見て

[2] 「バス学習」の教育的意味

- (1) 「バス学習」によって積極的参加が期待できる。
- (2) 「話し合う」ことによって、理解が促進され、拡大される。
- (3) 集団相互作用によって、望ましい社会的態度や価値感が身につく。
- (4) 学級集団の質の向上が期待できる。

[3] 「バス学習」の実践

- (1) 指導の目標
 - ① 認知的目標
 - ② 態度的目標
- (2) 教材の研究
- (3) 分団の編成
 - ① 分団の人数
 - ② メンバーの組み合わせ
 - ③ 組み替えの時期
 - ④ バス長とその指導
- (4) 「バス」の形式（相互作用の形式）
- (5) 授業計画

[4] 効果的な「バズ」の場面

- (1) 授業の導入段階において、その時間の学習目標を明らかにするためのバズ
- (2) 問題点を発見させたり、要点をとらえさせたりするときのバズ
- (3) 内容を読みとらせたり、関係を把握させたりするときのバズ
- (4) 問題解決のためのバズ
- (5) 解答を検討、吟味させるときバズ
- (6) 二つの考えを比較検討したり、対立した意見や見方を調整したりするときのバズ
- (7) 学習内容を要約したり、確認したりするときのバズ
- (8) 共同で練習したり、復習するときのバズ
- (9) 鑑賞するときのバズ
- (10) 実践的な問題を取り扱うときのバズ

[5] 効果的な「バズ学習」の条件

- (1) 学習のための集団育成ということが重視されるべきではない。
- (2) 教材研究がなされていること。
- (3) 学習目標を確認させる必要がある。
- (4) 課題が研究されていること。
- (5) 個々の児童の思考が重視されるべきではない。
- (6) 教師の役割や補足が必要である。
- (7) 学習の結果を確認する指導が必要である。
- (8) 質問が気軽にできる雰囲気をつくること。
- (9) 話し合いの訓練が必要である。

「効果的な課題の条件」

北海道教育大学 鹿内信善

問題、次の課題はなぜ効果的なのか。

次の中で企業といえるものを選びなさい。
 中部電力 春日井市民病院 国鉄 中日ドラゴンズ
 農協 ユニー 名鉄百貨店 トヨタ 農家
 サラリーマンの家産 楽々亭 電々公社

熊谷一文「思考を大切にした社会科の授業をめざして」第15回全国バズ学習研究集会提案要項 1980 より

答え

1a. 手のうちにつかえるカードがあればゲームに参加できる。

そうでなければ、ただつきあっているだけ。

専門用語でいいかえると・・・（ ）は話しあいの材料である。子どもが（ ）をつかえるような課題は（ ）を活発にする。

1b.

四 万	〇 〇	 	〇〇 〇〇	〇 〇	五 万	〇〇 〇〇	七 万	五 万	三 万	 〇〇	 〇〇
--------	--------	------	----------	--------	--------	----------	--------	--------	--------	--------	--------

なら

二
万

がはいつてきても、まちがって切ってしまうかもしれない

〇 〇	〇 〇	〇〇 〇〇	三 万	四 万	 	 	 	五 万	五 万	七 万	〇〇 〇〇	〇〇 〇〇
--------	--------	----------	--------	--------	------	------	------	--------	--------	--------	----------	----------



としておけば、ここに入れてはなさない。

（ ）を整理しておけば（ ）が入ってきてもそれと関連づけて学習できる。（ ）された知識はわずれにくい。

2. 不思議でもなんでもないことが不思議になってくる (知的好奇心)

不思議になると調べてみたい、話しあってみたい。

「のどんこはどんな役割をしていますか。」

- (1) 空気のいがらっぼさを感じる。
- (2) 発声の補助器官。
- (3) のどよりおおきいものをのみこまないようについている。
- (4) なんの役割もはたしていない。

() を喚起する最も簡単な方法は、もっともらしい

() をいくつか提示すること。

3. 驚いたことを他人に話してみたくなる。どうして驚いたか調べてみたくなる

「農家も企業ですよ。」 「え〜ホント〜？じゃ企業って何？」

驚き

知的好奇心

() をくつがえすような () を与えることも

() を喚起する。

「童謡 “しゃぼんだま” はどんなことを表現しているのでしょうか。」

※これは悪い課題 次は良い課題

「童謡 “しゃぼんだま” は実はとても悲しいうたなのです。どんなことを〜」

第17回全国バス学習研究集会 (中・高・研修講座)

研修講座 — バス学習による授業改善 —

「単元見通し学習(ユニット学習)への道」

広島県豊高校区教育推進協議会

広島県立豊高校 越智昭孝

はじめに

私たちの地域におけるバス学習の取り組みは、「バス学習による授業改善」(黎明書房)の中で、塩田先生がご紹介下さっているように、すでにかなりの月になるが浮き沈みをくり返して、いまだにまとまった成果を上げる段階に至っていない。

その現状の中での実践報告といってもこれといえる内容がない。

そこで、主要には豊高校のこれまでの取り組みの流れを追う形で、私たちがバス学習をどのようにとらえているかを報告しご指摘をいただきたい。

大崎高校下島分校の時代に

(新任教師に先輩教師が)

「うちの生徒は馬鹿ばかりみたいなものだから、適当にそればいいよ。」

(生徒の行動を見ての教師のつぶやき)

「あんなことをするようじゃから、うちに来なけりゃならんようになるのだ。」

差別事件から解放運動に出会って

(被差別部落の親から)

「先生方は、子どもをそれこそ素裸にするのに、自分たちは服の上に錢まで着込んでいるではないか。」

(被差別部落出身生徒は)

「やっぱり先生は信用できません。」

(多くの生徒は)

「先生らはわしらを馬鹿にしとるじゃないか。」

(やっど教師は)

「私らのやってきたことは差別教育だった。」

「教師こそが最大の教育条件である。」という命題のもとに取り組みを

(部落問題学習での生徒のつぶやき)

「なんで部落のことをやる時だけ、こんなにしつこいんか。」

(部落問題学習の感想文をよんだ教師は)

「今までいい子と思っていたのは、結局自分にとって都合のいい子でしかなかったんだなあ。」

(また、教師は)

「部落問題学習の時だけ全員100点満点を取らせようというのほどだ、無理な相談だ。」

(やっど授業に眼が向きかけるが)

「授業をどうするという前に、生徒を机につかせる取り組みが先だ。」

「どんなにレベルを下げて、生徒はその気にならん。」

「どだい高校に来るのが無理なんじゃないか。」

(そこから)

「授業者によって、また同じ授業者でも時間によって違うのはどうしてだ。」

「やっぱりわかる授業かどうかということじゃないのか。」

(生徒は)

「先生なんでこれ勉強せにやならんの？ うちの女ちゃんは習ってらんのに立派にやっどとる。」

('74年度新入生のクラスで)

「先生、この問題班になってやっていいですか。」

(教師はキョトンとして)

「やってもいいが、どういようにするんか。」

「おい中学校で何かが起きとるぞ。」

(中学校へみんなを出掛けて、はじめ30分学活をみる。)

「あ、バス学習かい？ ともかく生徒をみんな動かせばいいんだな。」

「ワイワイガヤガヤでいけばいいということか。」(しかし)

「あの子たちを受け取るにはどうすればいいのか。」

「とにかく、真似でもいいから始めようではないか。」

'75年度30分学活を始める。

(あそびに来た他校の教師がみて)

「ありゃ、自習に毛が生えたようなもんじやのう。」

この年、塩田先生が中学校へおいでになる。そのお話しは—

授業の中でこそ態度形成をめざすべきであって、態度的目標が必要である。

管理は教育ではない。教師の管理的体質こそ問題にしなければならぬ。

「おい、わしろがゴチャゴチャやっつたんはこりじや。」

翌年、塩田先生においでいただき授業研を。

(授業者が後の研究会で)

「なにしろ課題がないもんどうまくいきませんでした。」

(塩田先生)

「課題、て何です？」

(授業者)

「——」

そこから、塩田先生に継続的にご指導いただき。

(少しわかりかけたうれしさに、お話し者が)

「先生、バス学習というのをやめて、自然流^{じねん}学習にしましょう。」

単元見直し学習を「ユニット学習」と命名する。

(新任教師が)

「私もユニット学習をしなければならぬんですか。」

(2ヶ月後に)

「本気で考えていたら、やっぱりユニット学習に行き着きました。」

学習指導案のモデルがつくられる。

すると同時にワンパターンユニットが進行していく。

(周辺から聞こえてくる雑音)

「なにもバス学習だけではあるまい。」

「バス学習といわなくていいんじゃないか。」

(それに対応しきれないで)

「なんとしても子どもを変えなさい。」

わかる授業から、わかりたい授業へ。

公開研究会など授業研が点になってつながらない。

(昨年公開研究会の日に、生徒が廊下で立ち話)

「今日みたいな授業をいつもしてくれたらわかるのに。」

再び自主トレ学習会が始まる。

(評価に関する学習会の中で)

「我々は、なんと不勉強ではないか。」

学習指導案のモデルの補正

(目標分析を入れることで、目標の明確化を)

「目標より目標分析の方が内容が大きいんじゃないか。」

教材研究不足が露呈

(今夏の課題)

「バス学習入門から始めよう。」

「おい中学校で何かが起こるとぞ。」

(中学校へみんなを出掛けて、はじめ30分学活をみる。)

「おれがバス学習かい？ ともかく生徒をみんな動かせばいいんだな。」

「ワイワイガヤガヤでいけばいいということか。」(しかし)

「あの子どもを受け取るにはどうすればいいのか。」

「とにかく、真似でもいいから始めようではないか。」

'75年度30分学活を始める。

(あそびに来た他校の教師がみて)

「ありゃ、自習に毛が生えたようなもんじゃのう。」

この年、塩田先生が中学校へおいでになる。そのお話しは—

授業の中でこそ態度形成をめざすべきであって、態度的目標が必要である。

管理は教育ではない。教師の管理的体質こそ問題にしなければならぬ。

「おい、わしろがゴチャゴチャやっつたんはこりじや。」

翌年、塩田先生においでいただいて授業研を。

(授業者が後の研究会で)

「なにしろ課題がないもんどうまくいきませんでした。」

(塩田先生)

「課題、て何です？」

(授業者)

「——」

それから、塩田先生に継続的にご指導いただき。

(少しわかりかけたうれしさに、お話し者が)

「先生、バス学習というのをやめて、自然流^{じねん}学習にしましょう。」

単元見直し学習を「ユニット学習」と命名する。

(新任教師が)

「私もユニット学習をしなければならぬんですか。」

(2ヶ月後に)

「本気で考えていたら、やっぱりユニット学習に行き着きました。」

学習指導案のモデルがつくられる。

すると同時にワンパターユニットが進行していく。

(周辺から聞こえてくる雑音)

「なにもバス学習だけではあるまい。」

「バス学習といわなくていいんじゃないか。」

(それに对应しきれないで)

「なんとしても子どもを変えなさい。」

わかる授業から、わかりたい授業へ。

公開研究会など授業研が点になってつながらない。

(昨年公開研究会の日に、生徒が廊下で立ち話)

「今日みたいな授業をいつもしてくれたらわかるのに。」

再び自主トレ学習会が始まる。

(評価に関する学習会の中で)

「我々は、なんと不勉強ではないか。」

学習指導案のモデルの補正

(目標分析を入れることで、目標の明確化を)

「目標より目標分析の方が内容が大きんじゃないか。」

教材研究不足が露呈

(今夏の課題)

「バス学習入門から始めよう。」

バス学習による授業改善

(中学校・高等学校)

バス学習の呼称

バス学習という言葉を使つては、誤解や速断を招いたり、研究や実践が進んだ現在ではその内容を十分に理解してもらへなくなりました。しかし、今までの研究や実践の過程を風化させないために、今後も呼称し続けたい。

バス学習の背景

(教育目標とその達成を目指す教育方法の現実と改善)

○学力観

実質陶冶 ～ 形式陶冶
知識量 ～

	問題解決力		課題学習
	発見的過程		
	科学的知識		

○人間関係の沈滞化

教育方法 (教師中心～相互作用)

(自然発生～意図的計画的)

過度の競争 ～

	全人教育		社会的側面—集団力学 (group dynamics)
	集団の凝集性		

| 集団のコミュニケーション
| 集団の相互作用
| 集団決定
| 集団の生産性

○教育方法

指導形態

	一斉指導		⊕小集団指導
	個別指導		

○指導方法の単位

個としての存在 ～ バス班

○集団経験

知的学習 ～ 教育的価値 (集団主義的教育+教師のコントロール)

○分割と統合

学級

～

分割 (全員参加) 集団思考
 集団意志決定
 統合 (バズ班はあくまで学級の
 単位)

○学習状況

固定

～

柔軟・力動的

場面・領域・機能

いつでも、どこでも。

教師中心

～

集団指導を軸に

しつけ、生徒指導、社会性の育成

集団決定の力

実行-自発

自己決定

～グループの

科学・技術・情報化

システム的方法

規範力

(教育学)

バズ班の

集団決定

- 成員の

自己決定

場の理論 (field theory)

$B=f(P \cdot E)$

誘発力

～

問題解決変数 (認知的目標)

参加変数 (態度的目標)

～ 学習集団の成長

～ 動機 (認知・能力・社会)

○授業改善の研究方向

教授過程の法則性

指導体制の变革

授業診断

～

実践的実験 (心理学の実験方略
による教育実験)

バズ学習の指導モデル

(バズ学習における一般的な教授＝学習過程)

1 単元の学習内容と教材研究

学習課題の作成

プリテストの作成

ポストテストの作成

2 プリテスト

3 課題の提示

共同学習計画

4 学習活動

課題の提示

課題への取り組み

個人学習－個別化・方略

集団学習

学級全体の学習

教師の補足・修正・まとめ

個人・グループごとの確認

5 最終時間

教師のまとめ（要約）

生徒の確認

6 ポストテスト

認知目標の達成状況

態度目標の評価

$$\text{進歩率} = \frac{\text{ポ一ストテスト} - \text{プリテスト}}{100 - \text{プリテスト}}$$

S P表の作成

評価基準 75%

評価法

認知的目標

プリテスト・ポ一ストテスト

態度的目標

参加度・満足度の測定・学級の社会的関係

(学級構造) の

生徒の自己評価・相互評価

バズグループの構成・話し合い活動の訓練

7 補充時間

75%未満の問題の指導

ないときは応用 (自由に復習させるのもよい)

必要のないときは次の単元に入る